

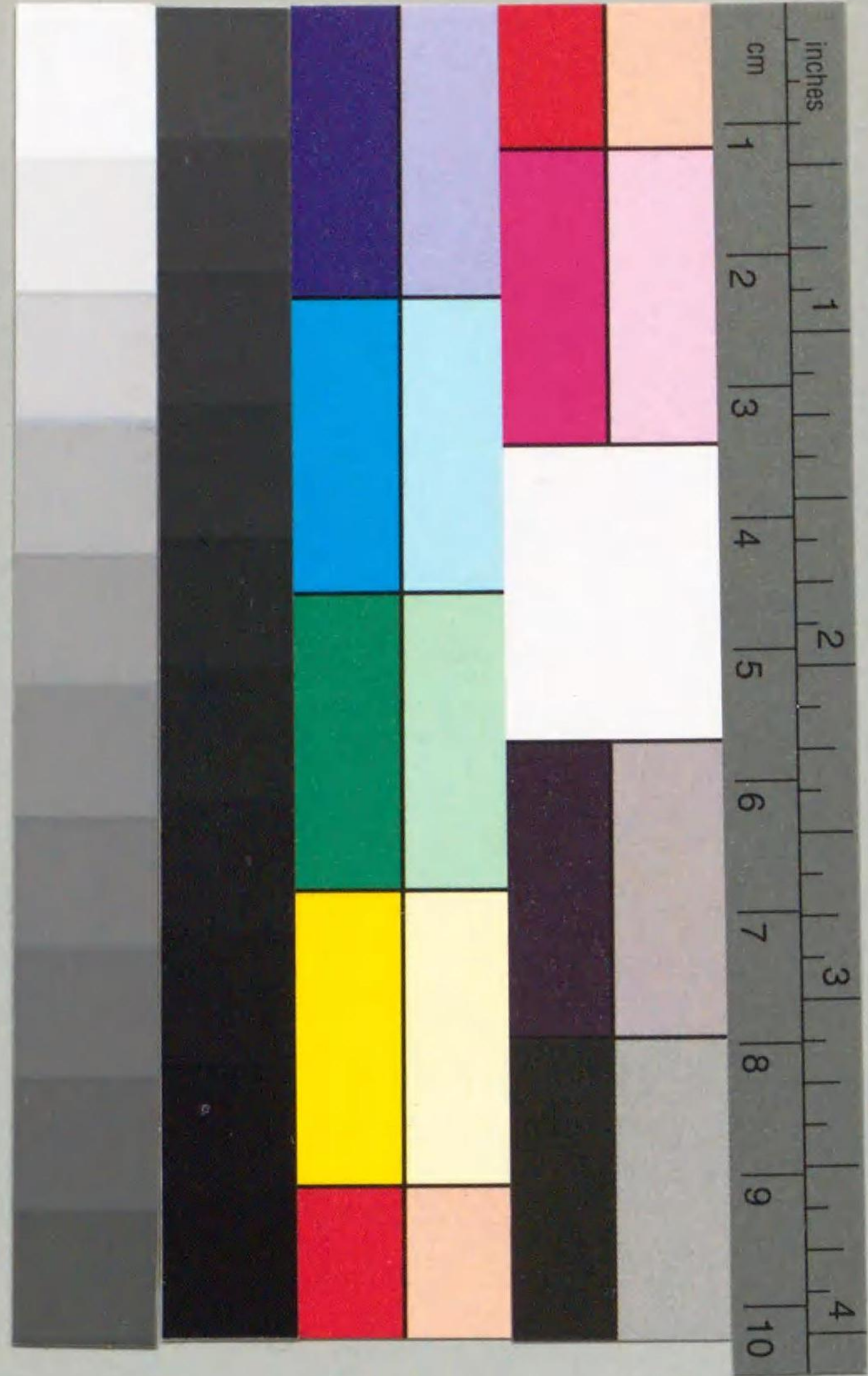
338-24

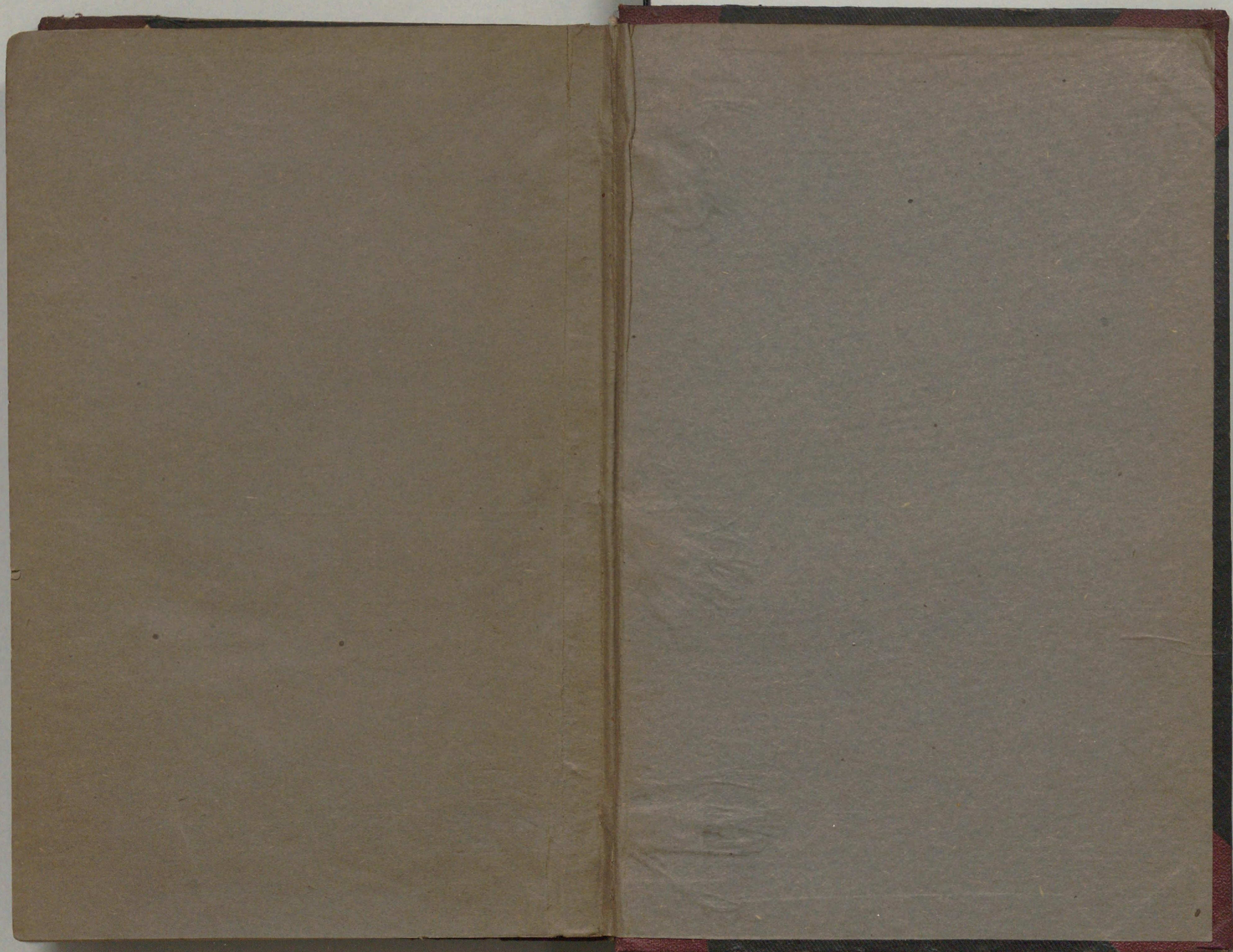


1200501394823

38
24

M





御
意
以
例
形



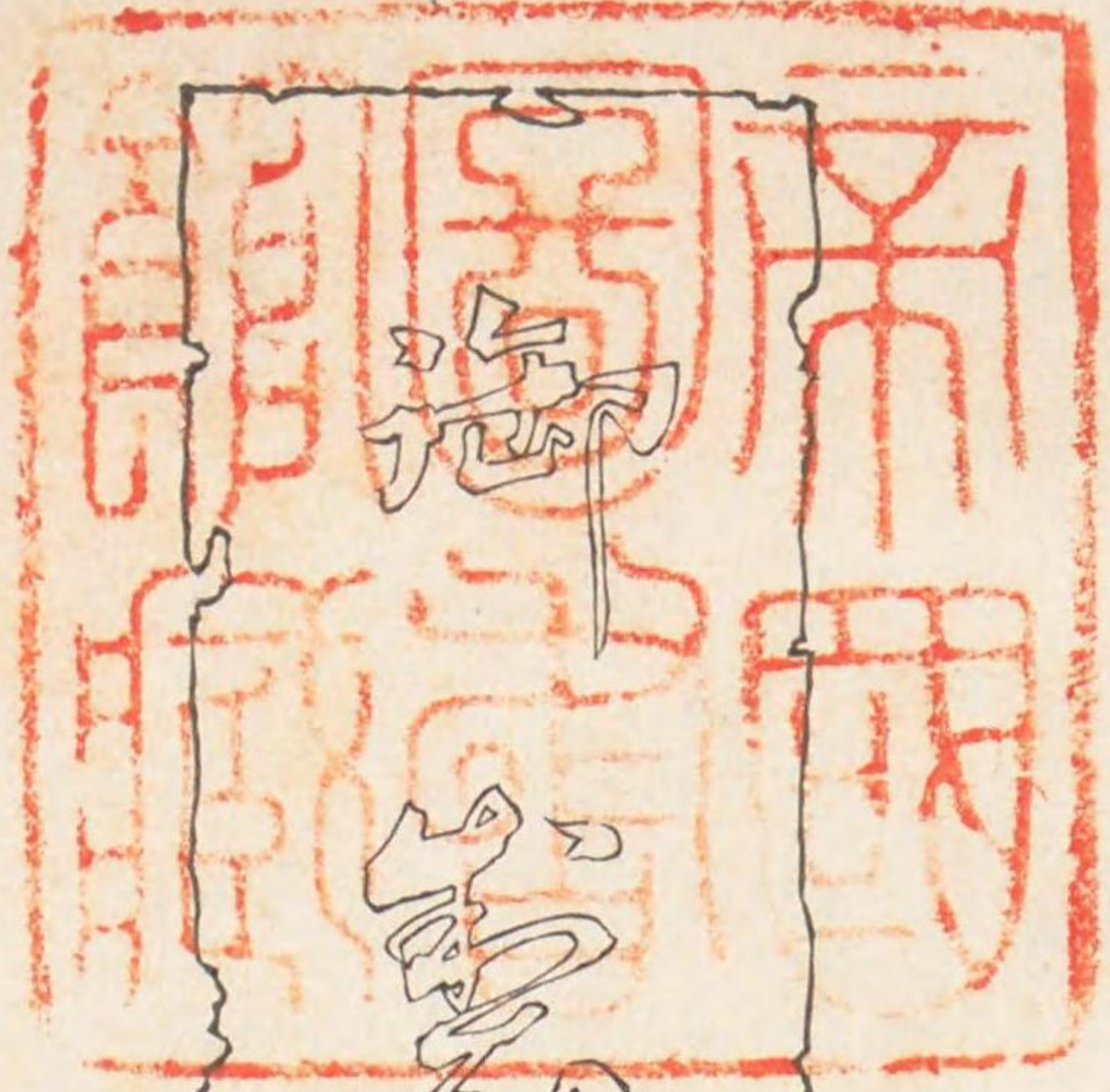
338-24



338-24

338-24

大隈伯爵序
藤川淡水著



大隈伯爵序



東京 有樂社發行

序

我輩平生今上陛下の御製を拜誦し未だ曾て其の意
 味の深遠高なるに感激せずんばあらず思へらく是
 れ眞に天子の御聲なりと蓋し陛下は我歴史上に前
 例なき國運の大回轉に遭遇あらせられ如何にして祖
 宗の偉業を恢弘し臣民の幸福を増進すべきと日夜叡
 慮を苦しめ給ふ其の叡慮直ちに流露して御製となる
 是れ我輩が御製を拜誦する毎に畏くも親しく陛下
 の御聲を拜聴するが如き思ひを爲し陛下が深く國
 を思ひ民を思ひ平和を思ひ人道を思ひ給ふ大御心を
 拜察し奉る所以なり

我輩曩に國民讀本を著はし、畏多くも御製六十二首を
各章首に掲げ奉るの光榮を得て、國民讀本をして、威嚴
ある國民の經典たらしむるを得たり。以爲らく、忠君愛
國は智に非ずして情なり、故に國民をして一首の御製
を拜誦せしむるは、千百の理論を説くに優る。今や藤
川淡水君御製の意を敷演して、お伽噺集一卷を著はし、
書肆有樂社之を刊行して、以て少年の教育に資する所
あらんごす。是れ我輩の意を得たるもの、即ち御製拜誦
の感想を述べて序と爲す

明治四十四年五月

伯爵 大隈重信

はしむき

天皇陛下の御製は、恐れながら、生ける忠君愛國の御教
訓であります。謹んで拜誦します。ご國を思ひ、民を思は
せらるゝ大御心の難有きに、感泣せぬものは一人もあ
りません。御製お伽噺は、拾萬首以上にも達して居る
と承はる、御製の中の二十五首だけを、お伽噺に仕組ん
だものであります。お伽噺の始めには、御製一首宛を
掲げて置きました。先づ御製を拜誦なされたあとで、緩
くりお伽噺を讀んで下さい。

四十四年初夏

淡水

挿繪目録

高天原會議……………一
 穴の中の赤狐……………四〇
 不思議な乞食……………一〇四
 月世界見物……………一八四
 鬼の降参……………二三五

目次

第一 高天原會議……………
うちむかふたびに心をみがけとや
がゞみは神のつくりそめけむ……………一
 第二 雪中の幽霊退治……………
よしあしを人の上にはいひながら
身をかへり見る人なかりけり……………一三
 第三 太郎の空中飛行機……………
大空にそびえて見ゆる高ねにも
のぼればのぼるみちはありけり……………二五
 第四 穴の中の赤狐……………
つもりては拂ふがかたくなりぬべし
ちりばかりなる事とおもへど……………三八
 第五 先生の名案……………
ともすればあらぬ方にと踏み迷ひ
をしへがたきは人のみちなり……………五一
 第六 二人の苦學生……………
開けゆくみちにいでもこしるせよ
つまづくことのある世なりけり……………六四

目次

第七 閻魔の竹裁判……竹馬に心の乗りててならひに
おこたりし目を今おもふかな……………七九

第八 不老不死の妙薬……つねに身のやしなひ草をつみてこそ
ひとのよはひはのぶべかりけれ……………九三

第九 不思議な乞食……たらちねの親の心はたれもみな
としふるまゝにおもひしるらむ……………一〇四

第十 忠義な金時計……時はかるうつはは前にありながら
たゆみがちなり人のこゝろは……………一一五

第十一 鬼神の後悔……おにがみも泣かするものは世の中の
人のこゝろのまことなりけり……………一二六

第十二 家畜の懺悔話……天をうらみ人をどがむる事もあらじ
わがあやまちをおもひかへさば……………一三五

第十三 水と鐵の口論……くろがれの舟もたやすく動かして
つよきは水のちからなりけり……………一四九

第十四 若様と雑誌賣……いぶせしと思ふ中にもえらびなば
くすりとならむ草もこそあれ……………一五九

第十五 舊友懇親會……笛となり弓矢となりてくれ竹の
よばさまさまにかはりゆくかな……………一七一

第十六 月世界見物……さしのぼる朝日のごとくさわやかに
もたまほしきはこゝろなりけり……………一八二

第十七 風の神の風袋……賤が住むわらやのさまを見てぞ思ふ
あめかぜあらき時はいかにと……………一九三

第十八 御馬の感涙……ひさしくもわが飼ふ駒のおいゆくを
をしむは人にかはらざりけり……………二〇六

第十九 金剛石の兜……思ふことつらぬかむ世を待つほどの
月日はながきものにぞありける……………二一五

第二十 犬殺の直市……世の中の人におくれを取りぬべし
すすまむ時にすすまざりせば……………二二七



第二十一 鬼の降参……………二三五

第二十二 離島の大豪傑……………二四七

第二十三 八郎の火灸……………二六一

第二十四 常松土左衛門……………二七六

第二十五 穴の中の骸骨……………二八八

附録……………一

目次終

いかならむ事にあひても擔まぬは
わがしきしまのやまとだましひ

山のおく島のはてまで尋ねみむ
世にしられざる人もありやと

家とみてあかぬ事なき身なりとも
ひとのつとめを怠るなゆめ

やすくしてなしえ難きは世の中の
人の人たるおこなひにして

今はとてまなびの道におこたるな
ゆるしのふみを得たるはらわべ



御製お伽噺

藤川 淡水

第一 高天原會議

うちむかふたびに心をみかげとや

かみみは神のつくりそめけむ

謹註

鏡に向へば、姿形の美しい人は美しく、醜き人は醜く映る

ものである。人の心は、姿形のやうに明かには映らないが、心正しければ、鏡に向つても耻づべき事なく、心正しからざれば耻づべき事がある。して見ると鏡と云ふ物は、打向ふたびに、人の心を磨くべき物として、昔神の作り始められたものであらうと、

鏡の御題で御詠みになつた御製であります。



何千年も昔の昔、八百萬の神々が、高天原にお集まりになつて、毎日々々種々の御會議をお開きになりました。或る日、會長の神様は、多くの神々に向つて、『連日の會議で、木や草を始め、人間の食物、牛馬の食物、食物を盛る器、飲物を盛る器。其外品々の器物調度。大概漏れなく出來上りましたが、人間に取つて一日も無くて叶はぬ物が、まだ一つ出來上らずに残つて居りますから、引續いて今日も會議を開く事になりました。』



と仰せられました。すると八尺以上もある長い顎鬚の生へた、脊の高い神様が立上つて、『人間に取つて、一日も無くて叶はぬ物と云ふのは、一體何んな品物でありますか。』と質問をなさいました。『其れは人間の姿形と、人間の心を映すものです。』會長の神様は斯うお答へになりました。『人間の姿形と、人間の心。會長は其んな重寶な物が出て來る事と思つて居られますか。』『出來る事と思つて居ります。食物、飲物を盛る器より』

も六ヶ敷い事ではありませうが、拙者の信ずるところ

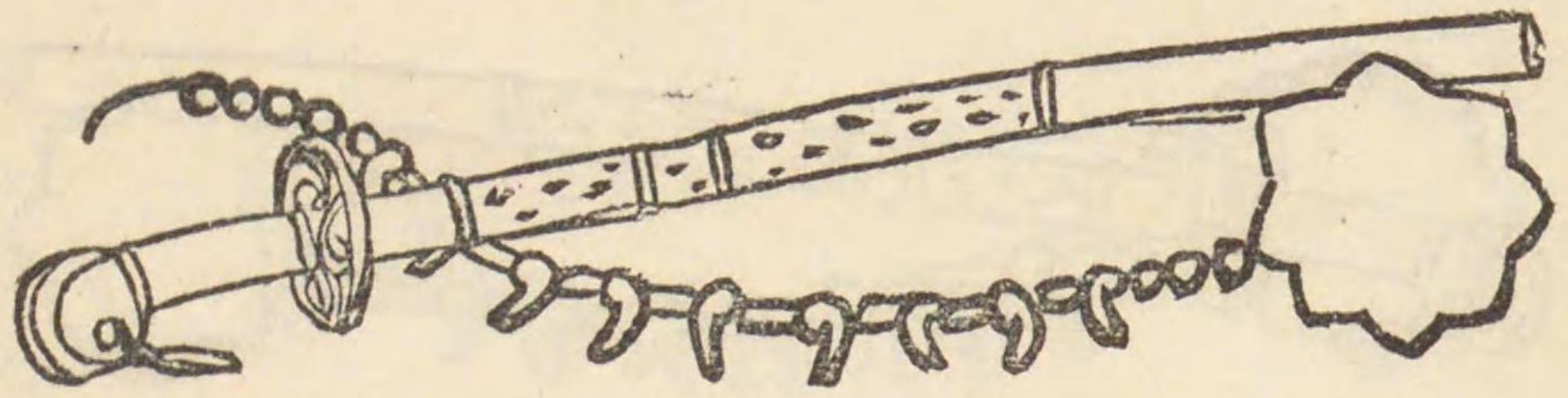
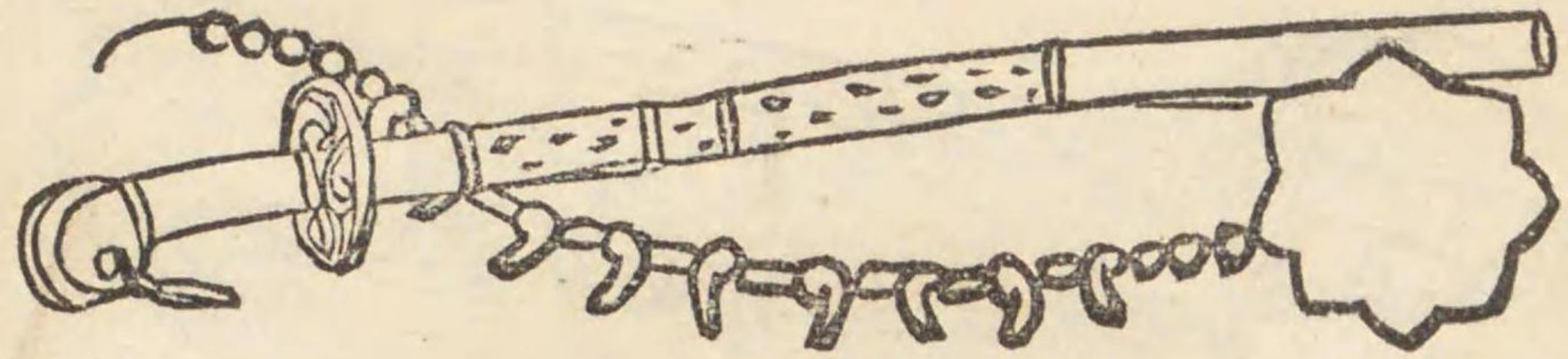
では、必ず出来ない事はあるまいと考へます。』

「拙者は到底覺束ないと考へる。諸君のお考を承はりた

いものです。』

八尺鬚の神様は、威猛高に一座の神々を見廻して坐にお
着きになりました。

「いや、人間の姿形と、人間の心を映す器は至つて必要
なものがあります。必要なものである以上は、何うし
ても拵へて置かねばなりません。神の力で出来ない
物は一つも無い筈です。出来るものであるか、出来る



ものではないか、其んな穿鑿には及ばない。如何にし
て作るか、問題であらうと思ひます。』
布袋のやうに肥え太つた、片眼の神様が大きな聲で仰せ
られました。

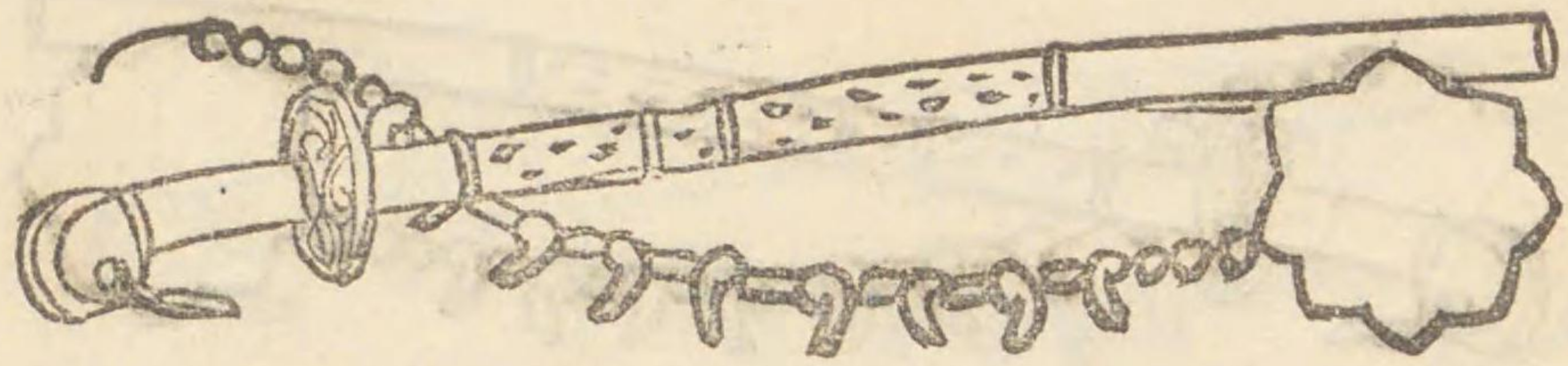
「これは大變な權幕ぢや。如何にして作るか、問題なん
ご、大層ハイカラな事を仰しやるものだ。貴公のや
うな智惠の無い者に、其んな重寶な物の出来る道理は
ない筈と思ふが、何んなものだらう。』

「お椰揄しなされては困る。何も拙者が一人で拵へると
は申しませぬ。智惠の秀れた神々が大勢居られる事で

ありますから、何れ結構な物が出事する事と思ひます
拙者は唯如何にして作るか、問題であると申したけ
であります。』

片眼の神様は微笑みながら斯う仰せられますと、

「其通りです。拙者も如何にして作るか、問題であらう
と思ひます。併し人間の姿形と云ふものは、元來が姿
形のあるものですから、姿形其儘を映し取る物も出來
ないではありませんが、心と云ふものは、姿形のな
いものでありますから、其れを明かに映し取る物を拵
へる事は困難ではあるまいかと思ひますが……」



と若い綺麗な神様の氣遣しげな顔色を、八尺鬚の神様が
見て取つて、

「困難どころか、決して出来る道理はない。出來たら拙
者の命よりも大事な鬚を剃つてお目に掛けよう。』

「其れは面白い。私に三日の暇を下さるなら、立派に拵
へて参りませう。』

と片眼の神様が仰せられました。

「ほう、貴公が拵へて参られるとな。今が今まで拙者が
一人で拵へるとは申させぬと、謙遜をして居られた様
子だが併し三日間に立派に拵へて参られたら、お約束

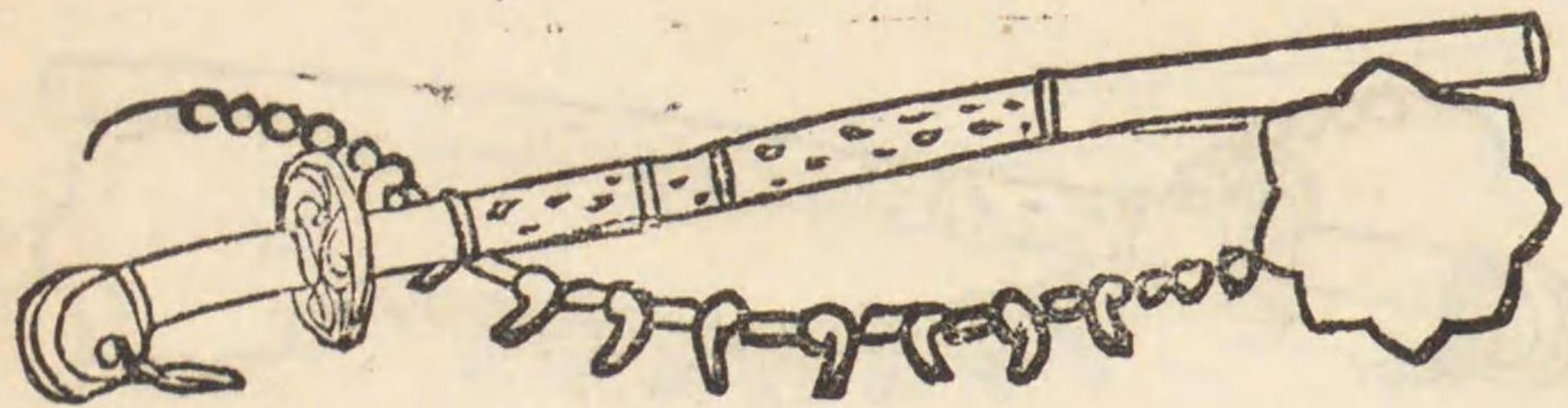
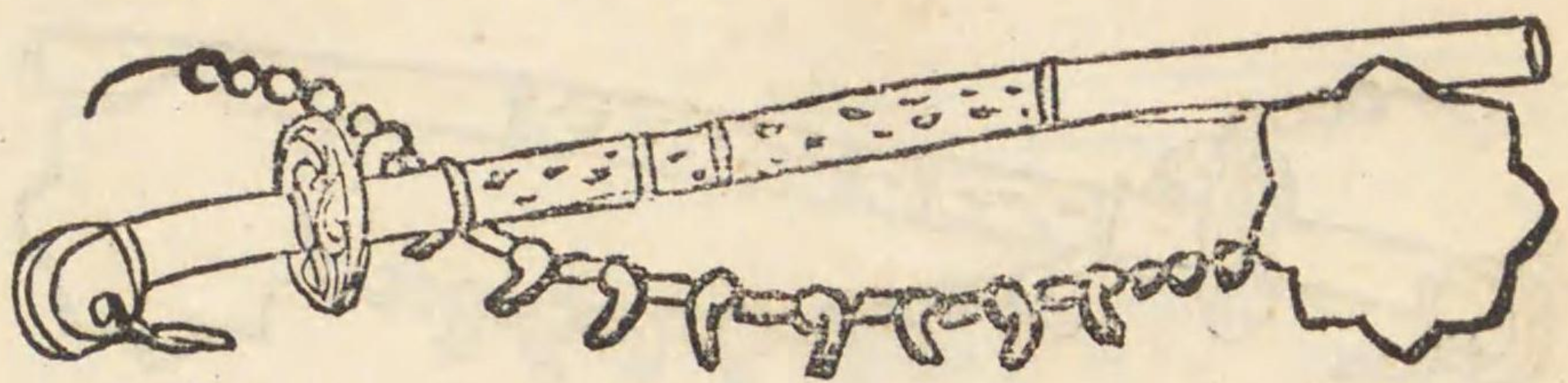


通り鬚を剃つてお目に掛ける。其代り三日間に若し出
來上らなかつたら何うなさる。』

『宜敷い。其時は一つしかない、大事な眼の玉を進呈しませ
う。』

『貴公の眼の玉なんか慾しくは無いが、強いて進呈さ
れるなら頂かう。』

と八尺鬚の神様と、片眼の神様とお約束が出来ました
から、其日の會議は其れで済んで、三日目に又八百萬の
神々が高天原にお集まりになりました。其日八尺鬚の神
様は、到底人間の姿形と、人間の心を映し取るやうな重



寶な物を、片眼の神様が拵へて来る事は出来まいと、高を
括つて待つて居らつしやいますと、聽て片眼の神様は圓
い物を風呂敷に包んで、多くの神々の前に進み出で、
『諸君何卒是れを御覽下さい。諸君の姿形は寸分も相違
なく映る筈であります。』
と風呂敷に包んだ圓い物をお出しになりますと、神々は
争ふて其の圓い物を御覽なされ、

『成程立派に出来ました。只今まで水鏡でなくては自分
の姿形を映す事は出来なかつたが、斯う云ふ重寶な物
があれば、別に水鏡を見るの必要は無い。』



と皆な珍らしげに手に取つて感心をなさいました。八尺鬚の神様は少々驚いて、

『何れ拙者に見せて貰はうか。』

と自分の顔を映して見て、

『驚いた。成程水鏡と同様だ。』

『何うです、お鬚は？』

と若い綺麗な神様が笑つて仰せられますと、

『鬚？鬚はまだ剃るには及ばぬ。成る程姿形は立派に映

つても、心は少しも映つては居らぬぢやないか。心の

映らぬ限りは鬚を剃るごころではない。眼の玉を頂戴

せねばなるまい。』

と横柄に片眼の神様を御覽になりました。すると片眼の

神様は、

『心と云ふものは形の無いものですから、形のあるもの

ゝやうに明かには映りません。併し心が正しくて少し

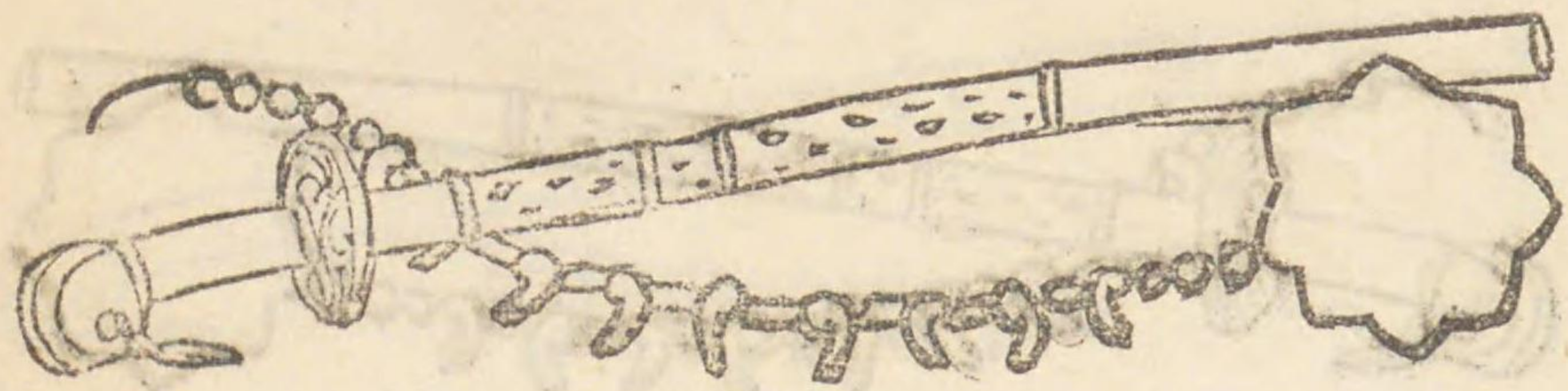
も曇りが無いならば、この鏡に映る顔を見ても耻かし

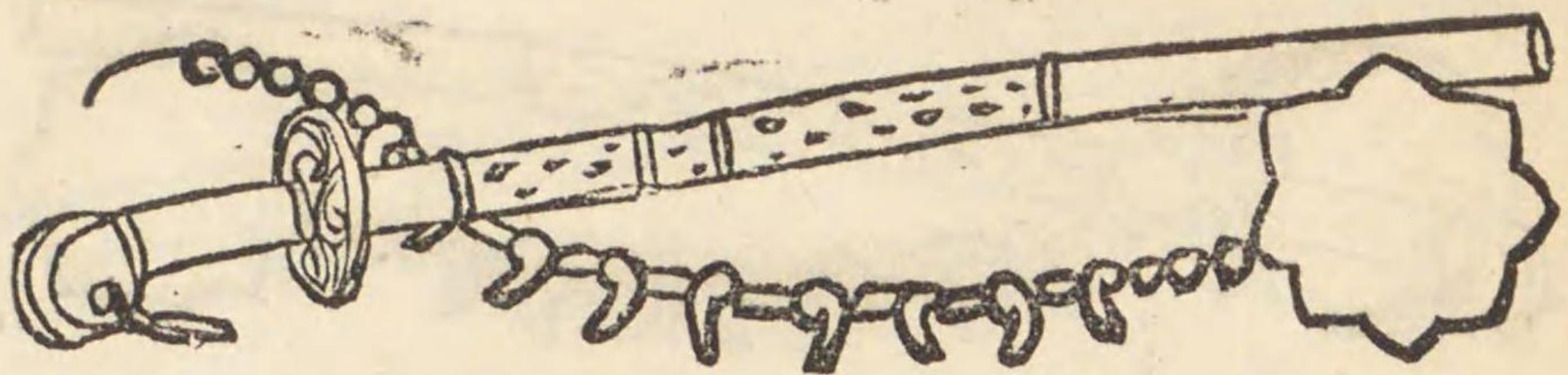
い事はありませんが、若しも心に曇りがあるならば

鏡に映る顔を見て耻かしく思ふ筈です。して見ると心

が顔を通じて映る譯になるではありませんか。』

と仰しやいました。





高天原會議

一一

「實際其通り、貴殿は實に結構な物をお作りなされた。人間の心を磨くべきものとして、後世に残しても差支へはありません。」

と會長の神様を始め、八百萬の神々皆な一同片眼の神様の説に御賛成を成さいましたから、

「成程拙者も合點が參つた。お約束通り鬚を剃りませう。」と八尺鬚の神様も感心を成さつて、八尺に餘る漆のやうな綺麗な鬚をお剃りになりました。

第二 雪中の幽靈退治

ふしあしを人の上には云ひながら
身をかへり見る人なかりけり

謹解

他人の事は能く氣が付いて、彼あするの宜敷い。斯うするの宜敷くないなど、彼是れ批評がましき事を云ひながら、さて自分の身の上の事を顧る人は無いものである。と、行と云ふ御題でお詠みになつた御製であります。

雪の降る土曜の晩、五六名の小學生が、先生のお宅に集まつて、無邪氣な罪のないお話に、夜の更渡るのも忘れ

雪中の幽靈退治

一三

て居りました。火鉢を取囲みながら、戸の隙間から吹込んで来る冷たい風に、身慄ひをする者もありました。

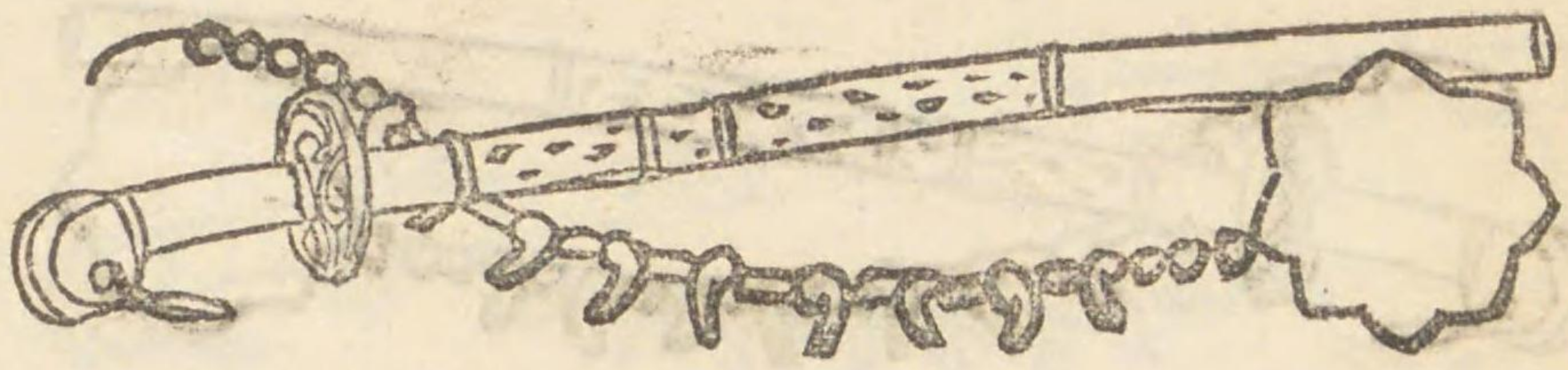
「誰か幽霊を見た者が此中に居るかね？」

と眼玉の大きい、増太郎と云ふ小供が斯う云つて一座を見廻しますと、

「幽霊が世の中に居るものか。居ない幽霊を見た者もある筈はないよ。」

健市と云ふ髪の毛の薄い小供が、伸上つて斯う申しました。

「だつて方々に見た者があるんだから、僕は確に居ると



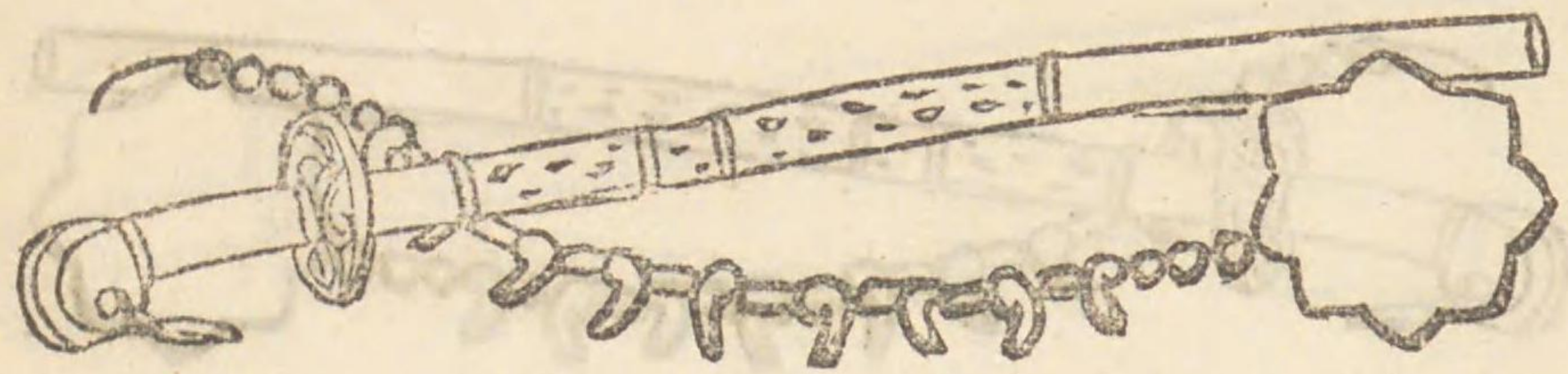
思ふね。」

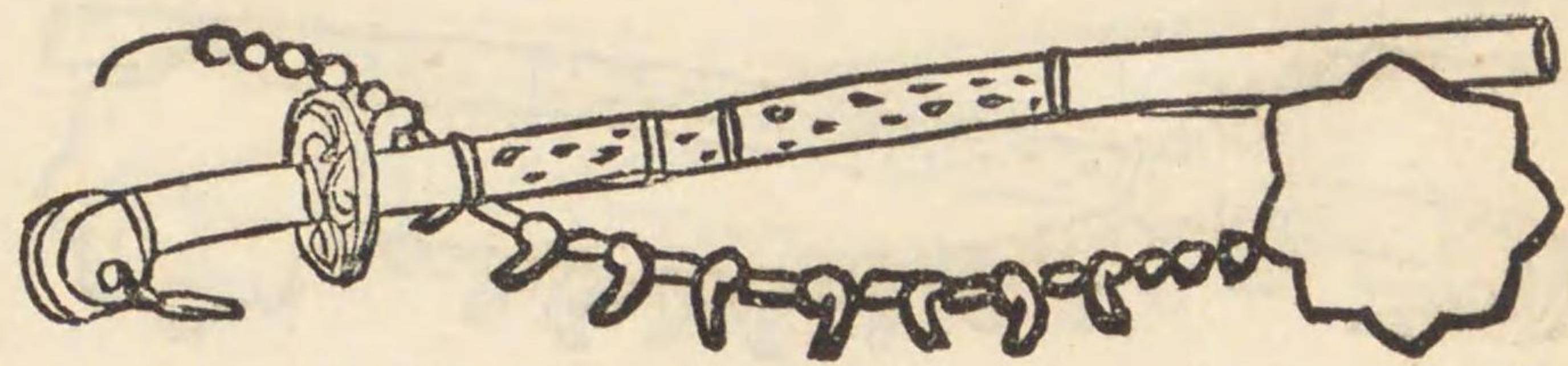
「僕も居ると思ふ。現に大工の寅さんが此間も見て来た

と云つて居たよ。」

と末松と云ふ染物屋の小供は、増太郎の説に賛成をしました。

「寅さんの云ふ事が當になるものかね。彼の人は河童と相撲を取つたの、天神様と議論をしたのと、口から出させな事を云ふ人だ。外の人が見たと云ふ幽霊なら何うだか知らないが、寅さんの見た幽霊なら石地藏か何かだらう。」





五屋の長男で梅吉と云ふ小供が斯う云つて笑はせました

「寅さんばかりではない。外にも見たと云ふ人は澤山あ

るんだから、幽霊は居ないと云ふ方が嘘だ。」

「居ないと云ふ方が嘘ぢやない。居ると云ふ方が嘘だ。

幸ひ先生が居らつしやるから、先生に伺つて見ようぢ

やないか。」

と健市は、幽霊の居るものか、居ないものかを先生に伺

つて見ますと、

「居ると云ふ説もあり、居ないと云ふ説もあるやうです

が、居ないと云ふ説の方が有力ですね。居るにしても



居ないにしても、皆さんに取つては左程必要な事でも

ないのですから、居るの居ないのと議論をするには及

びますまい。」

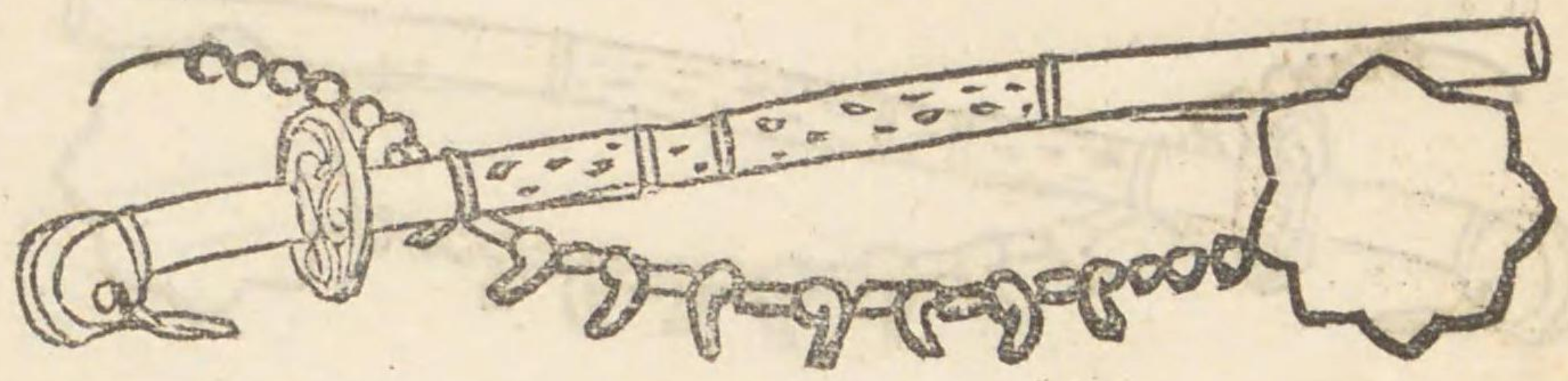
と先生は斯う仰しやつてお笑ひになりました。

「ぢや先生。私の近所の墓にも幽霊が出ると云ふ評判が

ありますが、出るものが幽霊でないとするれば何でせう

？」

増太郎が膝を進めて申しますと、
「何れ狐か狸なんでせう。」
「狐狸だとすれば不都合ですね。動物の癖に人間を嚇



すなんて失敬極まる。諸君。今夜雪に乗じて狐か狸の幽霊退治を爲ようぢやないか。

「賛成。大賛成。」

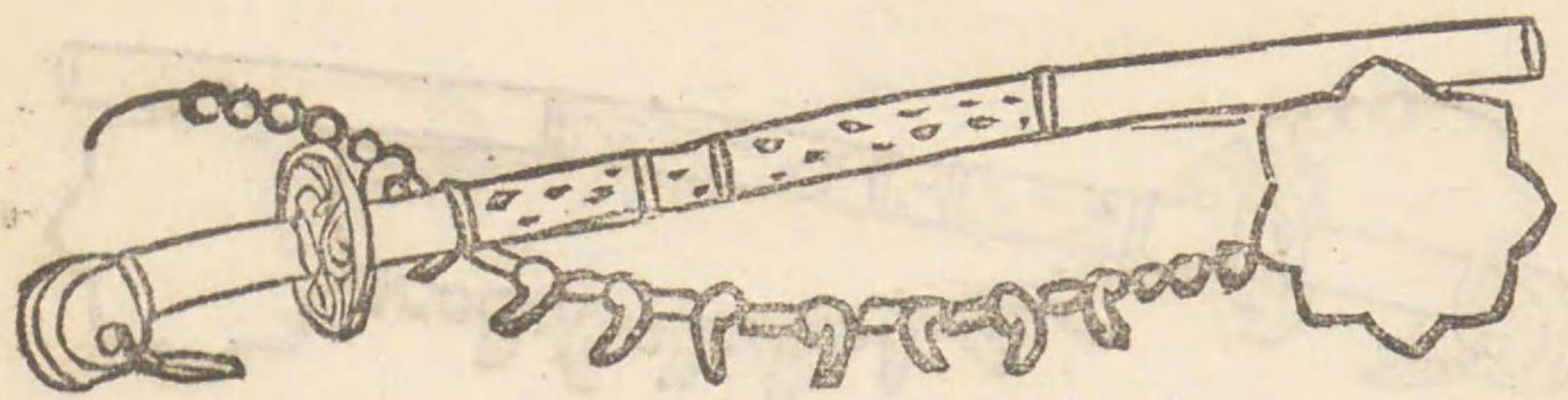
「早速出掛けよう。」

と皆な増太郎の發議に同意を致しました。先生は笑ひながら、

「活潑ですな。併し最う遅いやうだから、幽霊退治は又の事にしちや何うです。」

と仰しやいましたか、

「遅くてなくちや出ないと云ふ評判です。一時間もする



と退治て参りますから、其れまで先生起きて居て下さい。」

と先生のお止めなさるのも聞入れず、一同ドヤ／＼と幽霊退治に参りました。彼是れ卅分も経つたかと思ふ頃、眞先に健市が歸つて來ました。

「只今歸りました。」

「何うです、幽霊退治が出来ましたか」

「何にも出ないのです。詰らないから私だけ先に歸つて参りました。幽霊は出ないまでも、狐位は出るかと思つて居ましたが駄目でした。外の連中は、今に出る今

に出ると云つて、首を長くして待つて居ります。出るまでには凍えて死ぬかも知れません。馬鹿な連中ですね。』

と申しました。すると間もなく、梅吉が歸つて参りました。

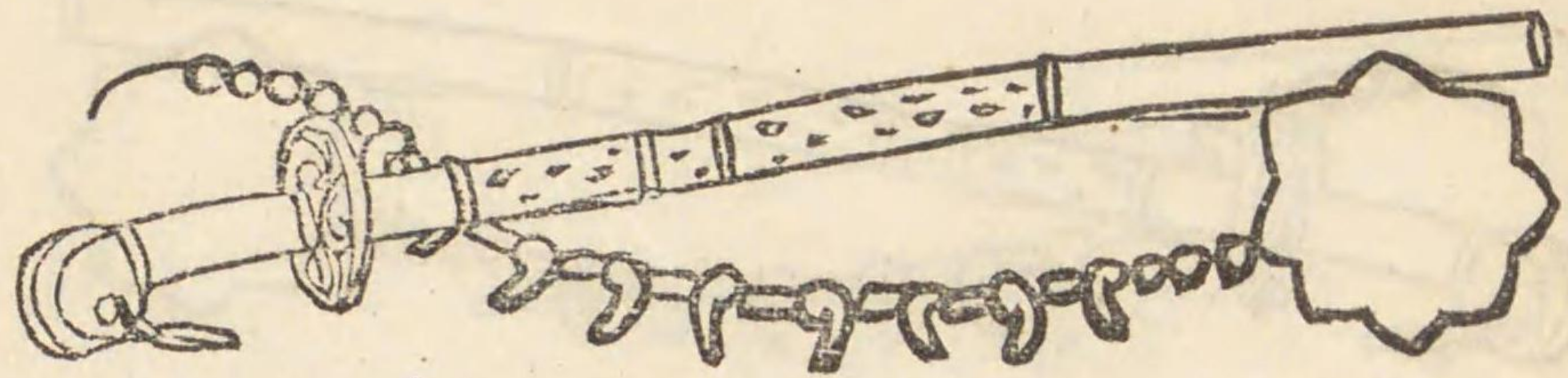
『連中は何うしたかね?』

健市が尋ねますと、

『まだ居るよ。仕方のない奴等だ。雪の降る中に腹這つたりして、幽霊を待つて居るんだ。まるで狂人だね。』

と梅吉は火鉢の火に手を翳しながら、

『君を臆病だつて云つて居たよ。』



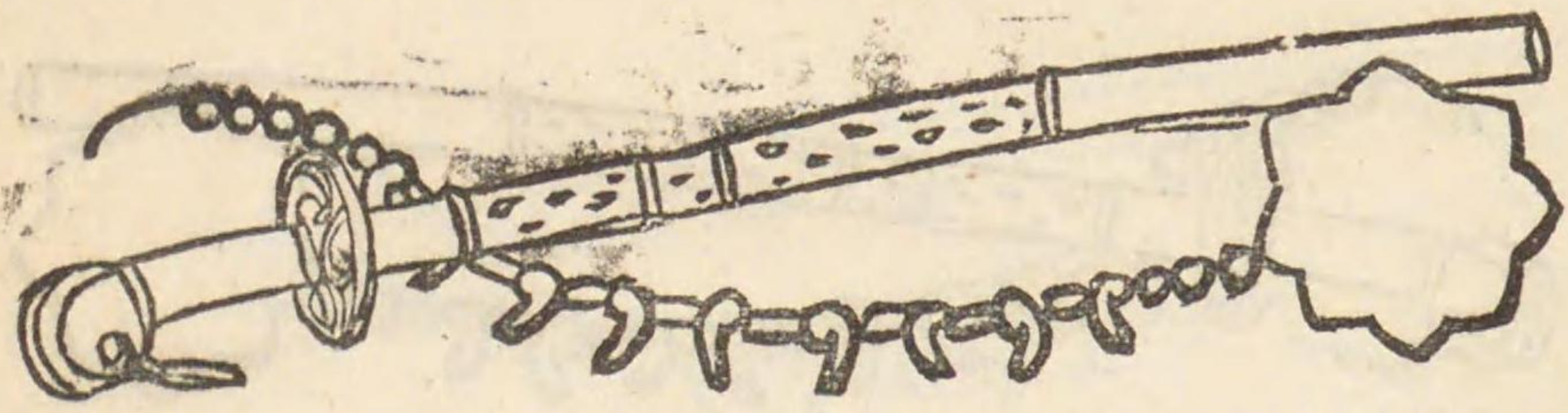
『失敬だね。野蠻人の癖に……』

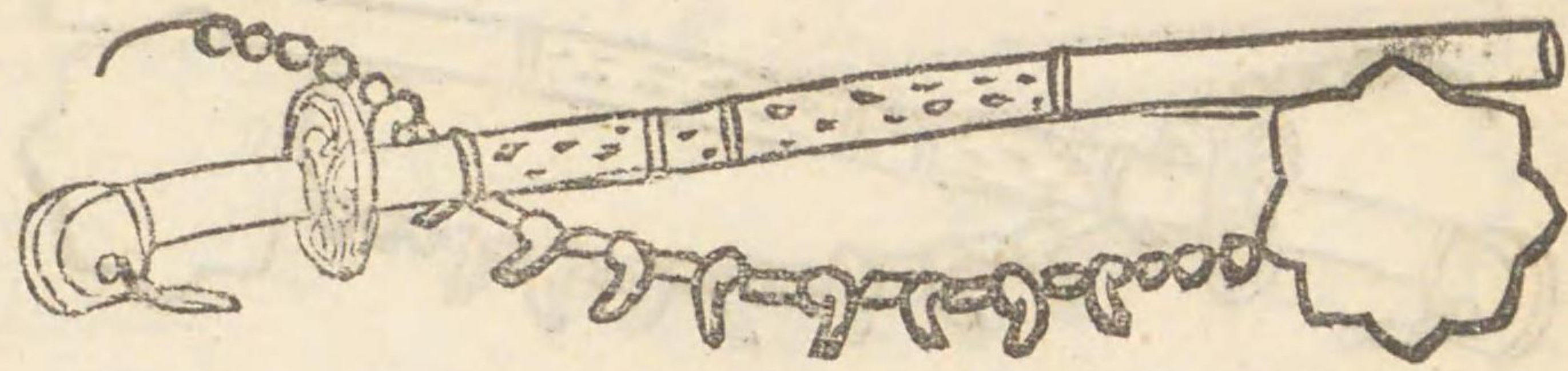
健市は腹を立て、頻りに増太郎、末松などの悪口を始めました。すると臆て幽霊退治の本部も引上げて参りましたが、皆な寒いのでガタ／＼と慄えて居りました。

『到頭出なかつたらう。』

健市が椰揄に掛りますと、

『君や梅吉君のやうな臆病者は居ない。勇氣と云ふものは爪の垢程も無いんだね。其れで第二の國民と云へるかね。藪の中でガサと音がしても喫驚、墓場の花筒が倒れても喫驚。』





と増太郎が口を尖らかして攻撃しますと、

『馬鹿な事を云ふもんぢやない。臆病なのは君等だ。一

人で歸る事が出来ないものだから、止を得ず今まで居

たんぢやないか。』

健市も負けては居りません。増太郎に食つて掛りました

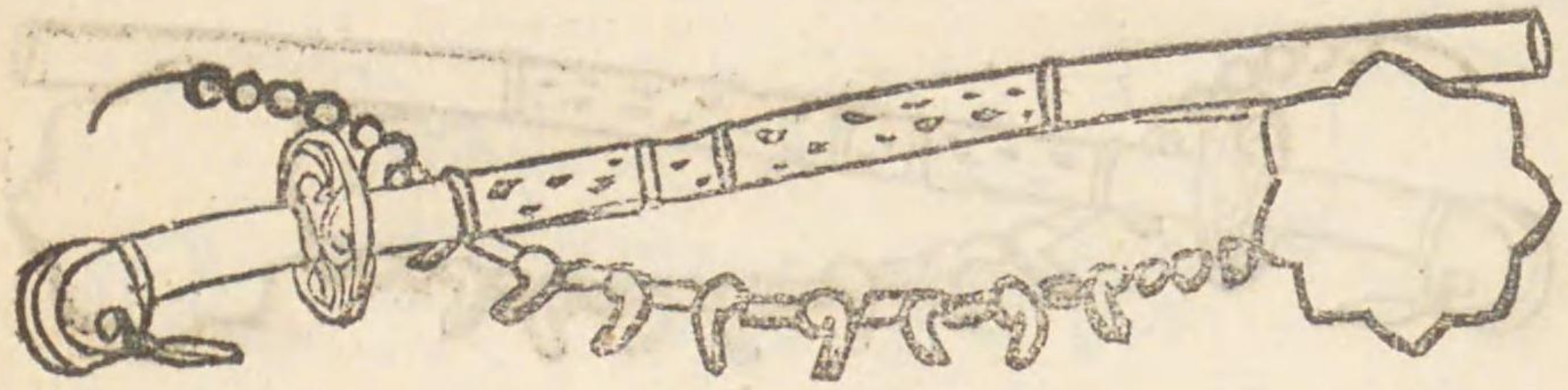
が、此時先生は、

『お待ちなさい。人の缺點を探したり、人の臆病を嘲つ

たりするものではありません。』

と仰しやつて、一同を見廻しながら、

『今夜の事に限らず、誰でも人の行の善悪を彼是れ批評



する事は宜敷くない。人の行の善悪を批評するより、

自分の行の善悪に就て考へて見ねばなりません。曾子

も日に三度吾身を省るゝ云つて居られる。殊に皆さん

は、私が此間學校で申上げた、天皇陛下の御製を忘れ

ましたか。『よしあしを人の上には云ひながら、身をか

へり見る人なかりけり。恐らく皆さんはまだお忘れて

はないでせう。誰は野蠻人だ。彼れは臆病者だ、人

の事ばかりいろく批評をしないで、自分の身を顧て

御覽なさい。自分の悪い事は棚の上へ上げて置いて、

人の缺點を探して悪口を云ふやうでは、到底立派な人

になる事は出来ません。』

とお訓めになりますと、

『先生私が悪う御坐いました。』

『私も悪う御坐いました。』

と皆な先生の前に頭を下げ、一同仲善く打揃つて、自分々々の家に歸つて行きました。



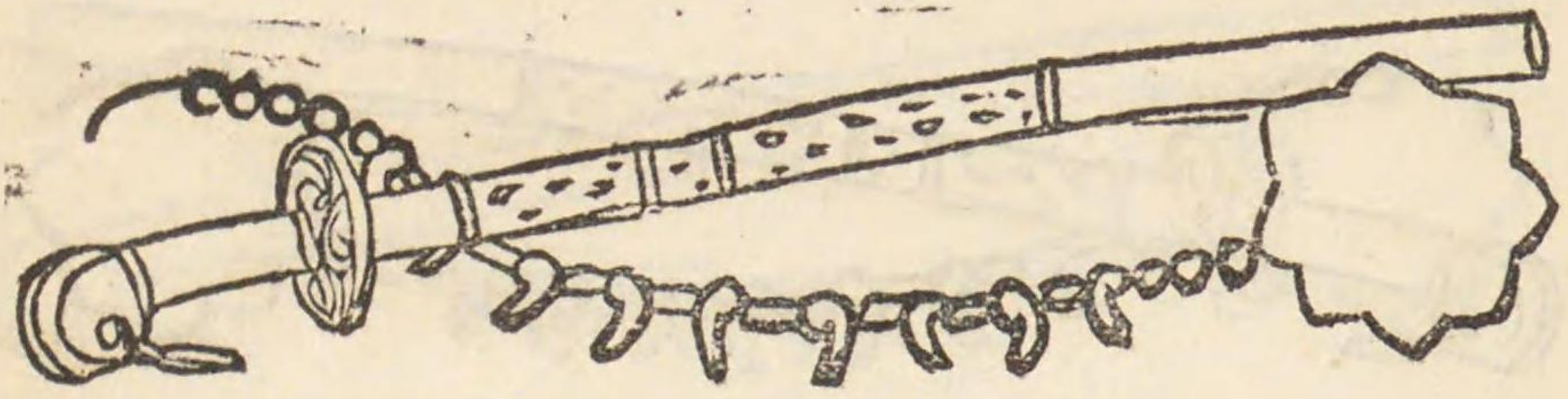
第三 太郎の飛行器

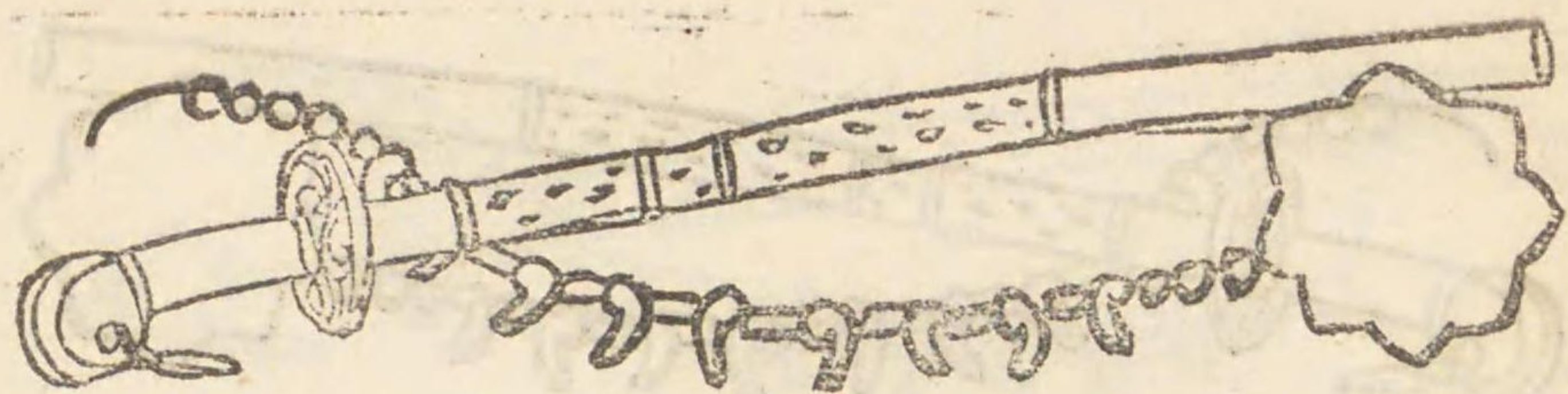
大空にそびえて見ゆる高峯にも

のぼればのぼる道はありけり

謹解 高く大空に聳え立つて、人間業で登る事は出来まいと思ふ程の高山にでも、登つて見れば登らるゝ道はあるものである。と仰せられて、如何程困難なる仕事であらうとも、必ず成功すべき手段方法はあるものである。と云ふ意を込めさせられた御製であります。

太郎は學校から歸ると、一室に閉籠つて、何か一生懸命





に研究をして居る様子ですから、お父様、お母様は、何んな物を太郎が拵へて居る事かと、

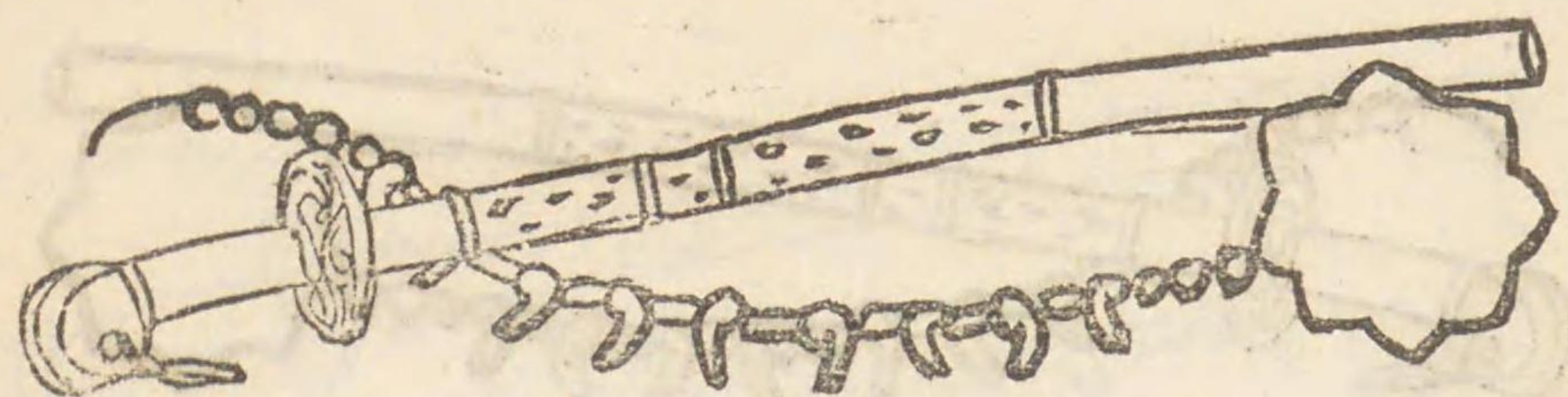
「太郎や、お前は毎日何か拵へて居るやうだが、一體何を拵へて居るんですか。」

とお尋ねになりますと、

「僕は空中飛行器を拵へて居るんです。」

「空中飛行器？ 其れは面白い。出来さうにあるかね。」

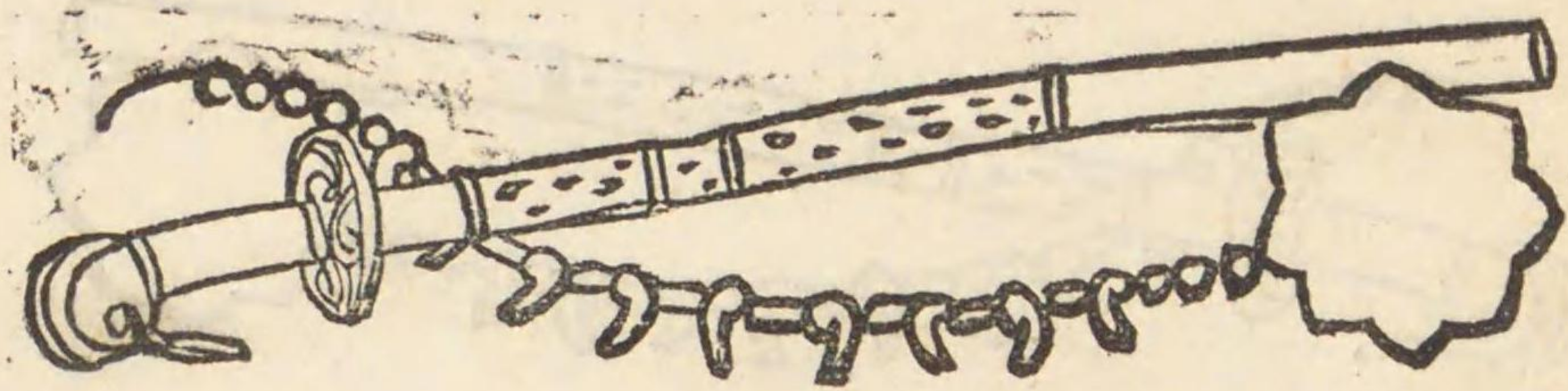
「中々六ヶ敷いんです。けれども僕は屹度拵へます。日本ではまだ空中飛行器の研究が進んで居ないんださうです。僕は其れが残念で堪らないんです。」



太郎は外國の例を引いて、

「外國では中々研究が進んで居るさうです。大西洋を横断したり、アルプス山を越えたり、實に活潑ぢやありませんか。併し日本ではまだ東京灣の横断も出来ねば、道灌山を越える事も出来ないでせう。僕は其れで日本が文明國と云へるかと思ひます。獨逸にだつて、佛蘭西にだつて飛行器學校があるんださうです。無いのは支那と日本位なものでせう。其れだけ飛行器の研究が進んで居ないのですね。」

學校で聞いて居りますから、中々飛行器の話詳しく知



太郎の飛行器

つて居ります。

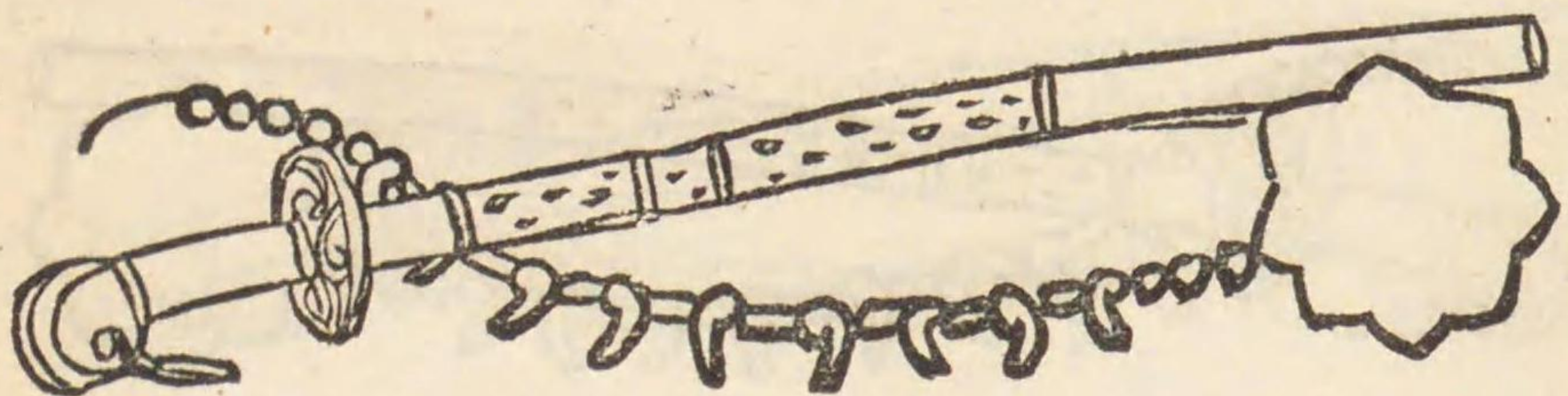
「其れはお前の云ふ通りだ。世界各国の飛行器が進歩する日になると、必ず空中戦争が始まるだらう。日本も今の内に研究して置かないと、其時になつて迷惑をするだらう。」

とお父様が仰しやいますと、

「僕も其れを心配して居るんです。」

と大人らしい事を云つて、

「奈良原式だつて、伊賀式だつて、まだ完全だとは云へないんださうですね。何年も懸命に研究しても完全な



太郎の飛行器

飛行器が出来上らないのを見ると、餘程六ヶ敷いものに違ひないんです。けれども僕は小供の乗る位な小さい飛行器なら、格別六ヶ敷い事ではあるまいと思ひます。僕が小供の乗る位な小さい飛行器を拵へても、矢張り國家の爲になるでせう。其れを見て學者達が大人の乗るやうな大きな飛行器を拵へると、其れで空中戦争にも参加されますからね。」

「其れは参加されるが、お前の飛行器は一體何んな物かね。出来て居るだけの物を持つて来て御覽なさい。」
「まだ駄目です。思ふやうにまだ巧く出来ないです。」

三〇
僕の飛行器には汽罐がありませんから、中々巧く飛ばないんです。』

『汽罐は無いのか、汽囊は何うかね?』

『汽囊のあるのは、彼れは飛行器ではありません。飛行船ですよ。』

『あ、彼れは飛行船かね。駒場の農科大学に落轉ちた奴は?』

『彼れは山田式の飛行船です。近々東京灣を横斷するさうです。大きな氣囊が見つともなくて、僕は餘り好きではありません。』

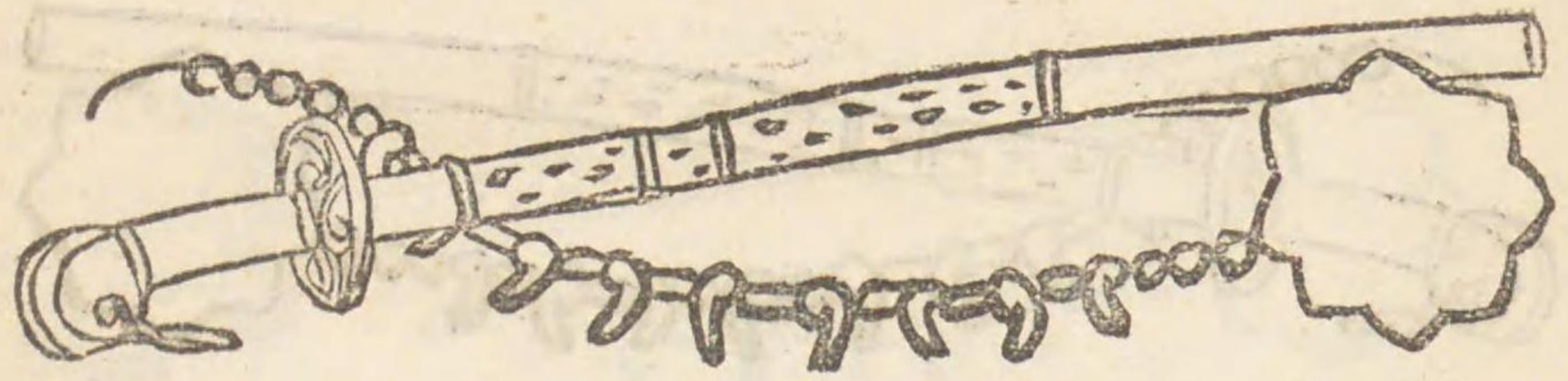


『お前の好きなのは、去年代々木の練兵場で、徳川大尉と日野大尉が擧げた飛行器だね。』

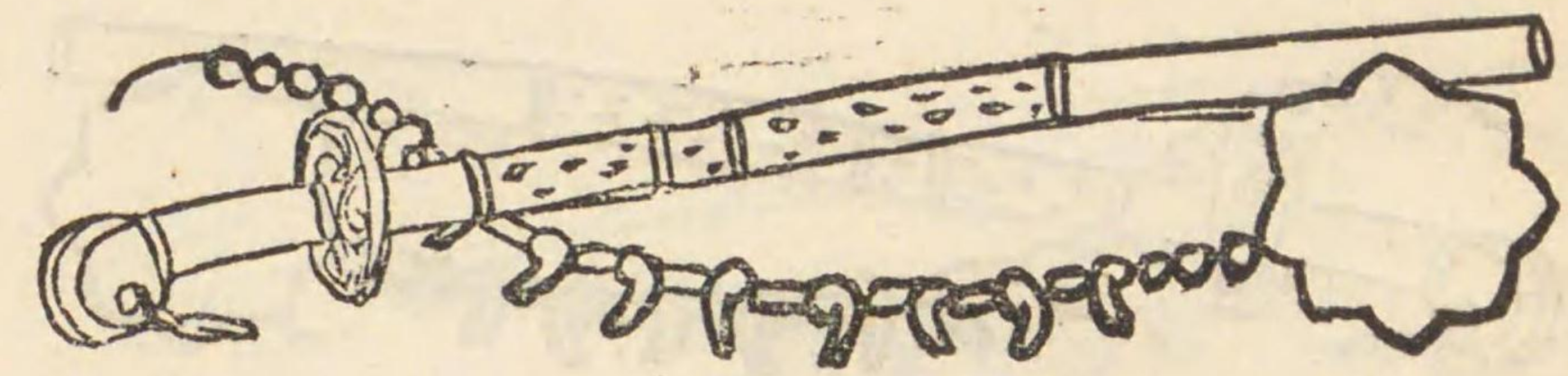
『彼れです。彼れでなくちや僕は好きません。來月になると僕の飛行器の試乗を遣るんです。其時は見物に來て下さい。』

『今から御案内かね。併し飛ぶか知らんてな?』
『飛びますとも、受合ひです。』

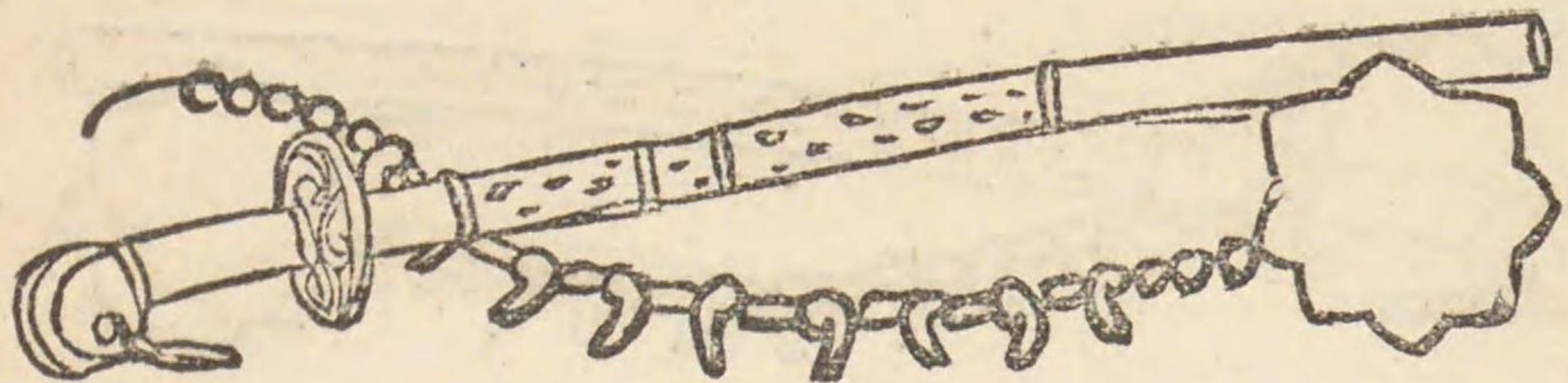
と太郎は勇み立つて、其れから毎日飛行器の發明に苦心をして居りましたが、何うも太郎の思ふやうに巧く出來ないものですから、疝癩を起して出來掛けの飛行器を壞



した事も度々。



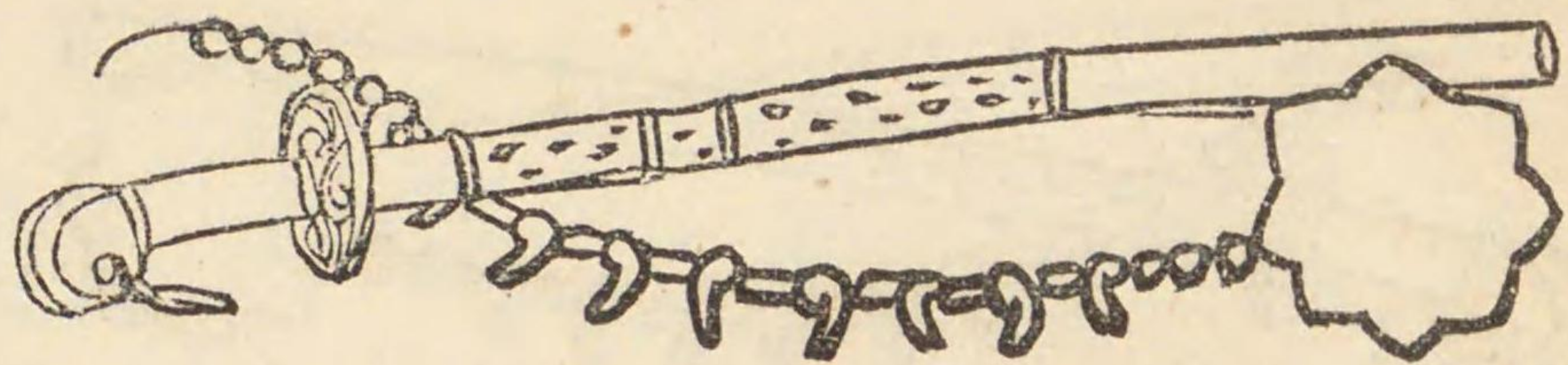
『最もう飛行器の研究は止よさうか知らん。』
と思おもつた事ことも一いち度どや二に度どではありませせん。元もと來らいが小こ供どもの事ことですすから、小こ供どもの智ち恵ゑで易やす々くと飛行器の出來上ある筈はずもなないのです。けれれごも太た郎らうは思おも返ひかへし思おも返ひかへしして、物ものの二に三さんヶ月かげつと云いふもの、一いつ生しょう懸けん命めいにななつて研究けんきゆうを致したしましたが、熱ねつ心しんと云いふものは恐おそしいもので、三さんヶ月かげつ目めには何なにうやら斯かうやら、五ご六ろく間けんから七しち八はち間けんまで位ぐらゐのところは飛とべるやうにななりました。其それを御ご覽らんにななつたお父とと様さまも、お母かあ様さまも大たい層そうお喜よろこびにななつて、



『小こ供どもの智ち恵ゑだつて中なか々く馬ば鹿かにはさされないものだ。汽き罐くわんななしの飛行器が兔とに角かく飛とべるやうにななつたから不ふ思し義ぎななものだ。』

と仰おつしやつて居からつしやいました。太た郎らうは益ます々く研けん究きゆうを進すすめて、着ちやく手しゆしてから十五じふごヶ月かげつ目めに稍やう完くわん全ぜんな飛行器ひかうきを拵こしらへあげ、學がく校かうの運うん動どう場ばで試し乗じやうを致いたしましたが、思おもつたよりは高たかく擧あげ、遠とほく飛とべたものだですから、校かう長ちやう始はじめ職しやく員いん生せい徒と一いち同どう萬ばん歳さいを唱となへ、飛ひ行かう器きから降おりて來きた太た郎らうを取とり巻まいて、大おほ勢せいでワい〜云いつて胴どう揚あげをしました。

『太た郎らうさん、飛ひ行かう器きを作つくり上あげるままでには、仲なか々く骨ほねを折を



太郎の飛行器

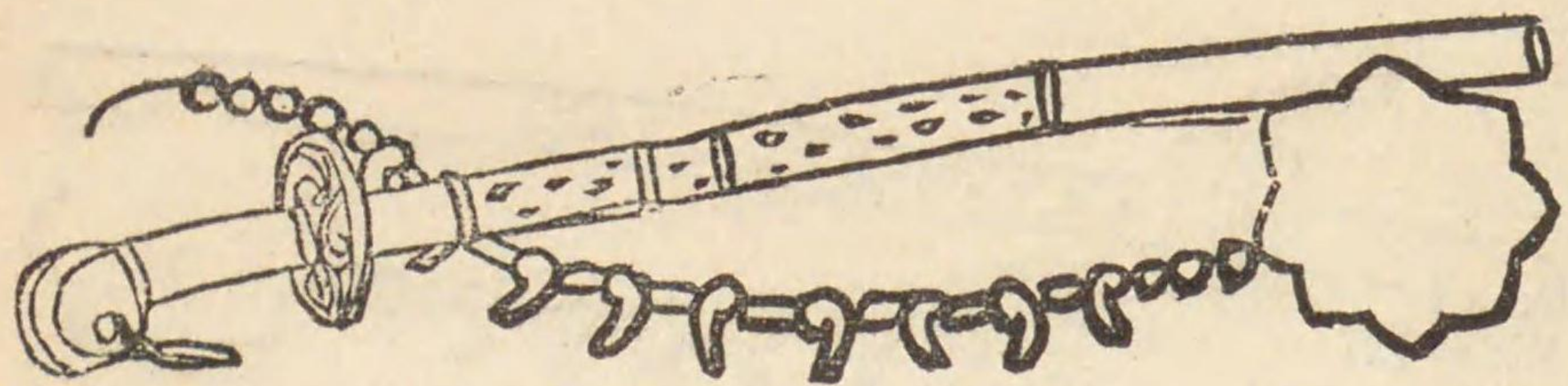
三十四
られたに違ひないが、能く十五ヶ月間も辛捧が出来ま
したね。』

と校長が斯う仰しやいますと、

『十五ヶ月位何でもありません。私は三年でも五年でも
出来上る迄は研究を続けようと思ひました。時には出
来ない口惜まぎれに、飛行器を壊した事もありました
けれど、又思ひ返して研究を致しました。其れには
譯があるんです。』

『譯と云つて、一體何んな譯ですか。』

『必ず出来るに違ひないと云ふ事を信じて居た事なんて



太郎の飛行器

す』

『成程、併し能く其れを信ずる事が出来ましたね。』

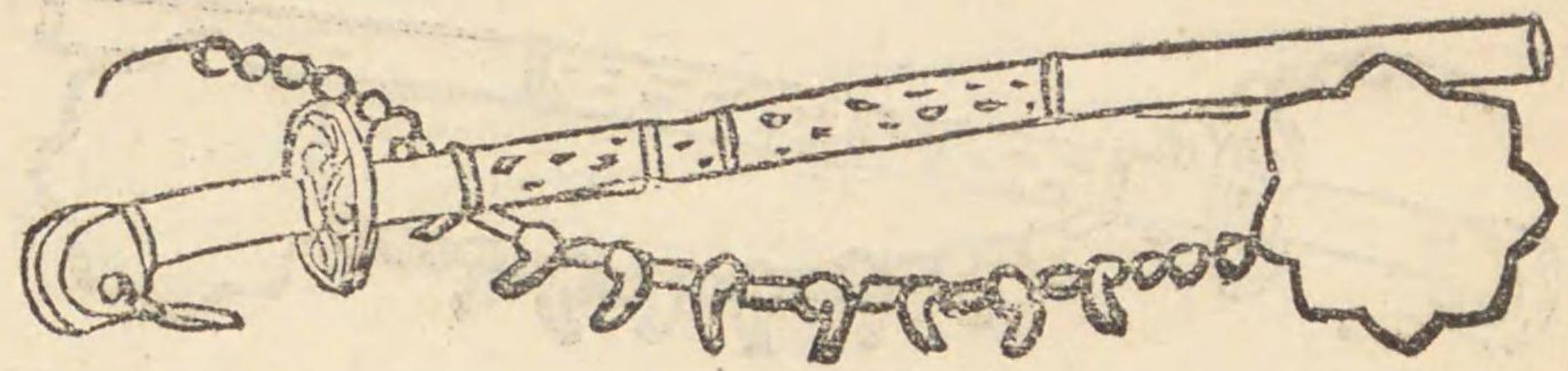
『信ずる事が出来たのは、天皇陛下の御製を日に五度も
十度も胸の中で繰返して居たからです。』

『天皇陛下の御製を？其れは是非承まはらねばなりませ
ん。何と云ふ御製なんですか。』

と校長はお尋ねになりました。太郎は姿勢を正して、

『大空にそびえて見ゆる高峯にも、のばればのぼる道は
ありけり。と云ふ御製なんです。』

と申しました。校長は飛蕩るやうに太郎の手を取り、



太郎の飛行器

「有難い。流石我が校の秀才です。貴君が、天皇陛下の御製を日に度々拜誦して、何ふ云ふ困難な仕事であらうとも、何んな高い山にも登れば登らるゝ道があるやうに、成功する方法があるものと云ふ。御製の意味を悟つて、空中飛行器を作り上げたと云ふ事は、實に天下の美談です。私は今更ながら、天皇陛下の高く深き御徳に感銘せずには居られません。其れに就いて貴君のやうな立派な少年が、我が校の生徒であると云ふ事を私は大なる名譽と思ひます。」

と大層お喜びになり、早速全生徒を講堂に集めて、御製



太郎の飛行器

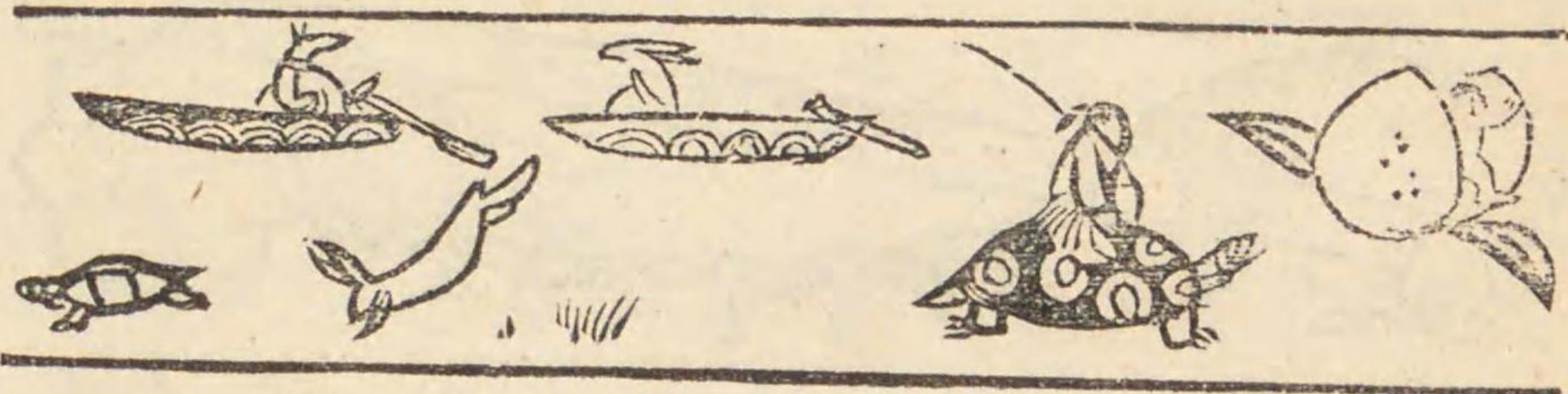
の難有い意味と、太郎の大成功とに就いて一場の演説をなされ、終つて一同君が代を唱へました。

第四 穴の中の赤狐

つもりては拂ふがむかたくなりぬべし
ちりばかりなる事とおもへど

謹解 僅ばかりの塵だと思つて捨て、置くと、其れが段々積りに積つて、到頭拂ひ盡す事が出来ないやうになる。丁度其通り何事でも最初少しの事に注意をして置かないと、遂には取返しが付かぬやうな事が出来るものである。と、塵の御題で詠ませられた御製であります。

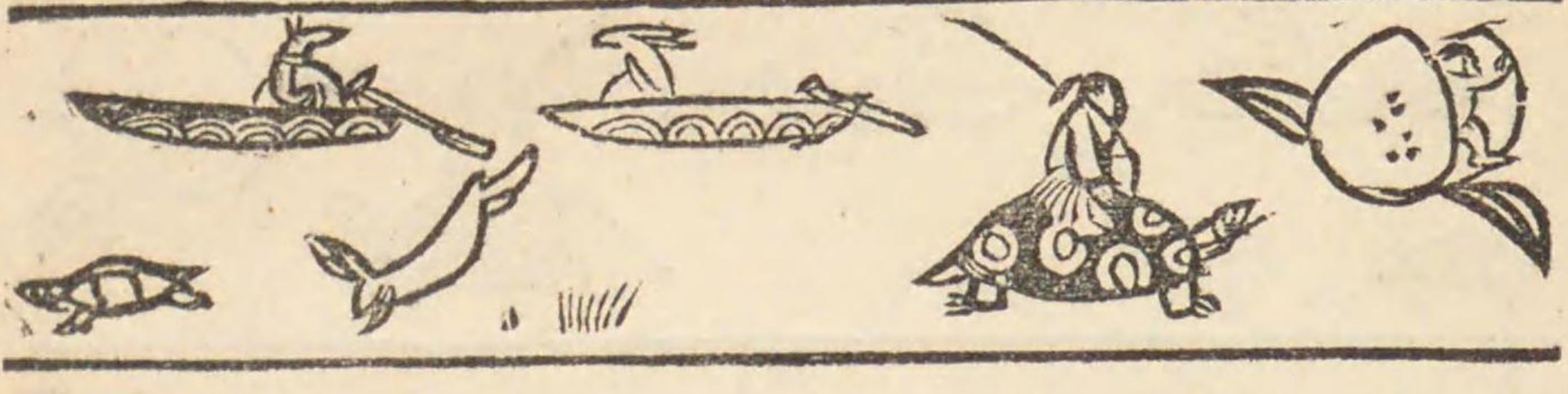
或る雪國の山の中に、白狐と赤狐が、二つの穴を掘つて

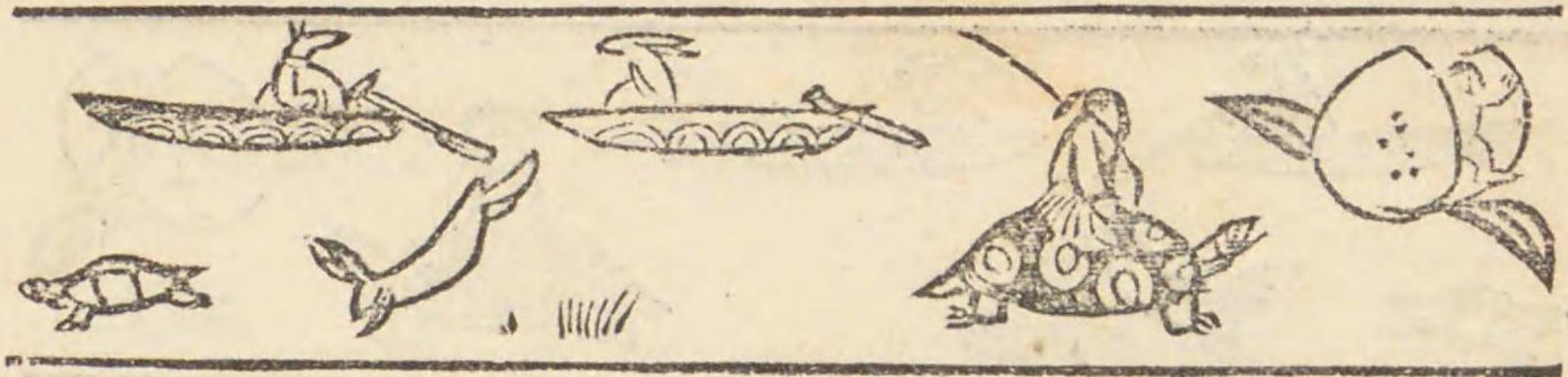


棲つて居りました。二疋とも櫻の花の咲く頃産れたばかりで、冬になると、眞白い花片のやうな雪が降ると云ふ事を、話には聞いて居りましたが、まだ其の冬が来ないので、雪と云ふものは何んなものか、秋の末から首を長くして、雪の降る冬の来るのを待つて居りました。

『待ち長いね。最う紅葉も散つて仕舞つたから、徐々降りさうなものだが、今年も冬も来ず、又雪も降らないのでは無いか知らん。』

と白狐が心配して申しますと、
『冬の来ない事はあるまい。毎年秋が過ぎると冬になる





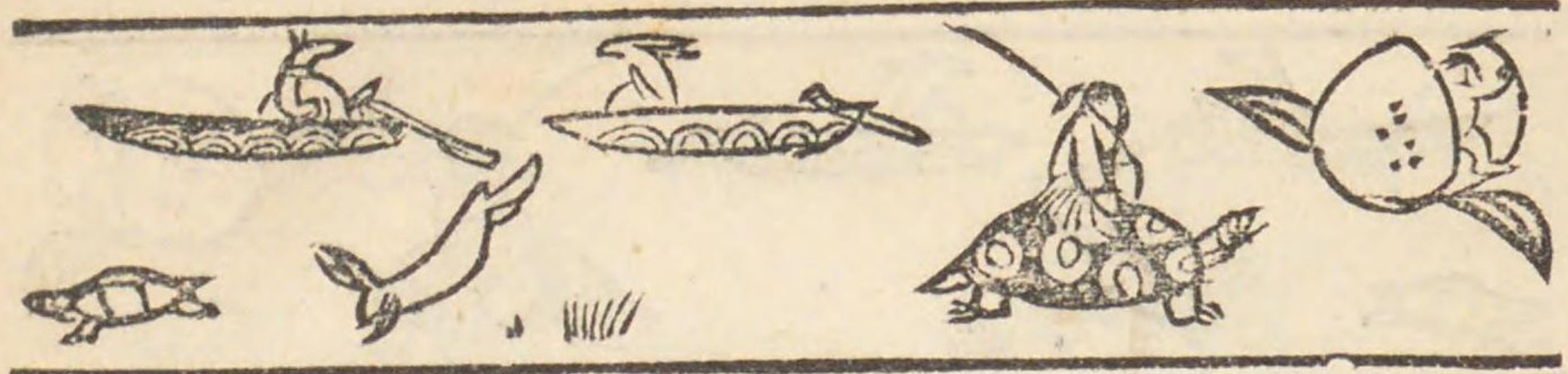
に極きまつてるんださうだから、そして冬ふゆになつて雪ゆきの降ふらない事は千年ねんに一度どもないと云いふ事ことだ。今朝けさ霜しもが降ふつて居ゐたのを見みると、最もう雪ゆきの降ふるのも遠とほい事ことではあるまいよ。』

赤狐あかぎつねは赤あかい大おほきな尻尾しつぽを立て、背せ伸のびをしながらか斯かう申まうしました。

『ホウ、今朝けさは霜しもが降ふつて居ゐたかね。霜しもなんて何どんなものか僕ぼくは氣きも付つかなかつた。』

『君きみは朝寝坊あさねぼうだから、君きみが起おきる頃ころには、最もう解とけて仕舞まつて居ゐたのだらう。』





「さうか知らん。併し霜が降つたごすれば最う冬が來たのだらう。霜も雪も冬降るものださうだからね。嬉し
いね。雪の降るのも最う遠い事ではないよ。」

白狐は嬉しさうに寢轉びながら、

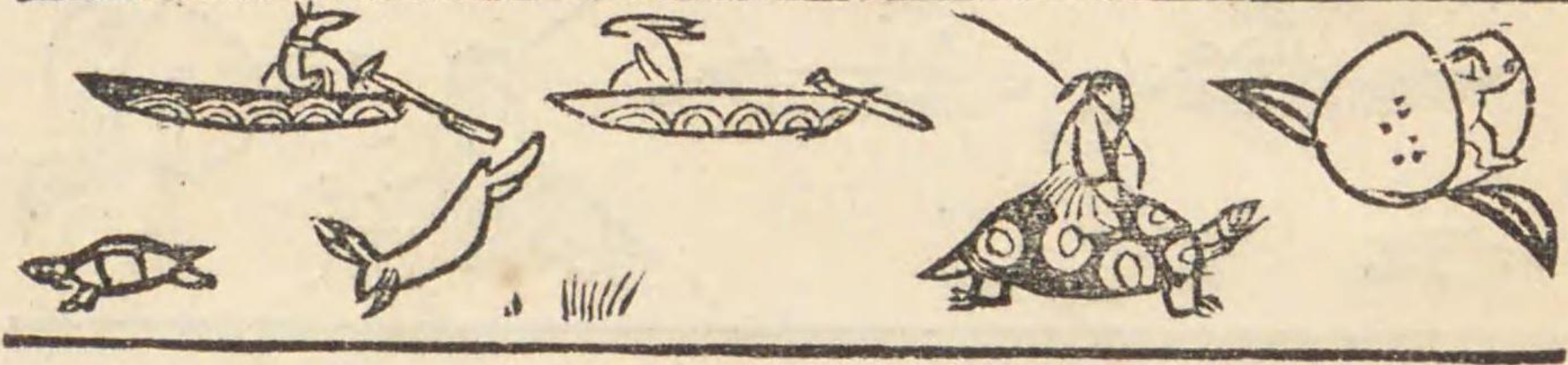
「雪が降つたら君は何をして遊ぶかね？」

「僕か。まだ遊ぶ事は考へて居ないが、雪合戦なんて面白
いさうぢやないか。」

「雪合戦！ 狐の雪合戦は面白いだらう。ぢや其の雪合
戦をして遊ぶらうかね。」

「愉快だね。平家と源氏に分れて行らう。」

穴の中の赤狐



「平家の方は赤狐、源氏の方は白狐と云ふ事にすると妙だらう。」

「僕と君は敵味方になるんだね。」

「毛色が違つてるんだから、止むを得ないさ。」

「お互若武者の初陣なんだね。人間の初陣だと緋緘の鎧を着るんだつてね。」

「其れは昔の事だよ。源平時代なんかには流行つたさうだ。」

「ちや今は着ないんだね。」

「着るものか、夏冬カーキ色の軍服さ。」

「君は物識りだね。」

「其れ位の事は聞いて知つてるとも。」

「併し狐だから此儘で出掛けるんだね。」

「當前だ。仰々しい軍服なんか入らぬ事だ。」

「九郎判官と云ふ大將は、彼れは源氏か平家かね。」

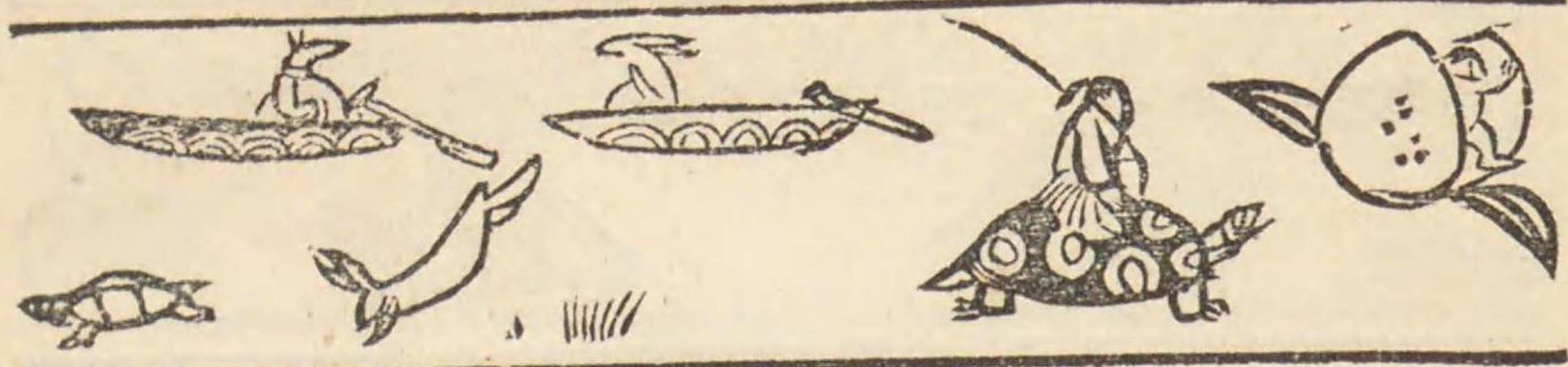
「源氏の大將だ。日本一の荒武者ださうだ。」

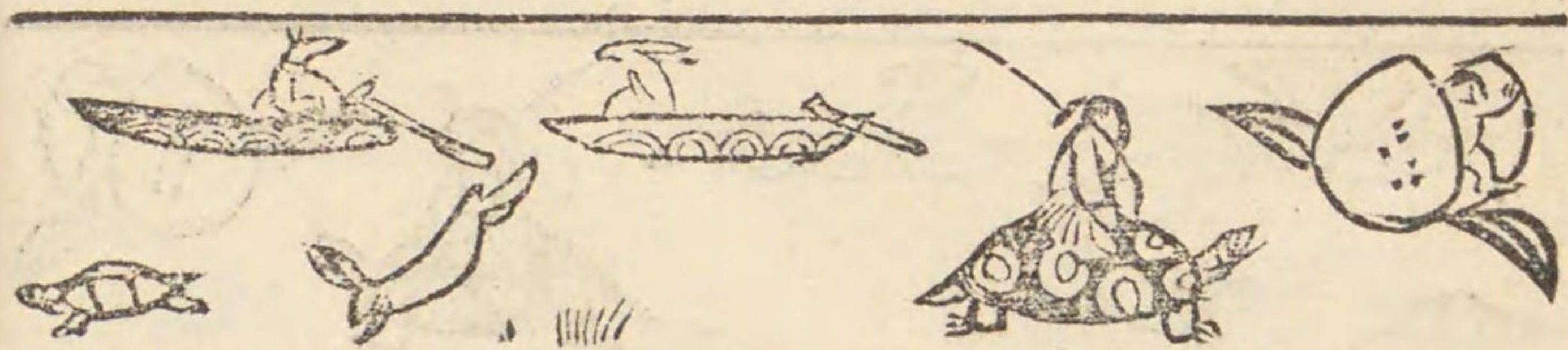
「ちや君の方だね。」

「さうだ源氏は白だから、雪合戦の時は僕の方だ。僕が

九郎判官になるよ。」

「生意氣云つてらあ、今年産れたばかりの九郎判官があ





るものかね。』

赤狐が斯う云つて押搦しますと、白狐は笑ひながら、

『其代り君は平家方だから、敦盛卿になつたら可いぢや

ないか。』

『君が九郎判官で、僕が敦盛卿か、赤狐の敦盛卿は珍ら

しいね。』

『熊谷次郎直實に打たれて死なねばならぬだけが氣毒だ

よ。』

『雪合戦だから本當に死ななくても可いだらう。』

『死んだ眞似位で結構だらう。』

『本當に殺されちや困るからね。』

『心配しなくとも可いよ。直實は源氏の家來だから、僕

が直實になる狐に頼んで、本當に殺さないやうに取計

つて置かう。』

『其れで安心だ。ところで待ち給へ。オヤ雪ぢやないか

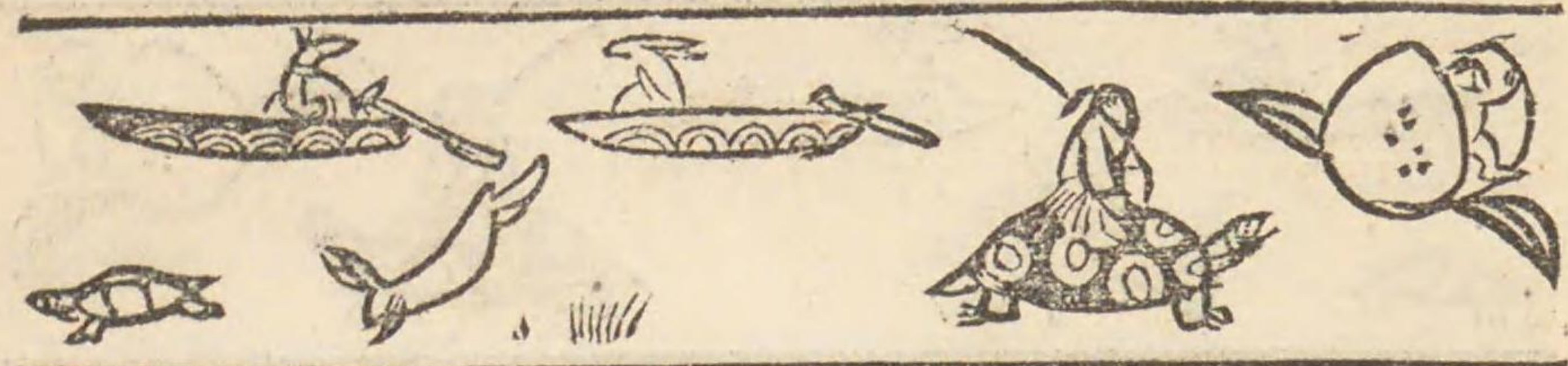
知らん。白い粉のやうなものが天から降つて來た。雪

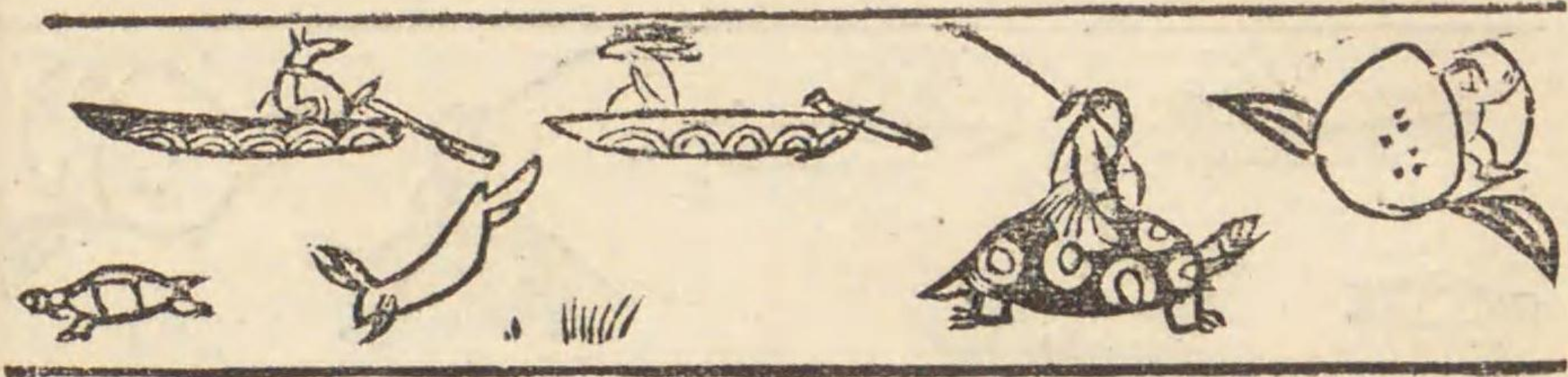
だ。雪だ。これが冬の雪だ。眞白いね。綺麗だね。』

『これが雪か、成程眞白い。綺麗なものだ。併し此の雪

で雪合戦が出来るかね。』

『積んでからの事さ。彈を拵へるのだもの積らなくちや





駄目さ。』

『大層降つて来た。早く積ると可いな。』

『今夜一晩もすると積るだらう。』

『穴の口は大丈夫か知らんて。』

『大丈夫とも、穴の口は氣遣ひはないよ。心配せずに今

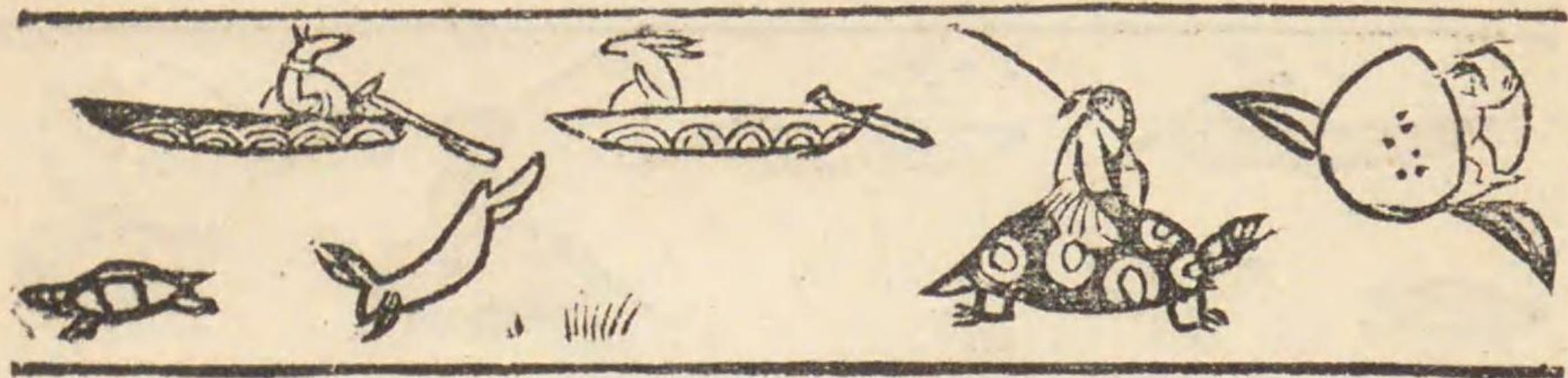
夜緩り寝て、明日の朝起きて見給へ。雪合戦の出来る

位には積んで居るだらう。』

『ぢや、日暮前だから、穴に引取つて、明日の朝を樂み

に寝ようかね。』

『僕も寝る事にしよう。風邪でも引くと大變だ。』



と赤狐も白狐も一應穴の中に引取りましたが、白狐は穴の口に雪の積るのを見て、

『今の内に雪を除けて置かないと出入に不自由だ。』

と思つて時々穴の口の雪を拂つて置きました。赤狐の

方は格別氣にも掛けず高軒で寝込んで仕舞ひました。白

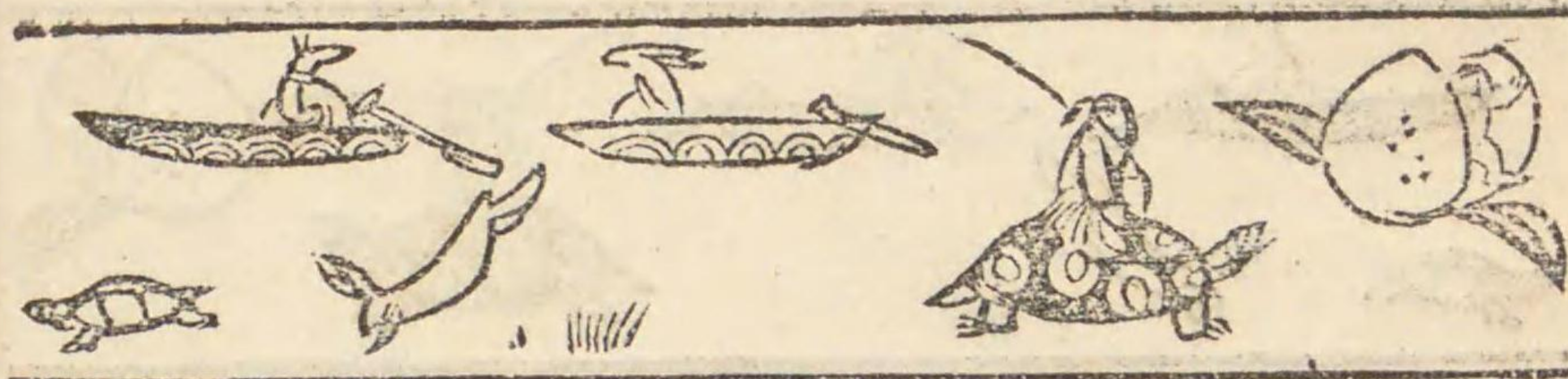
狐は自分の穴の口の雪を取除けた序に、赤狐の穴の口を

覗いて見ますと、大分雪が積つて居る様子ですから、

『君大丈夫かね。穴の口が大分塞がつて居るぜ。』

と注意して遣りますと、赤狐は眼を覺して、

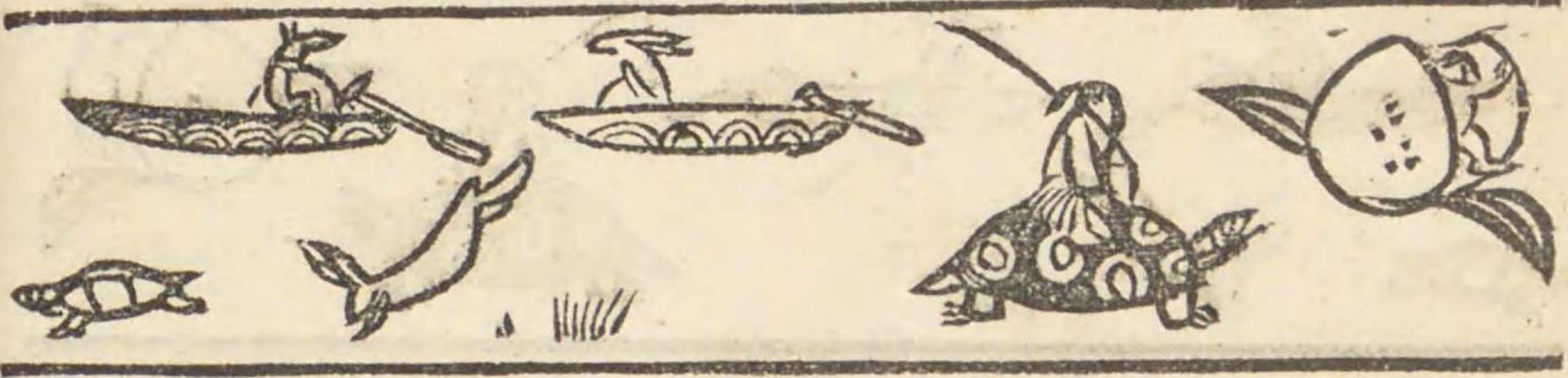
『何に心配しなくつても可いよ。これんばかりの雪が降



るからつて狼狽へるには及ばぬさ。」
 「けれども大分穴の口が塞がつてるから。」
 「可いてえ事よ。君も早く歸つて寢給へ。雪位が何だ」
 と云つて又高軒で寢込みましたから、白狐は氣遣ひなが
 らも、自分の穴に歸つて、ちよいと穴の口の雪を取除
 けく夜明けを待つて居りました。翌朝になると、流石
 雪國の雪ですから、一夜の内に大層積つて、赤狐の穴の
 入口は何の邊だつたか、見當も付かぬ程になつて仕舞ひ
 ました。白狐は赤狐の安否を氣遣つて、穴から這出し、
 『赤君々々々。』



と呼んで見ましたけれども、赤狐は返事もなく、薩張り
 様子が分りません。白狐は何うかして赤狐の穴の口を探
 出さうと思ひましたが、雪は益々降り降り降つて、自分の
 穴の口が危険ですから、止むを得ず其儘打捨て、置きま
 した。雪は五日間降り續けて、六日目に漸つと降り止み
 ましたから、外の狐と一緒に赤狐の穴の口を探當て、
 穴の口から、
 『無事かね。君何うしてる？』
 と聲を掛けても返事がないものですから、不思議な事と
 思つて、雪を掻分けく穴の中に入つて見ますと、赤狐



穴の中の赤狐

五〇

は氷のやうに冷たくなつて死んで居りました。蓄生の事
ですから、『つもりて』の御製を承はつた事のあらう道理
もなく、雪を馬鹿にして到頭一命を落す事になつたので
あります。皆さんだつて塵程の些細な事だと、最初何で
も馬鹿にして居らつしやると、赤狐が凍死んだやうに、
取返しのかぬやうな事が出来るものです。

第五 先生の名案

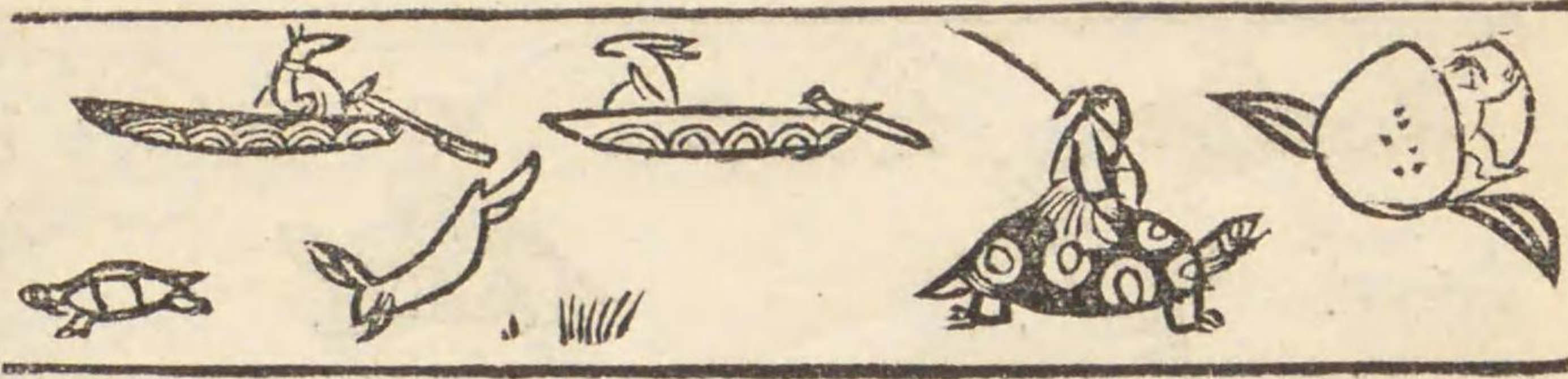
ともすればあらぬ方にと踏み迷ひ
をしへがたきは人のみちなり

講解 人と云ふものは、油断をすると飛んでもない邪道に踏み迷
ふものである。人の人たる道ほど、世の中に教へ難きものはな
い。と教育と云ふ御題で詠ませられた御製であります。

酒屋の孫兵衛が悪戯息子の彦市を連れて、本郷の大學前
に通掛りますと、下宿屋の佐代吉が矢張悪戯息子の重
吉を連れて通掛り道連れになりました。

先生の名案

五一



『親子お揃ひで何處へお出掛けですか。』

と孫兵衛が尋ねますと、

『駒込の古山先生のお宅へ参るところです。 貴下方もお揃ひで何方へ行らつしやるんですか。』

『實は私も其の古山先生のお宅へ参るところですが 貴

下は何う云ふ御用で？』

『餘り悴が悪戯で困り切つて居ますから、暫く先生のお

手許に預けて、教育をして戴かうと思ひましてね。』

『ホウ。 貴下もですか。 何を隠しませう。 私も悴が悪戯

者で仕末に困るものですから、先生にお預け申して置

かうと思つて出掛けたところです。』

『おやく／＼左様ですか。 お互ひ悪戯息子を持合はせて困

りますね。 全く命が縮まつて仕舞ひますよ。』

『御同感です。』

と二人の親父は二人の悪戯息子連れて、 駒込の古山先

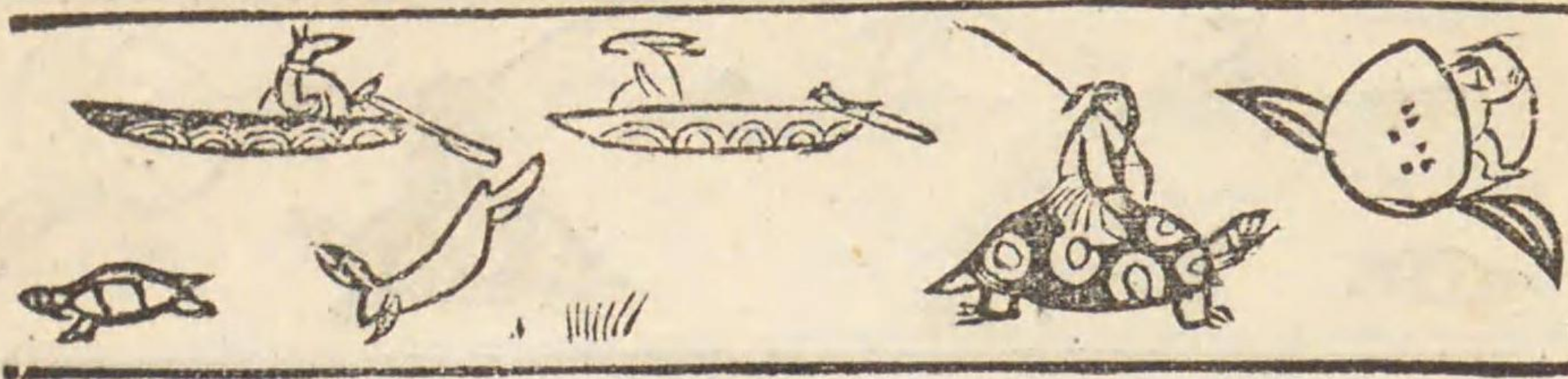
生のお宅に参り、

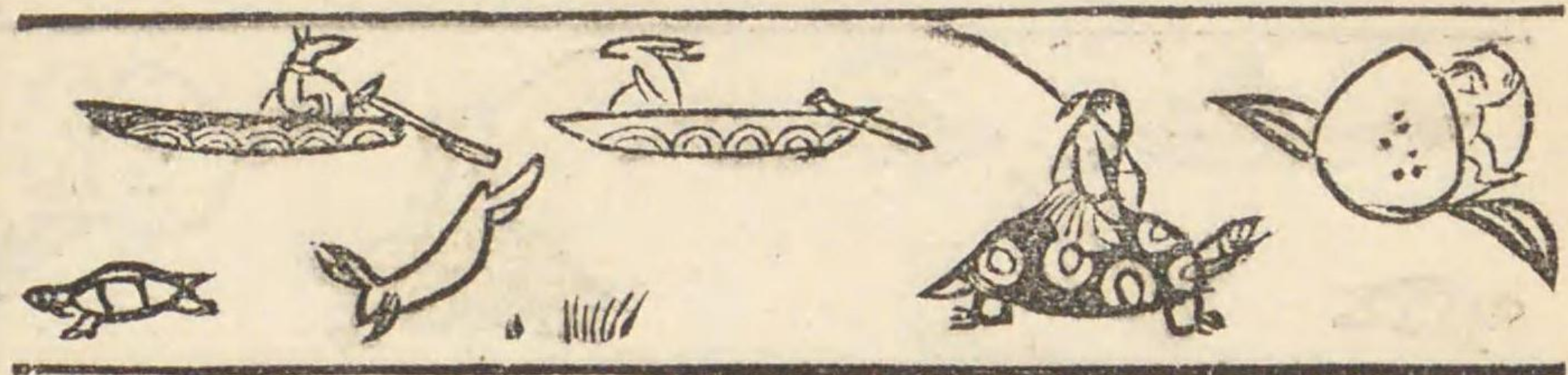
『何うぞ暫くでも宜敷う御座いますから、 お手許で教育

をなさつて下さい。 白髮頭の親父が二人でお願い申し

ます。』

と白髮頭を下げたお頼み申しますと、 古山先生は東京で





先生の名案

も有名な徳の高い老先生の事ですから、

「宜敷い。置ひて行きなさい。一つ拙者が仕込んで見よ

う。孫兵衛さんの方が彦市さんで、佐代吉さんの方が

重吉さんだね。二人とも仲々悪戯の好きさうな顔付き

ぢや。」

と其日からお手許に置いて下さる事になりましたから、

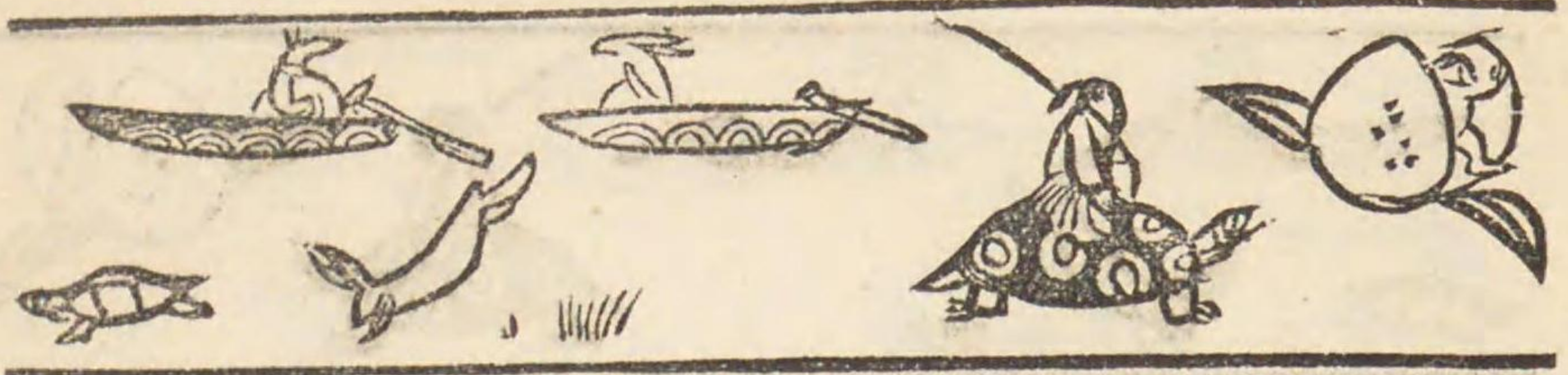
二人の親父達は大喜び。

「難有う御座います。これで漸つと安心を致しました。」

と二人の悪戯息子を置いて、御一緒にお暇を致しまし

た。古山先生は、二人の悪戯息子の居間を玄關の次の間

五四



先生の名案

と定め、毎日々々嚴重に監督を成さつて居らつしやいま

したが、二人とも悪戯と云ふ悪戯一つもせず、至極大人

しく先生の仰しやる事を守るものですから、

「悪戯息子との觸込みだつたが、何うして仲々大人しい

小供ぢや。」

と感心をなさつて居らつしやいました。併し悪戯をしな

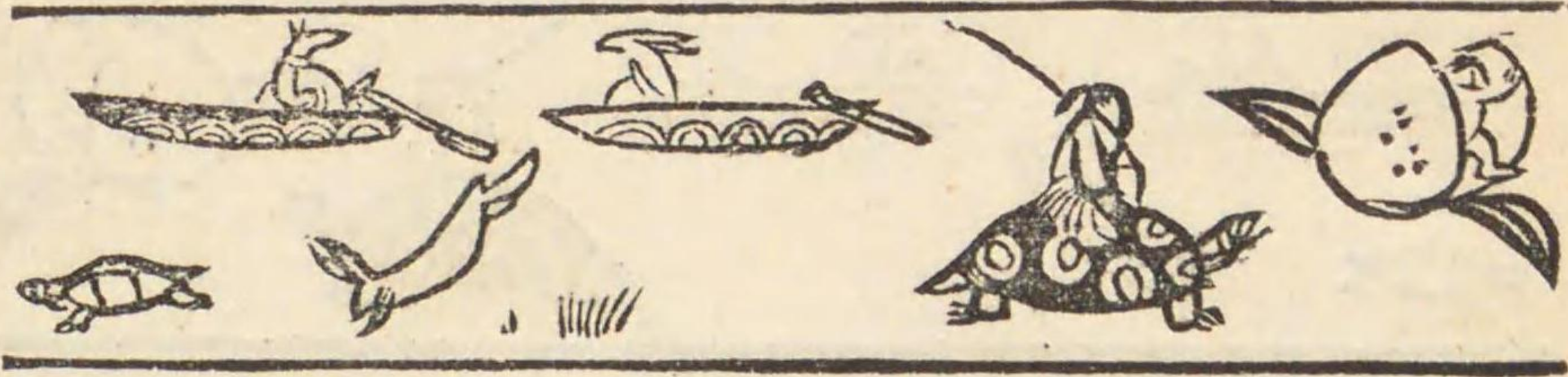
いのは、先生の居らつしやる間だけで、先生のお留守と

なると、二人とも手を繋いで飛出し、近所近邊を飛廻つ

て悪戯のありだけを働くので、近所近邊の叱言が絶え

ず、

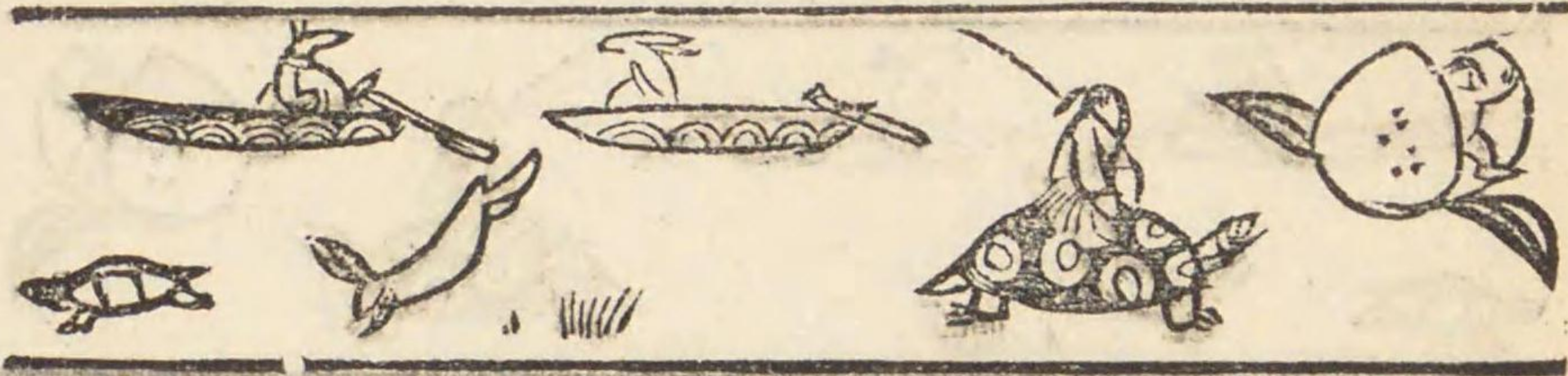
五五



『まるで活動寫眞の悪戯小僧のやうだ。』
 と云ふ評判が高くなつて、何時しか其れが先生のお耳にも入つたものですから、
 『矢張悪戯息子と見えるな。大人しく見せ掛けたのは俺の眼を晦ます積りであつたのか。』
 と其れから十分氣を付けて、聖人君子の教訓なごを、噛んで含めるやうに云聞かせ、少しの間油断なく取締つて居らつしやいますと、暫くの間は打つて變つたやうに素直な小供になりますけれども、鳥渡油断をなさつて居らつしやいますと、



『彦市さんが鶏を捕へて、犬に食はせて仕舞ひました。』と届けて来る者もあり、
 『重吉さんが、お座敷に蛇を投込んで逃げました。』と云つて来る者もあり、日に三度位宛は、やれ傘を破つたの、やれ小供を突倒して怪我をさせたのと、まるで古山先生のお宅は交番見たやうに、届けて来る者、訴へ出る者が絶えませないので、流石の老先生も舌を巻いて、
 『成程。親達持餘して連れて来た筈ぢや。』
 と驚いて居らつしやいました。すると二人の悪戯息子は最う先生に悪戯息子の本性が分つた以上、何も遠慮は入



らぬ事と、朝から晩まで學校にも行かずに、町内を荒廻つて悪戯ばかり働いて居りましたが、或日の朝、彦市は重吉に向ひ、

「僕は昨夜天神様から歌を書いた短冊を戴いた夢を見たよ。」

と云つて居るのを、ちらと先生がお聞きになつて、暫く考へて居らつしやいましたが、

「可い事がある。これで二人の悪戯を止めて遣らう。」と先生は莞爾々々しながら、早速お居間に二人の悪戯兒子をお呼びになり、

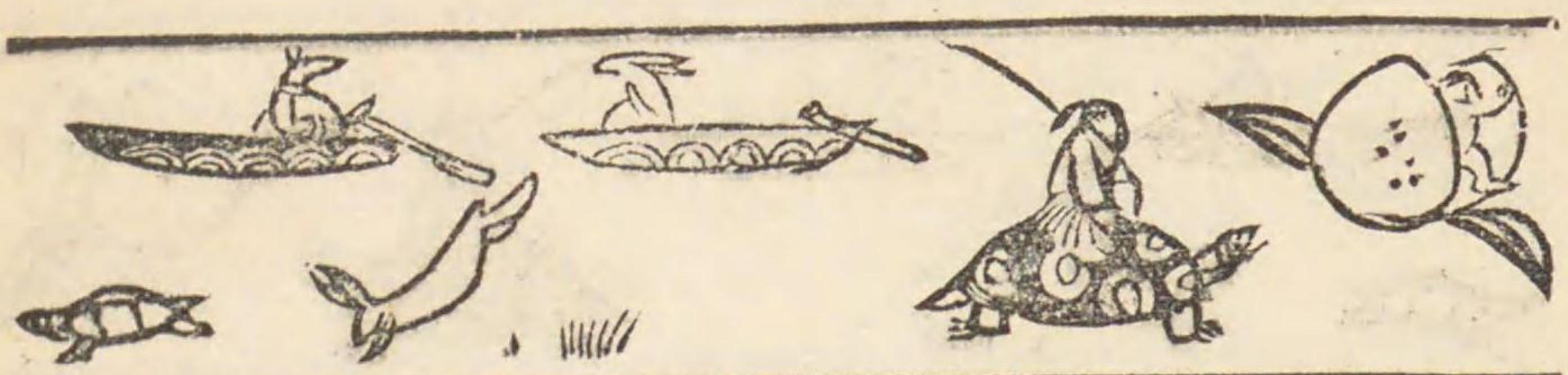
「昨夜二人の中で誰か天神様から短冊を戴いた夢を見た人がありますませんか。」

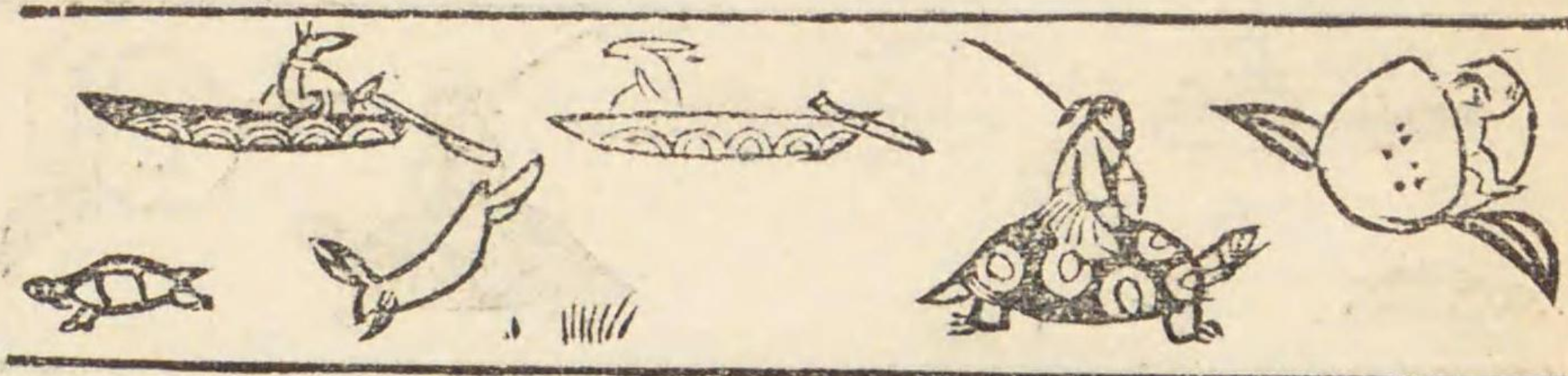
とお尋ねになりますと、彦市が喫驚したやうに、「私が見ました。」

と申しました。「嘘を云ふのぢやありませんか。」

「いゝえ決して嘘を申すのではありません。」

「ぢや其の短冊はこれです。實は俺も昨夜天神様から短冊を預つた夢を見たのです。そして天神様は此の短冊を彦市か重吉に授けた夢を見せて置くから、明日の朝





生先の名案

渡して呉れと仰しやつたのです。』

と二枚の短冊を二人に一枚宛お渡しになつて、

『天神様は二人に一枚宛渡すやうにと仰しやいました。』

短冊の歌を詠んで御覧なさい。それから其の歌の意味

と、何方のお作りになつたものかと云ふ事を俺が説明

して上げよう。』

と仰しやいましたから、二人は短冊の歌を詠んで見ます

と、

(ともすればあらぬ方にと踏みまよひ、をしへがたきは人の道なり。)

と書いてありました。

『二人とも謹んでお聞きなさい。この歌は天皇陛下の

御製です。教育と云ふ御題でお詠みになつた御製で

す。人間と云ふ者は、鳥渡油断をしようと、飛んでもな

い悪い事をするものぢや。實に人の人たる道ほど教へ

悪いものはないものぢや。と、吾々臣民の事を大御心

に掛けさせられて、御心配の餘りお詠みになつた御製

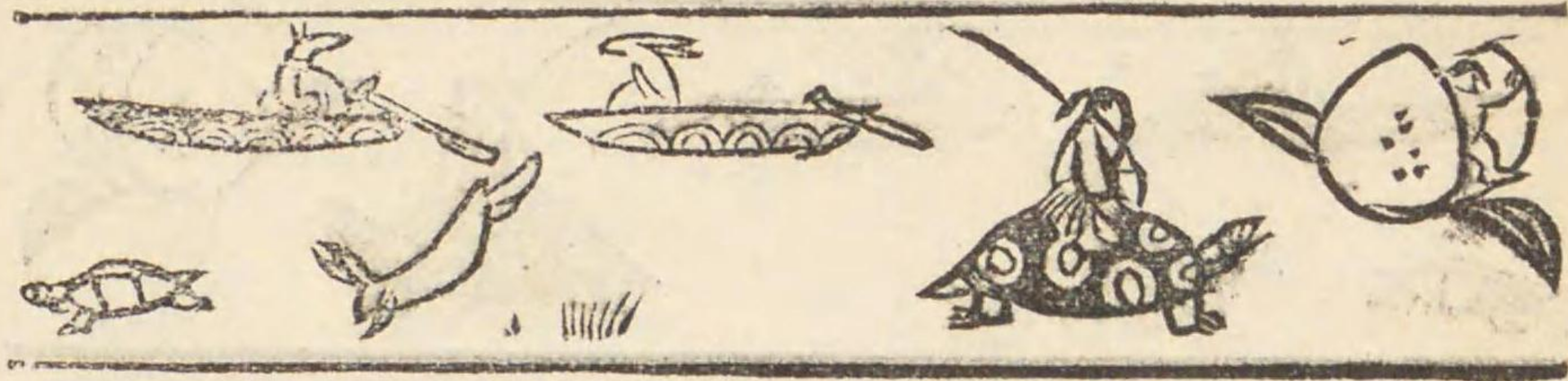
です。天神様が、天皇陛下の御製を貴君方にお授け

になつたのは、天神様は學問の神様と云はるゝお方で

すから、貴君方が毎日あるまじま悪戯を働いて、人々

先生の名案

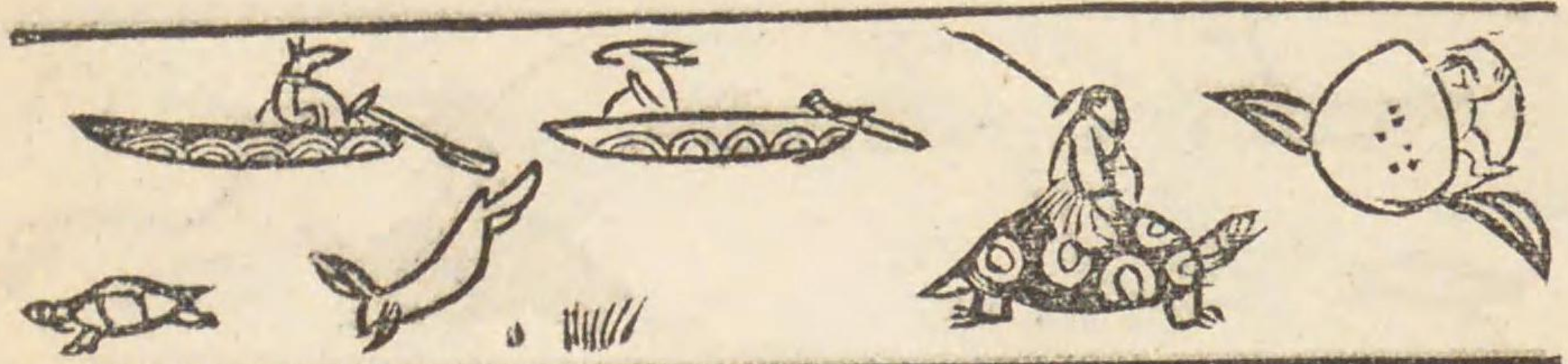
六一



先生の名案

六一

に迷惑を掛けるものだから、陛下の御製をお授けになつて、貴君方二人をお訓めになつた事と思ひます。』
 と御製の意味を繰返しく説明してお聞かせになります
 こ、二人の悪戯息子は短冊を戴きながら涙を流して、
 『最う決して悪戯は致しません。今までの事は許して下さい。』
 さい。
 とお詫びを申し上げ、其れからと云ふものは、二人とも決して悪戯をせず立派な子供になりました。そして親達に引取られて歸宅してからも、毎日其の短冊を神棚に飾つて拜んで居りましたが、二人とも中學校に入つてから、



先生の名案

六三

古山先生が、天神様から預かつて置いたと云つたのは一時の方便であつた。實は彦市の夢がたりを聞いて思付いたものであつたと云ふ話をなさいますと、二人とも兩手をついて、
 『天皇陛下の御恩と、先生の御親切は決して忘れませぬ。』
 とお禮を申しました。

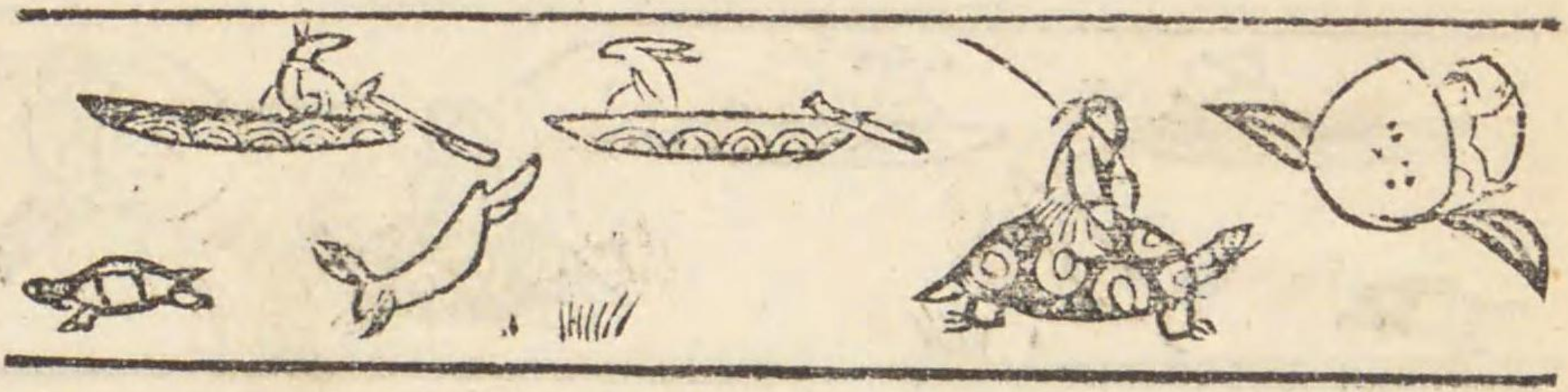
第六 二人の苦學生

開け行くみちにいで、も心せよ

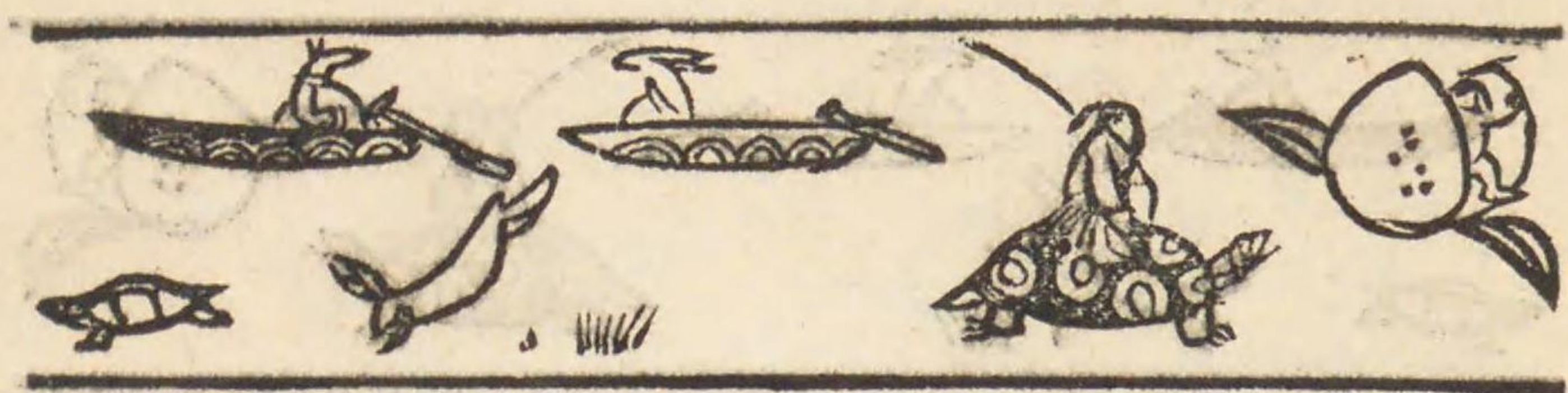
つまづくことのある世なりけり

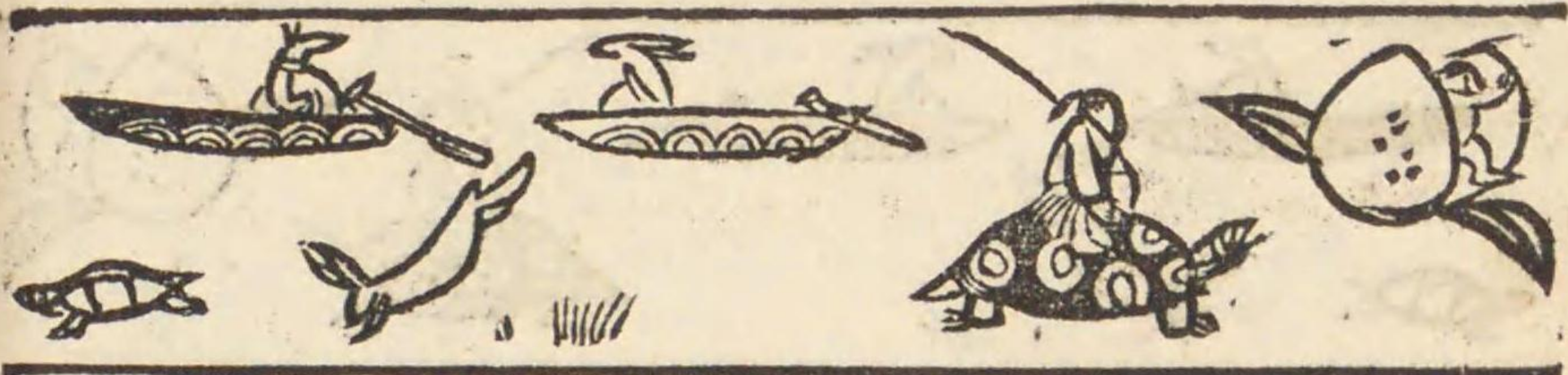
謹 平い通路であつても、足元に氣を付けて歩かないと、躓く事があるやうに、開け行く文明の今日に産れ合せても、つい物に躓いて失敗する事があるものであるから、能く注意用心をせねばならないと、お訓めになつた御製であります。

一郎と次郎は、田舎に居ては苦學する方法もないから、東京に上つて一郎は新聞配達傍、次郎は牛乳配達傍苦學



をしようと思ひ、連立つて上京しましたが、新橋の停車場で一郎は次郎に向ひ、
『二人一緒に下宿をして居ると、彼是れ都合の可い事もあるには違ひないが、依頼心が起つて成功の妨げになつては大變だから、此處で別れて、五年目の今日のこの時刻に、此處に来て逢ふ事にしようではないか。』
と申しますと、次郎も賛成して、
『其れは面白い。五年すると成功するか失敗するか、何方かに形が付くだらう。五年目の今日の時刻には、例





へ失敗して居ても必らず來る事に極めて置かう。』
 と、二人は固い約束を結んで、一郎は神田へ次郎は芝へと袂を分ちました。二人とも別に知人はなし、便る處はなし、其晩は安旅籠に泊つて、翌日各々新聞配達と牛乳配達の口を探し、幸ひ双方とも其日に探當てたものですから、稼ぐ暇には一郎は神田、次郎は芝の夜學校に入つて勉強を怠らず、他日の成功を祈つて居りましたが、田舎と違つて東京は苦學するにも便利な代りに、觀物食物の數も多く又惡書生が方々に陣を構へて、田舎者の青書生なごを、悪い方へ悪い方へと誘込むので、一郎も次郎



も鳥渡の油斷も出來ません。或時一郎が銀座の新聞社から、配達すべき新聞紙を受取つて、これから配達に出掛けようとして居りますと、

『君鳥渡來給へ。』

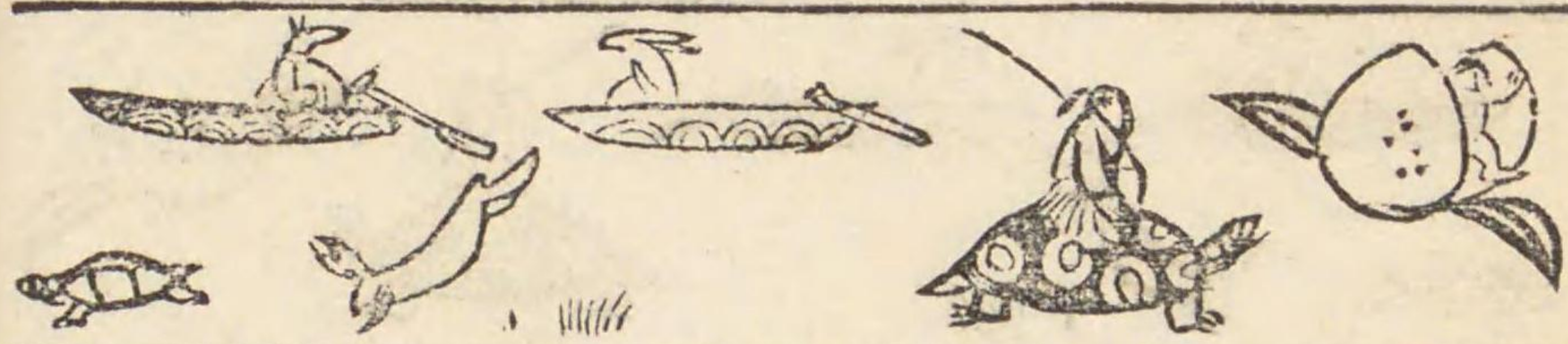
と後の方で呼ぶものがありますから、

『私?』

と振向いて呼んだ男を見ますと、矢張配達をして居る苦學生の山本と云ふ男が手招きをして居りました。

『何か御用ですか。』

『鳥渡用事があるんだよ。』



と云ふものですから、何の用だらうと思つて山本の傍に行つて見ますと、

此方に來給へ。」

と一郎を暗い處に連れて行つて、

「濟まんけれども、これを持つて行つて表で待つて居て呉れ給へ。」

と風呂敷に包んだ重い物を渡しました。

「持つて行つて表で待つて居るだけですな。」

さうだ僕も後から直ぐ來るから。」

と云つて山本は配達夫扣所に入りましたから、一郎は托



された重い風呂敷包を持つて出て、表の處で待つて居ますと、山本が駈けて來て、

「難有う。お禮は明日君の下宿に行つてするよ。」

と其の風呂敷包を受取つて何處へか行つて仕舞ひまし

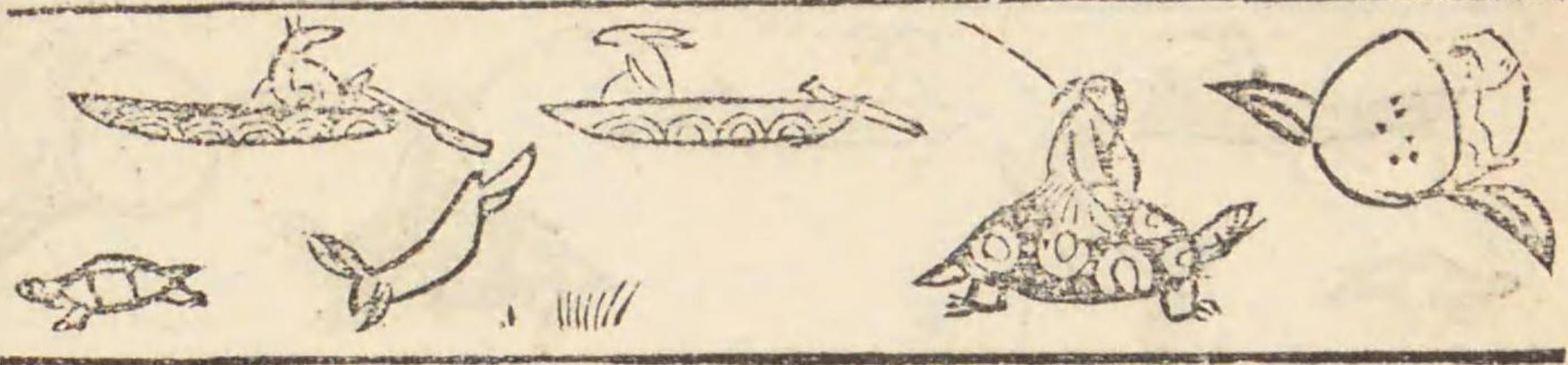
た。一郎は何の事だか薩張分らず、夜の引明けに新聞の

配達を濟まし、宿に歸つて寢て居りますと、山本が訪ね

て來て、

「昨夜は難有う。昨夜のお禮に牛肉を買つて來たから一緒に食べよう。」

と一郎の寢て居るのを起して、牛肉の御馳走を致しまし



た。一郎は彼れ位の事に牛肉の御馳走は勿體ないと思ひながら、強いらるゝまゝに食べて、

『大層甘い牛肉ですね。難有う御座いました。』

とお禮を申しますと、山本は笑ひながら、

『お禮には及ばぬよ。實は昨夜君に頼んだのは、彼れは

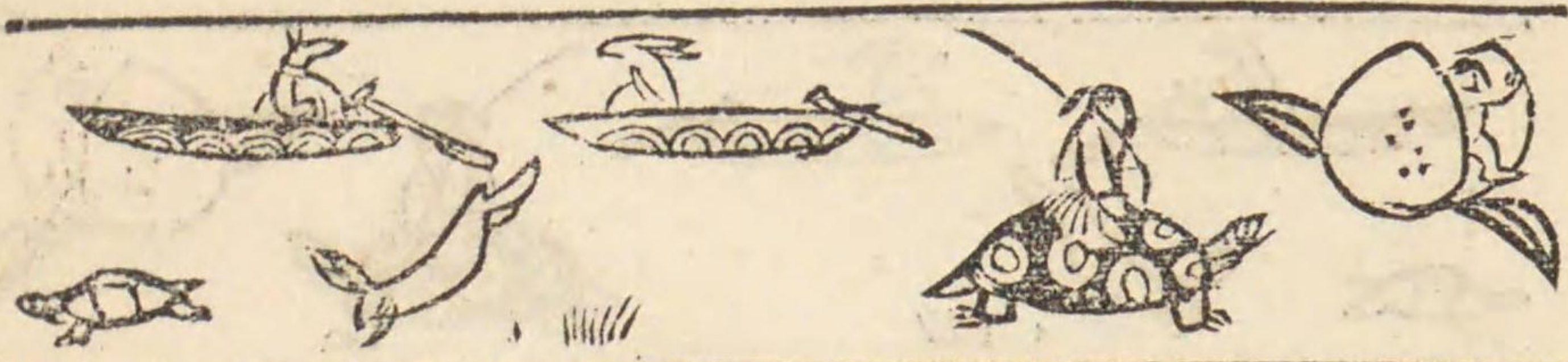
工場から盗んで来た活字なんだ。』

と申しましたから、一郎は喫驚して、

『盗んで来たんですつて？』

と眼を圓くしますと、

『君はまだお話にならないね。工場の活字を盗んで、其

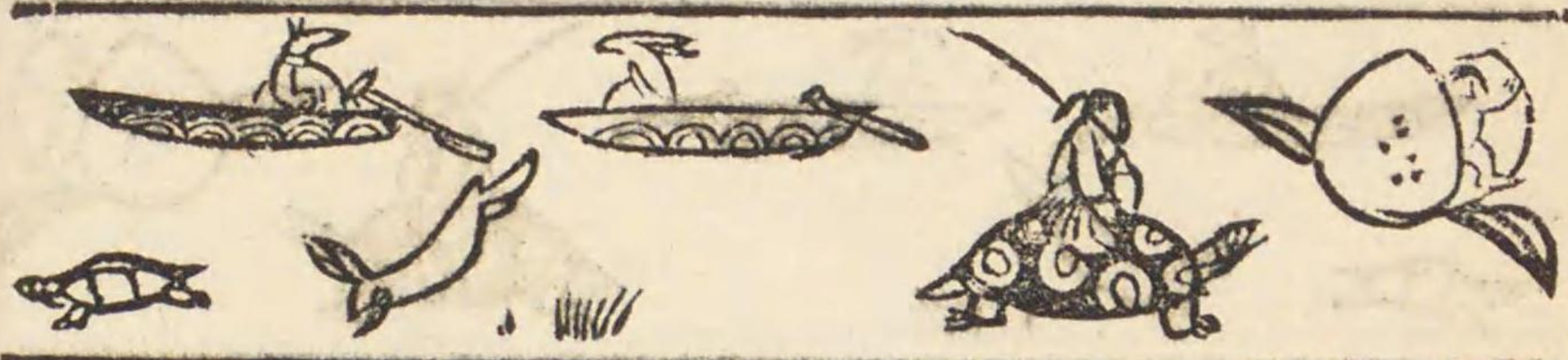


れを賣つた金で牛肉を買つて食ふ位は誰でもする事なんだ。其んな事に驚くやうでは東京で苦學する事は出来ないよ。これから君も僕と手を組んで、一人前の男になり給へ。』

と山本は一郎を手下に付けようと、頻りに活字泥棒を勧めました。

『私は其んな、其んな事は出来ません。私は人の物を盗むやうな事は嫌ひですから。』

『誰だつて好きな者はないさ。併し君が今になつて色々逃口上を云つても、昨夜僕の云ふ事を聞いて、表まで



活字を運びもしたし、其れを賣つて買つて來た牛肉も食つた以上は同罪ぢやないかね。」

「併し其れは知らずに運びもし食ひもしたのですから。」

「ぢや何うしても君は厭と云ふのかね？」

と山本は血相を變へ、懷から短刀を取出して、

「君が厭だと云ふなら詮方がないから最う勸めはしま

い。其代り僕の悪事を君に明した上は、君を生かして置く事は出来ないから左様思ひ給へ。」

すらりと短刀を抜いて一郎の鼻の先に突付けました。一郎はまた十五になつたばかりの小供の事ですから、嚇さ



れるとは思はず、此處で殺されては大變だと、

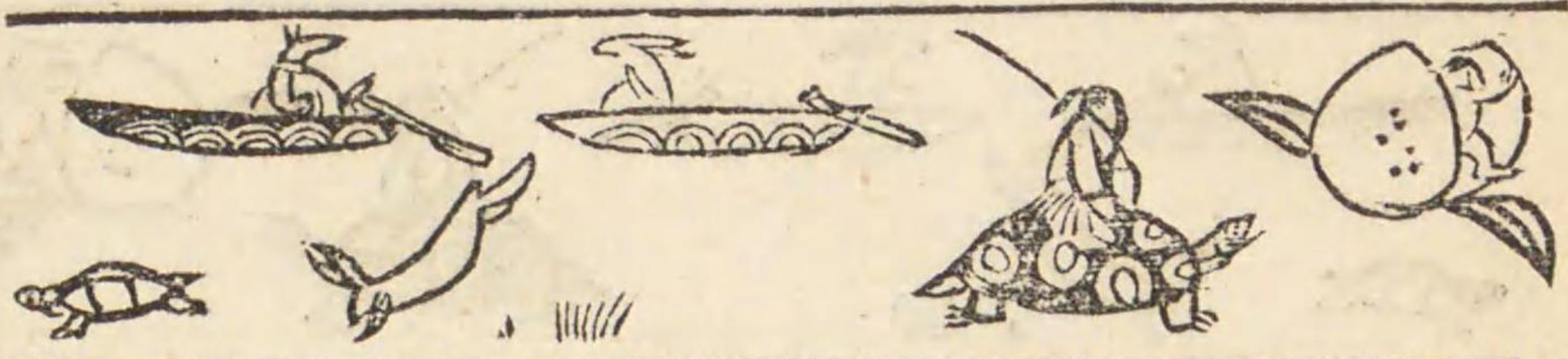
「お待ちなさい。ぢや厭とは申しません。」

「厭とは云はない。僕と手を組むんだね。」

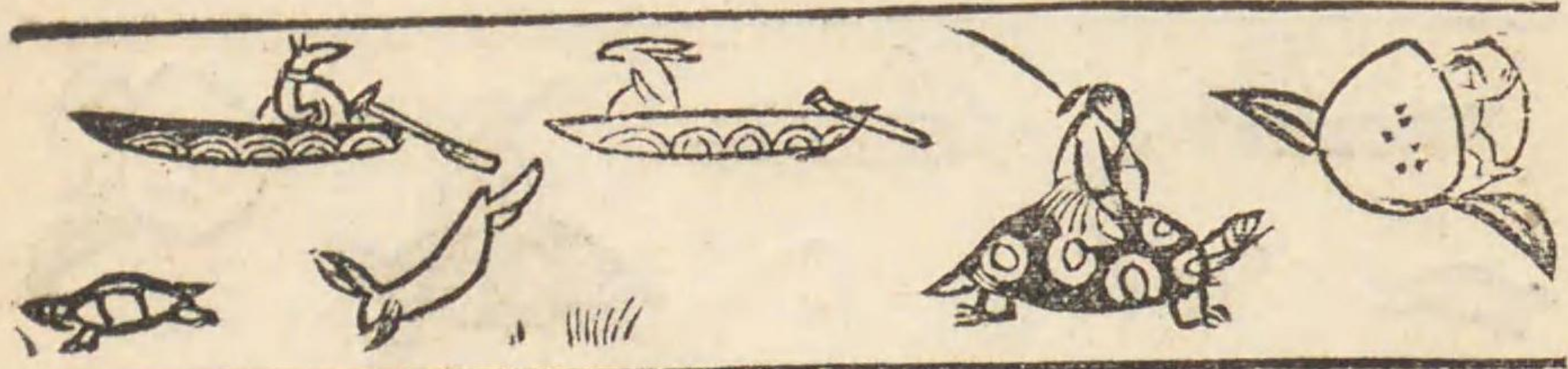
「組みます。組みますから短刀は……」

「手を組むなら殺すには及ばぬのだ。ぢや兄弟分の盃をしよう。」

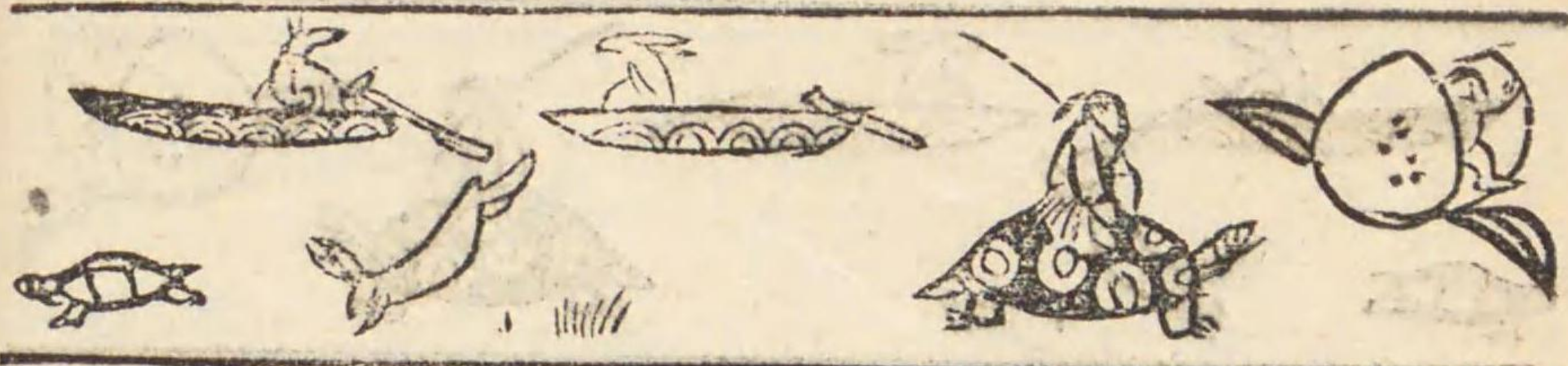
と山本は酒を買ひに行つて、自分も飲み一郎にも無理に飲ませました。それから一郎は厭々ながら山本の手下に付いて、最初は新聞社の活字を盗んで、牛肉を買つて食べる位の事でしたが、盗む事も馴れると何とも思はなく



なるまで良心が麻痺して仕舞ひ、山本に勧めらるる儘本屋の店先から本を盗んで来る。雑貨店から帽子を搔拂つて来る。一年経たぬ間に本物の泥棒になつて、夜學校に通つて勉強する事などは、遠の昔に忘れて仕舞ひ、二年三年は夢の間に過ぎて、五年目の或日。
 『つい思出したが今日は次郎君と新橋の停車場で逢ふ日だ。あゝ自分は今まで馬鹿な月日を過した。五年の間に何一つ成功もせず、覺えたことは悪事ばかりだ。例へ失敗しても必らず往く事にしようと約束して居るのだから行かないと次郎君に濟まず、今更逢ふ面目次第』



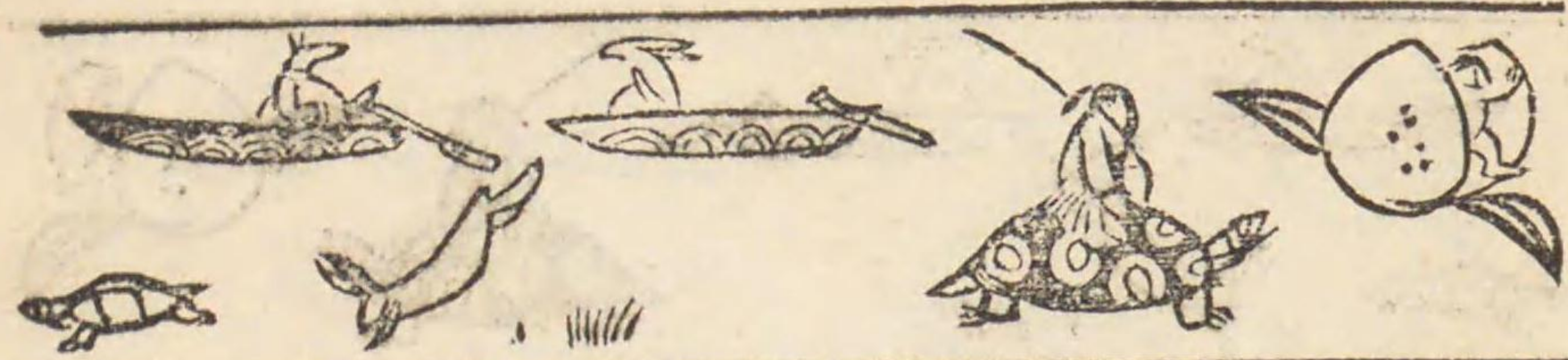
もないが、兎に角出掛けて見よう。』
 と悄悄新橋の停車場に行つて見ますと、次郎は一時間前から待つて居たと云つて、莞爾々々して一郎を迎へました。二人は五年目に逢つて、何とも云へぬ程の懐かしい感じがしましたが、次郎の洋服姿に引替へ一郎は見すばらしい服装をして居るものですから、次郎は急いで一郎を停車場附近の宿屋に連込んで、其處で緩り五年間の身上話を致しました。次郎は一郎と別れて以來、牛乳配達の傍芝の夜學校で暫く勉強をして居りましたが、二年目の春から工手學校(夜學校)に通つて、卒業後東京府廳の



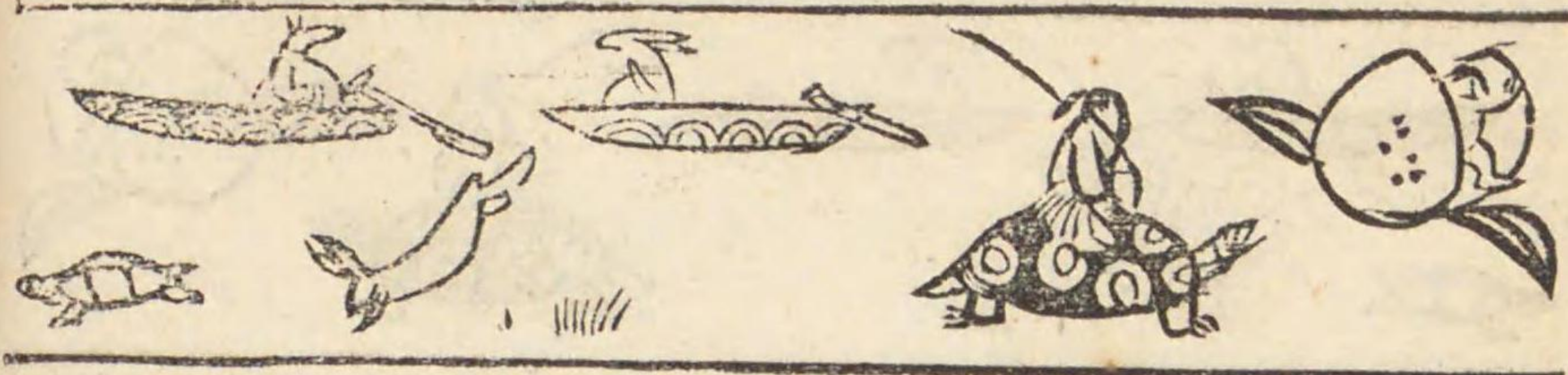
「技手となつて居る事を物語り、一郎は悪書生の爲に悪い事を教へられ、今も矢張新聞配達でもしなくては食ふにも困る身上だと、五年間の出来事をお互ひ打明けて泣いたり笑つたりしました。」

「併し君は感心だ。普通の人なら悪い事をしたなごは決して明さぬものだが、君は僕に其れを打明けて呉れた。まだ君は心から墮落して居るのではない。これから魂を入替へて勉強し給へ。」

と次郎が一郎に申しますと、
「難有う。これから改心して勉強をしよう。今まで悪事



を働いた代り、罪亡ぼしに善い事をして、生れ替つたやうな人間にならう。然し君は實に感心だ。能く悪い風にも染まずに成功をしたね。
と一郎は感心して、次郎の成功を譽めました。
「また成功とは云へない。勉強はこれからだ。併し僕はね、君と別れてから、新聞に載つて居た、天皇陛下の御製を拜見して、大層心に感じた事があつたからね、其の御製を忘れぬやうに、ノートの上にも、牛乳配達の見札にも書付けて持つて居たよ。其れで格別失敗もなく、学校だけは漸つと卒業したのだ。」



と次郎が斯う申しましたから、

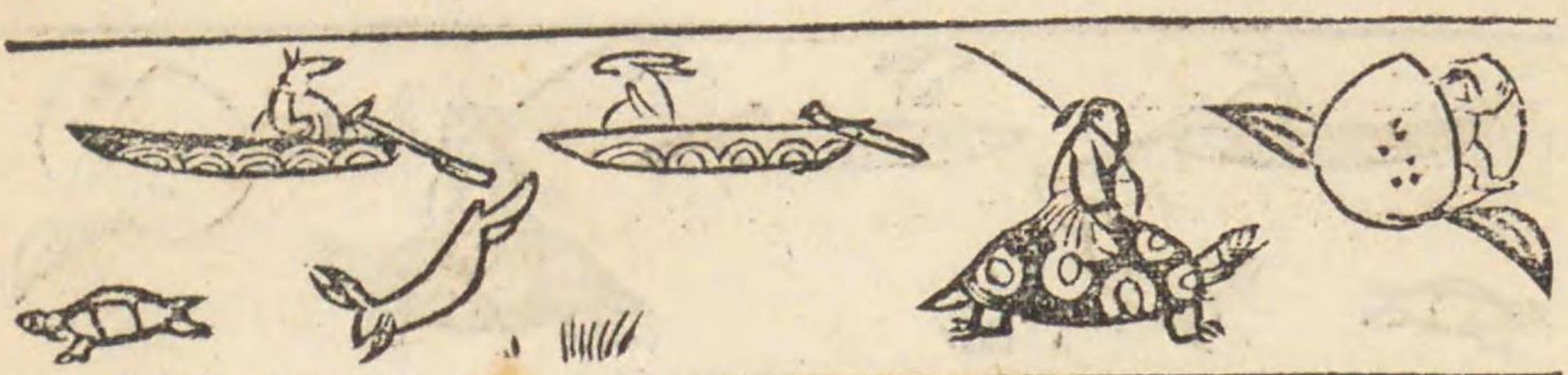
『御製は何う云ふ御製かね。』

『府廳に勤めるやうになつてからは、何日も斯うして洋服の中に入れて居るよ。』

と次郎が洋服の隠から出して、一郎に示した紙には、

（開け行くみちにいでゝも心せよ、つまづくことのある世なりけり。）

と書いてありました。



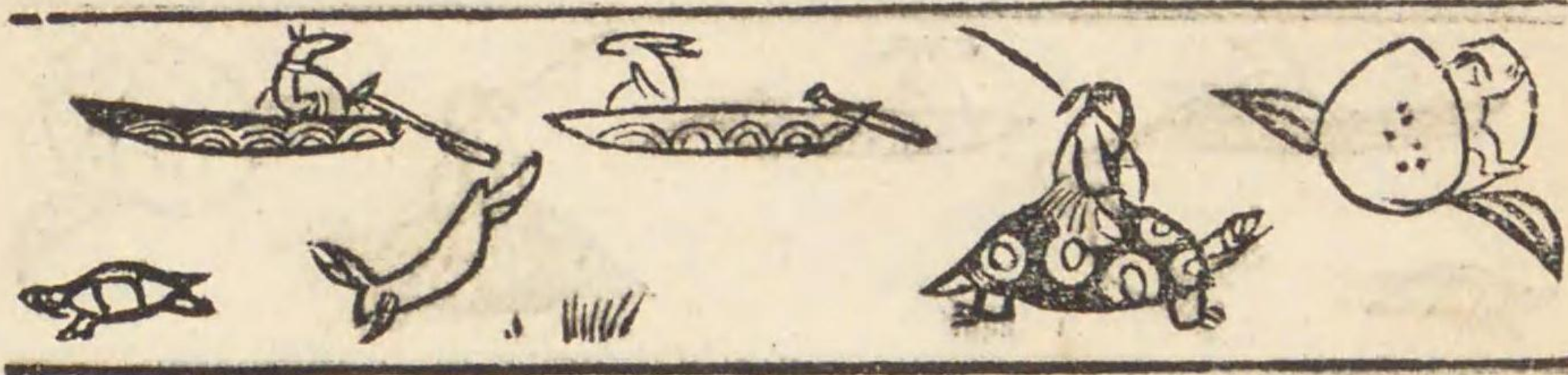
第七 閻魔の竹裁判

竹馬に心の乗りててならひに

おこたりし日を今おもふかな

謹解 竹馬などの遊び事に心を奪はれて、手習を怠つた小供の時分の事を、今思ひ出して後悔をする。と、手習の御題で詠ませられた御製であります。

武太郎は日曜一日を遊び疲れて、眠い〜と云つて九時頃から寝て仕舞ひましたが、不圖眠を覺して見ますと、不思議な事には今まで見た事も來た事もない、或る大川端



に立つて居りました。

「おや變だぞ。僕は先刻寝たばかりだが、何うも不思議な處に来て居るものだ。一體何時僕は此處に来たのかわらん。」

と邊を見廻して見ますと、一人のお婆さんが莞爾々々して武太郎を手招きしながら、向ふの方に立つて居るのが見えました。

「彼處にお婆さんが居る。僕を招いて居るやうだ。一つ行つて見よう。」

とお婆さんの立つて居る處に行つて、

「お婆さん今日は、御機嫌宜敷う。」

と挨拶を致しますと、

「お愛憎の可い坊ちやんだね。幾歳におなんなさる？」

「僕は十三です。お婆さんは？」

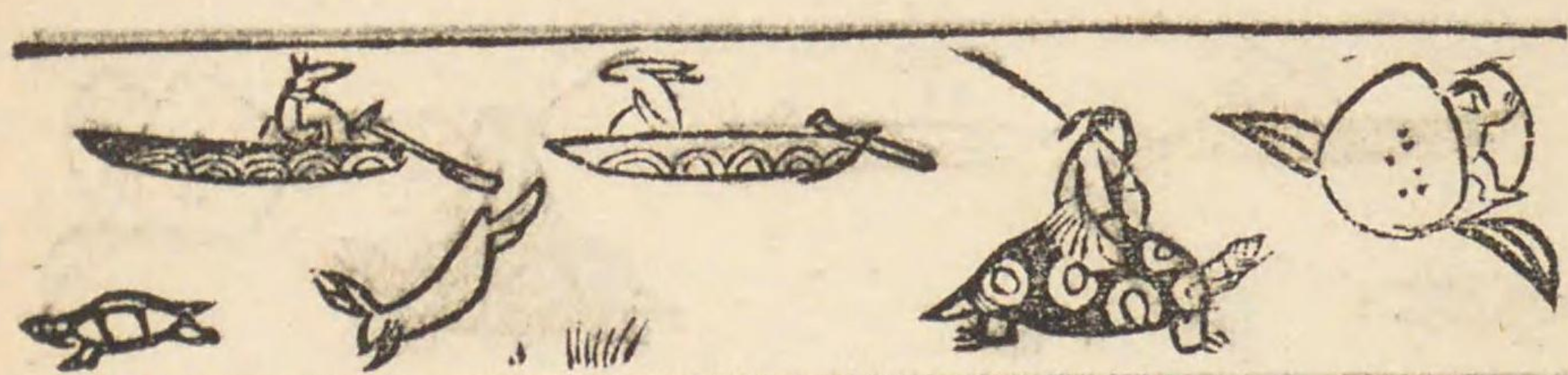
「私かね。私には歳はありません。」

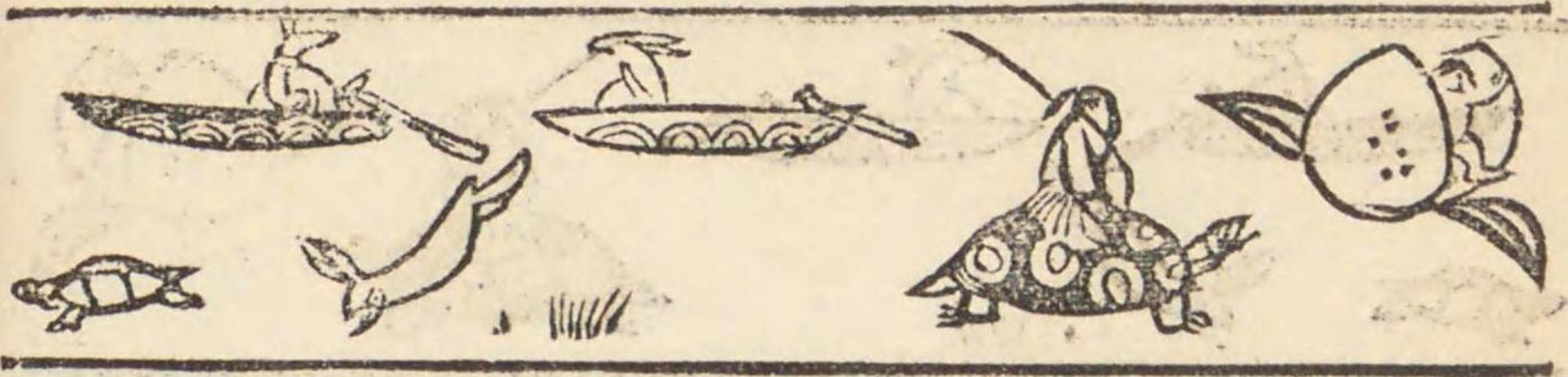
「歳はないんですつて、歳のない人間もあると見えますね。不思議々々。」

武太郎は眼を圓くして、お婆さんの顔を見詰めました。

「私は人間ではないから、歳はないんですよ。」

「おや。お婆さんは人間では無いんですか。ちや狐のお





「化なんてですか。」

「狐のお化ぢやない。脱衣の婆です。」

「脱衣の婆？ 戲談でせう。脱衣の婆は三途の川に居るお婆さんぢやありませんか。」

「此の川が其の三途の川なんです。坊ぢやんはまだ知らないんですね。」

「脱衣の婆は、大川を指さして笑ひました。武太郎は大喫驚。」

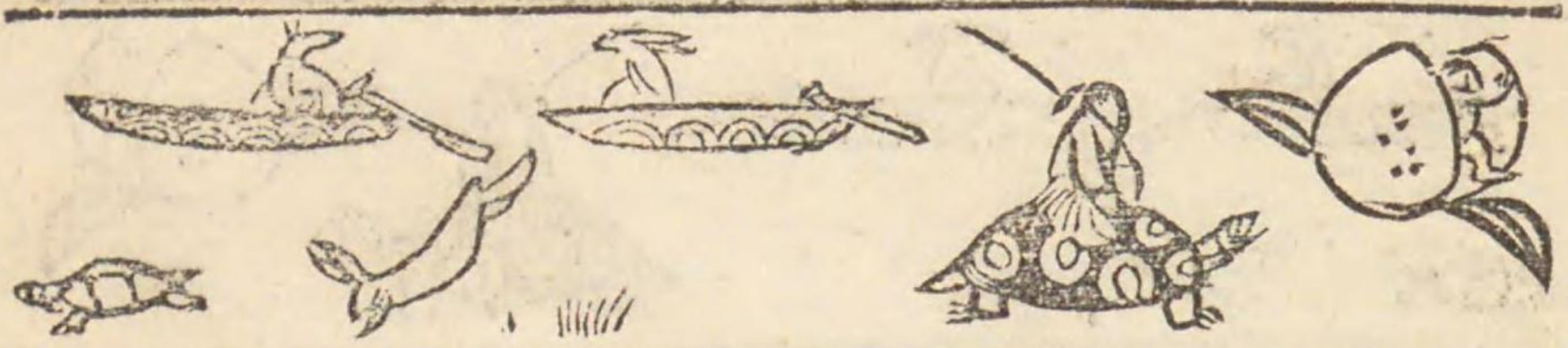
「此の川が三途の川。お婆さんは脱衣の婆。すると僕は生きてるんですか。死んでるんですか。」

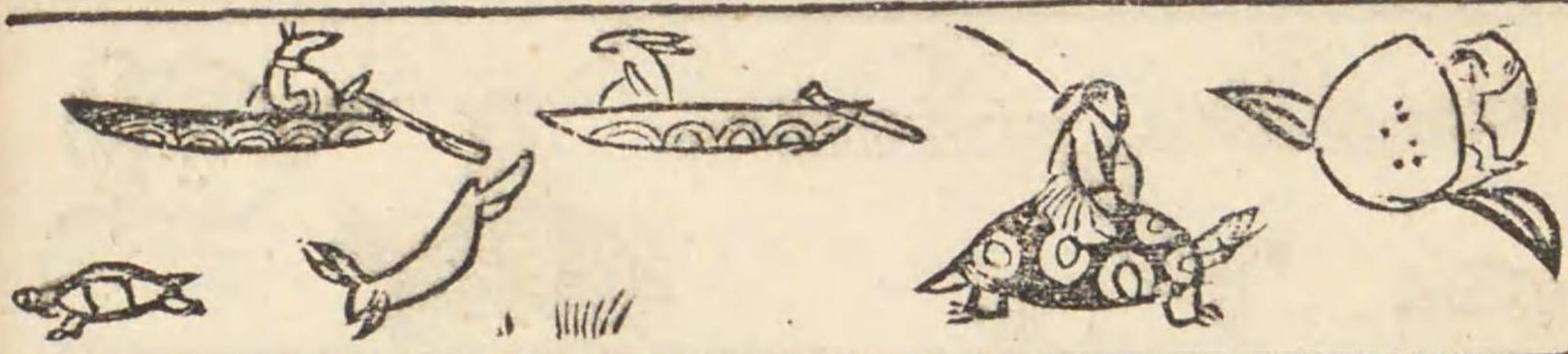
「坊ぢやんは、生きて居らつしやるんです。生きて居らつしやるから、言葉だつて丁寧ていねいに云ふんですよ。死人だと云捨てなんてすからね。」

「其れで安心あんしんしました。そして生きてる僕ぼくが何なにうして三途の川に來たんでせう。不思議ふしぎですね。」

「實じつはね、閻魔えんまの廳ちやうで百年ひゃくねんに一度宛どある植物しよくぶつの裁判さいばんをお眼めに掛かけようと思おもつて、寢ねて居ゐらつしやるのを窃そつと御案内ごあんない申まうしたんです。」

「植物しよくぶつの裁判さいばん、不思議ふしぎな裁判さいばんですね。一體たいど何なにう云いふ裁判さいばんなんですすか。」





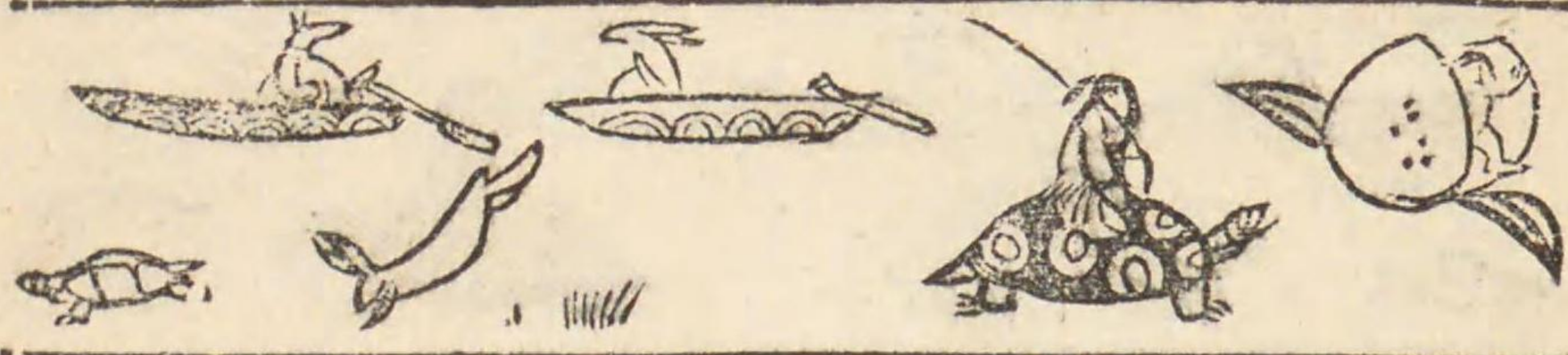
「植物にも人間の爲になつたものもあれば、人間を害したものもあるでせう。其れを一々閻魔様がお捌きになつて、人間の爲になつたものは極樂へ、害になつたものは地獄へお落としになるんです。」

「丁度人間と同じなんです。」

「少しも變りはありません。さあ参りませう。最う裁判が始まつた時刻です。今日の裁判は植物中の竹の裁判で、明日は松の木の裁判なんです。」

「毎日一種宛ですか。」

「種類が多いものですから、一日に一種か二種宛です。」



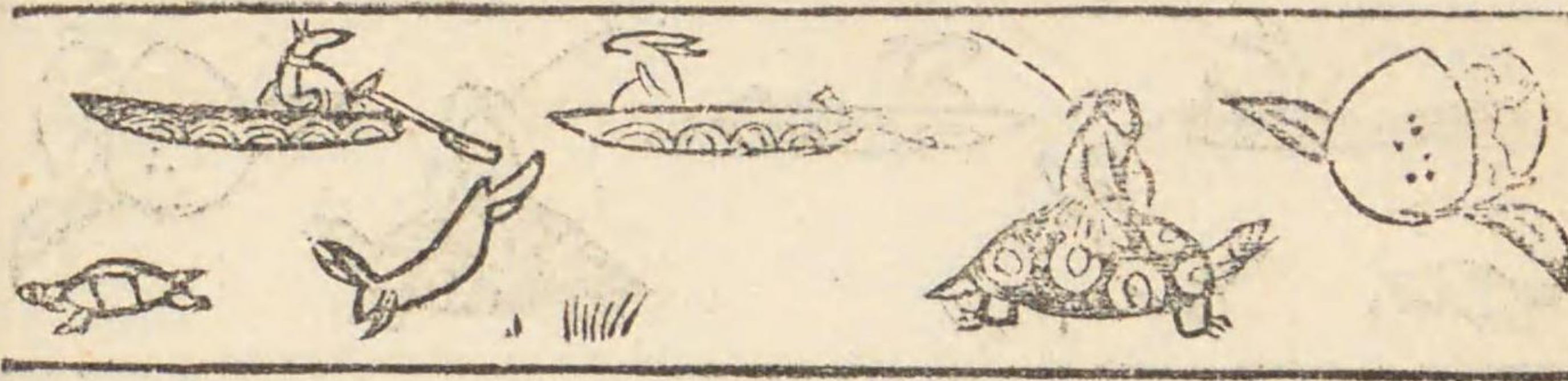
「閻魔様も中々骨が折れませう。」

「大變なお骨折りです。さあ閻魔の廳に参りました。私に跟いて來なさい。」

と脱衣の婆は武太郎を大きな建物の前に連れて行つて、玄關口から奥の方へ案内しました。

「此處が公判廷です。お入んなさい。直ぐ最う裁判が始まりますから。」

と百疊敷ばかりの公判廷に武太郎を連込みました。すると問もなく正面に閻魔様がお出になり、數多の竹類の裁判をお開きになりましたが、最初閻魔様の御前に引出さ



れたのは古い尺八でありました。

「お前は最う鳴らなくなつたから冥土に來たのだな。娑婆では人間の耳と心を樂ませる樂器の一つで、随分手柄もあつたやうだが、お前の爲に身を過つて法界節屋になつた人間もあると云ふ報告ぢや。けれども身を過つたのは人間の方が悪い。お前には罪はない。極樂に行つて宜敷い。」

尺八は一禮して、

「難有う御座います。」

と牛頭馬頭に連れられて法廷をえました。次に引出され



たのは、一本の竹箒でありました。

「お前は竹箒か、何年娑婆で掃かれたかね？」

「三年三ヶ月掃かれました。」

「神妙に勤めたものだ。お前も極樂ぢや。」

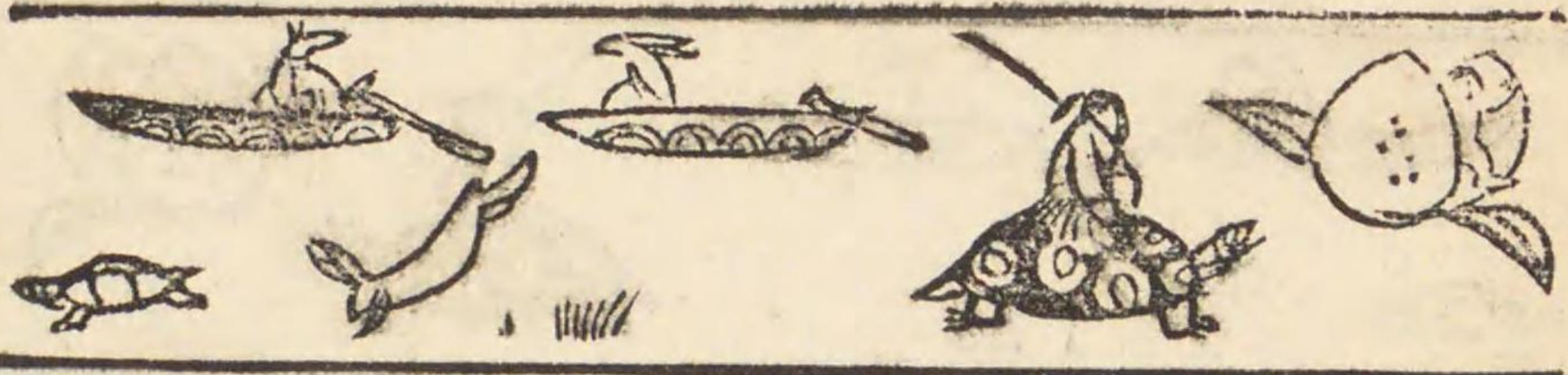
「難有う御座います。」

竹箒の次には煙管の羅宇が罷出でました。

「お前は随分人間にニコチンの害毒を吸込ませたな。不届な奴ぢや。火灸りの刑に處するぞ。早く地獄に立て

い。」

煙管の羅宇は何ぞか云開きをしようとしまされたけれど



も、牛頭馬頭が引立て、法廷を出ました。次に引出されたのは五六寸位の小さな竹こ、三四尺の大きな竹でした。

「此度は二本揃つて来たやうだな。お前方は鳥渡見ること

只の竹片のやうぢやが、婆娑では何を致して居たか。」

「私は筆の管を勤めて居りました。」

「道理で小さいと思つた。大きな奴は何を致して居た？」

「私は竹馬の竹でありました。」

「何だ竹馬の竹であつた。竹馬は小供の玩弄に用ゐるものぢやな。」

「左様であります。」

「筆の管の方から裁判を致す。お前は柄は小さいが仲々

殊勝な奴ぢや。人間はお前が居ないご手習も出来ず手

紙も書く事は出来ない。小供の手習用になるだけの手

柄だけでも金鷄勳章以上ぢや。極樂も極樂、極樂の一

等席に大威張りで行つて宜敷い。其れから竹馬の竹の

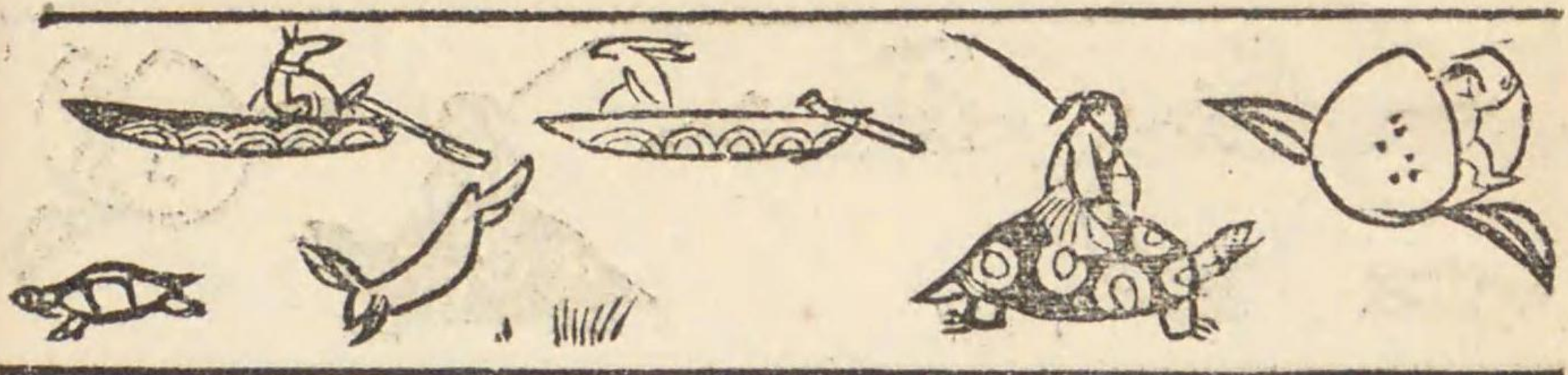
裁判ぢや。」

閻魔様は皿のやうな大きな眼玉をして、

「お前は大分小供を害して参つたな。手習をする氣にも

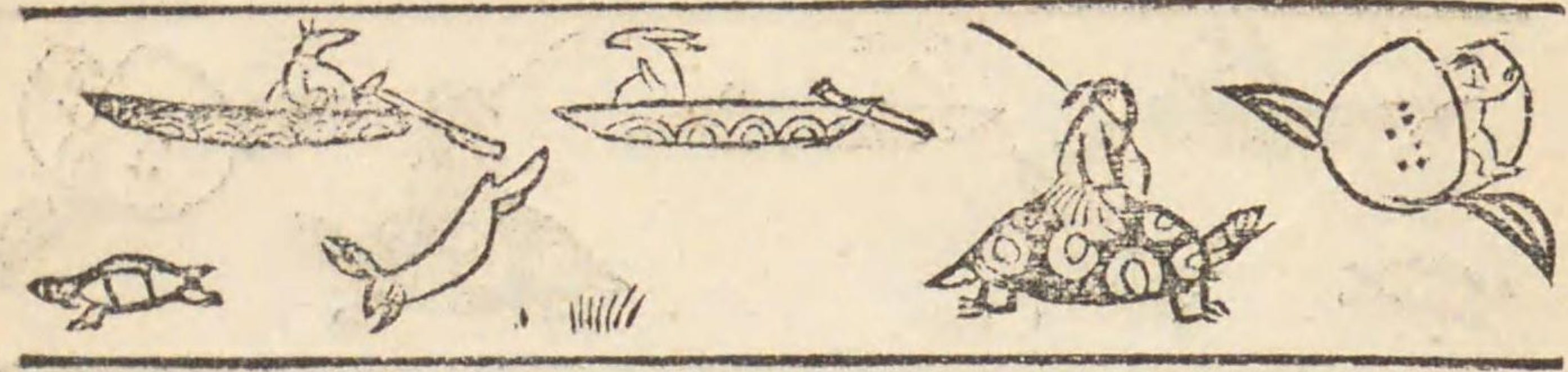
ならせず、本を讀む氣にもならせず、自分の方にはかり





引付けて、小供を懈怠者にした罪は許す事は出来ないぞ。お前のやうな不埒な奴が居る爲に、人間は成長してから大層後悔をすると云ふ事ぢや。日本の天子様も竹馬に心の乗りててならひに、おとたりじ日を今おもふかな。と云ふ和歌を詠んで居らつしやる程ぢやぞ。煙管の羅宇同様火炎の刑に處するから左様心得ろ！」と仰せられて、武太郎の方を御覽になり、

「傍聴席の人間の小供、お前も今の内餘り竹馬なごに乗つて、遊ぶ方ばかり氣を取られて居ること、大きくなつてから後悔をするぞ。」



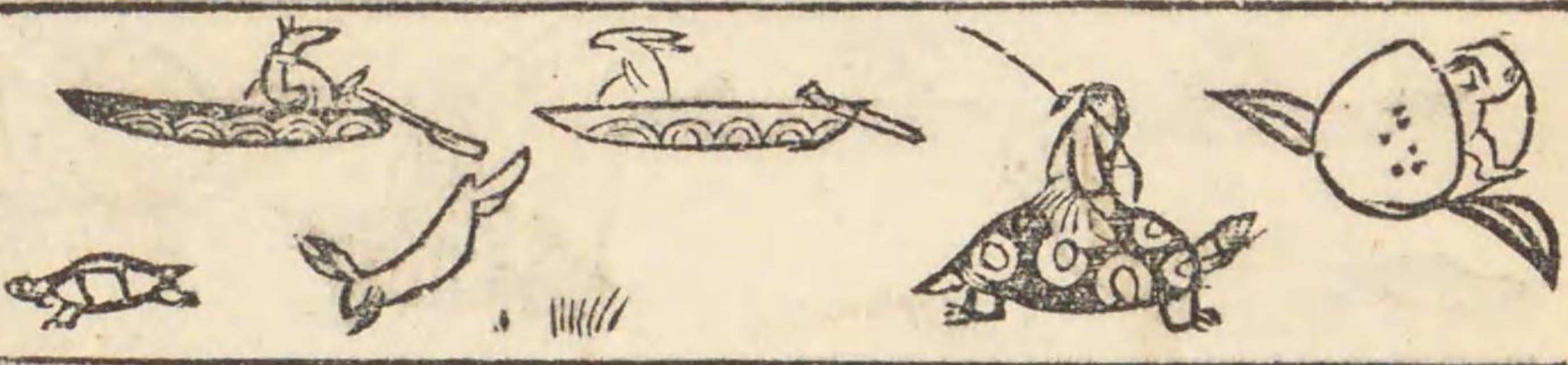
とお暇付けになりましたから、武太郎は一縮みになつて、

「はう。」

と頭を下げた拍子にパツチリ眼が覺めること、閻魔の廳の裁判の場は消えて、邊を見廻すこと、矢張寢床の中に寢て居たのでした。

「あゝ今のは夢だつたのか。」

と武太郎はほつと息を吐きました。



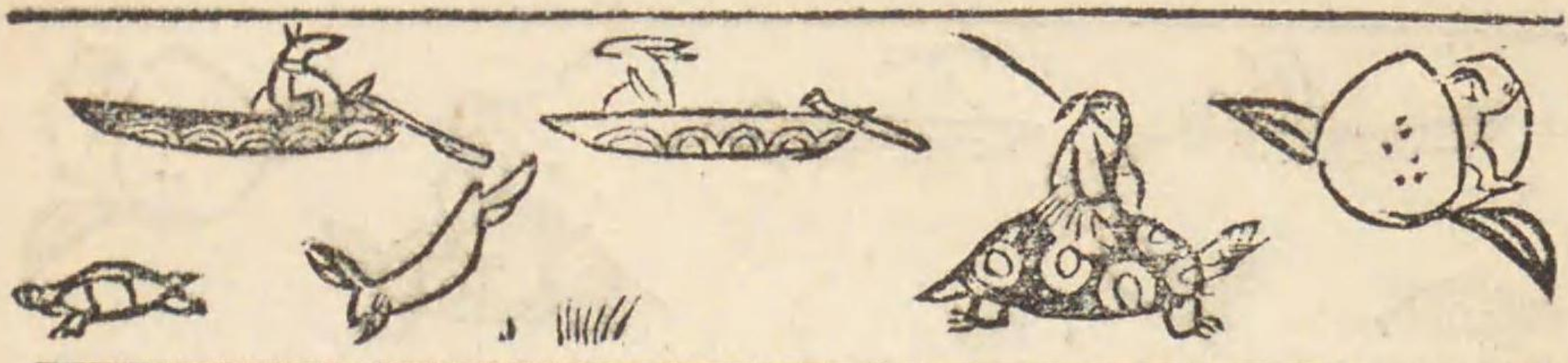
第八 不老不死の妙薬

つねに身のやしなひ草をつみてこそ

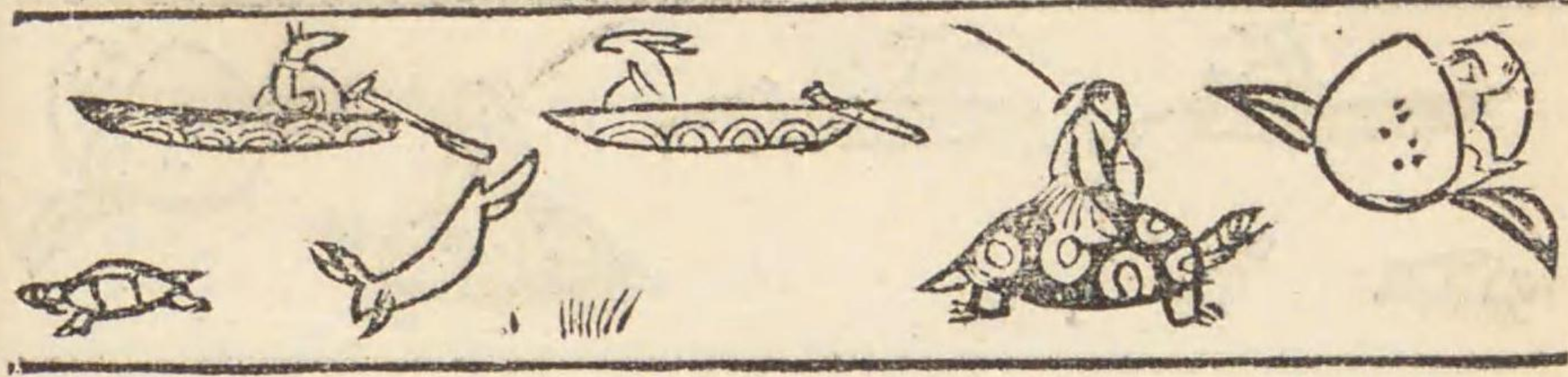
ひとのよはひはのぶべかりけれ

【謹】人と云ふものは、平素攝生法を盡してこそ、長生もするものである。攝生を怠つて決して壽命が延ぶものでない。と、衛生の重んずべき事を詠ませられた御製であります。やしなひ草をつみてとは、衛生の道を盡してと云ふ事でありませぬ。

木曾の山奥に、不老不死の薬草が生へて居るご聞いた徳太郎ご云ふ少年は、早速草鞋脚絆で木曾の山奥に出掛けました。



『實際生へて居れば可いな。早く探當てたいものだ。』
木曾の山奥に分入り、彼方此方を一生懸命になつて探しましたが、數多生へて居る草の中で、何れが不老不死の薬草か何うも判断が付かず、赤い花の咲いて居る草や白い實の生つて居る草やを澤山摘んで靴に入れ、摘んでは靴に入れて、靴一杯種々の珍しい草を摘み貯め、
「兎に角これだけ摘んだ草の中には、不老不死の薬草が交つて居るに違ひない。理科大學の先生に鑑定をして載いて、何の草が不老不死の薬草か、確なところが分つた上で、又摘みに來る事にして置かう。いろんな草



が入つて居るから、大分鞆が重くなつた。』
と鞆を肩に掛けて、山を下り掛けますと、ひよつこり一人の上品なお翁さんに出逢ひました。

『これお前の鞆に入つてるものは何か。』

とお翁さんが鞆を指さして聞くものですから、

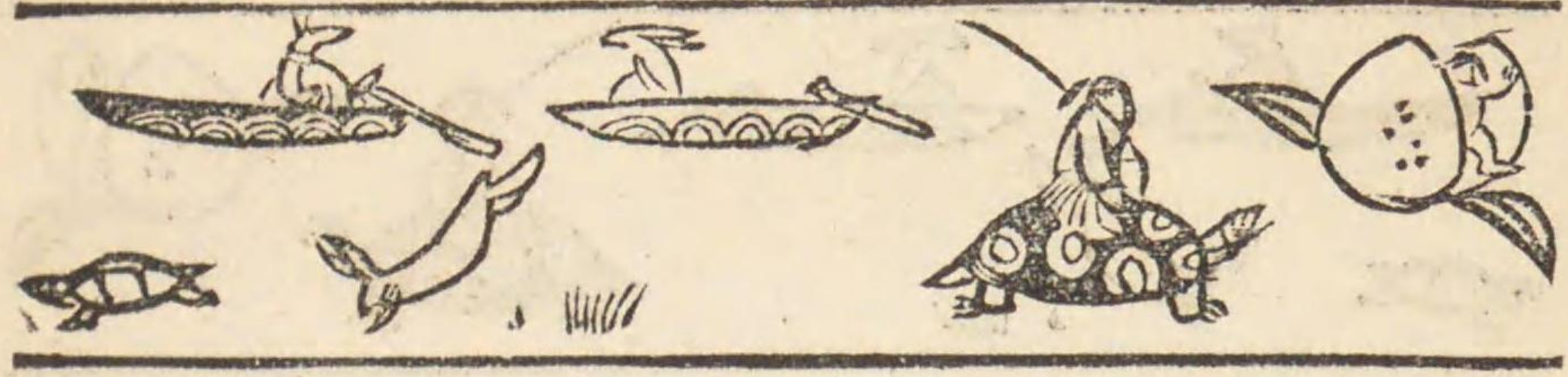
『草を摘んで入れて居るんです。』

徳太郎が斯う答へますと、

『植物採取に来たのだね。』

『いゝえ。僕は不老不死の薬草を摘みに来たんです。』

『何だ不老不死の薬草を摘みに来た。不老不死の薬草が』



生へて居たかね。』

『何うだが分りません。理科大学の先生に鑑定して戴か』

うと考へて居るんです。』

『何れ私に見せて御覧。一つ鑑定して上げよう。』

『お翁さんは理學博士ですか。』

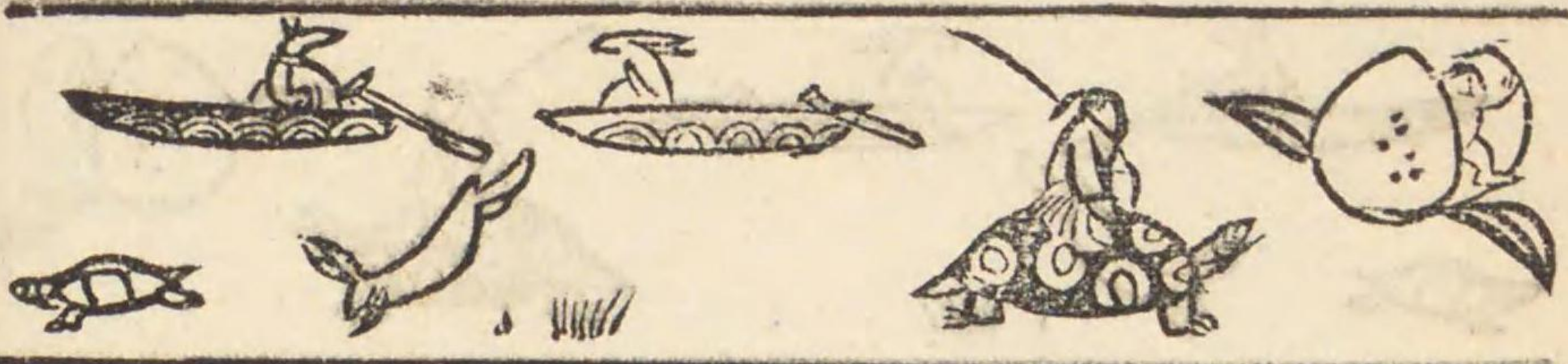
『理學博士ぢやないが、私が鑑定すれば直ぐ分るんぢや。』

『ぢや鑑定して下さい。』

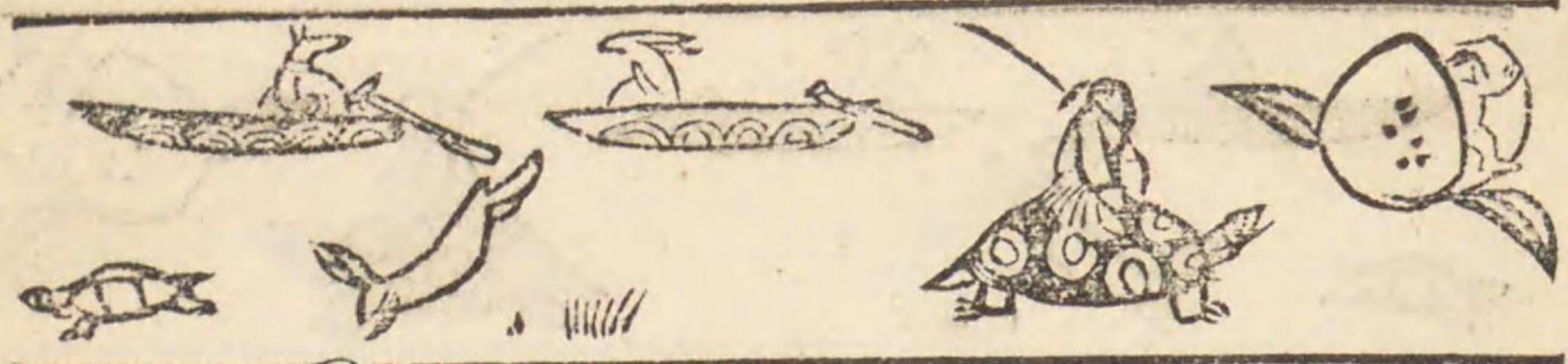
と徳太郎は鞆の中からいろいろの草を取出して、お翁さん

の前に並べますと、お翁さんは一々手に取上げて見て、

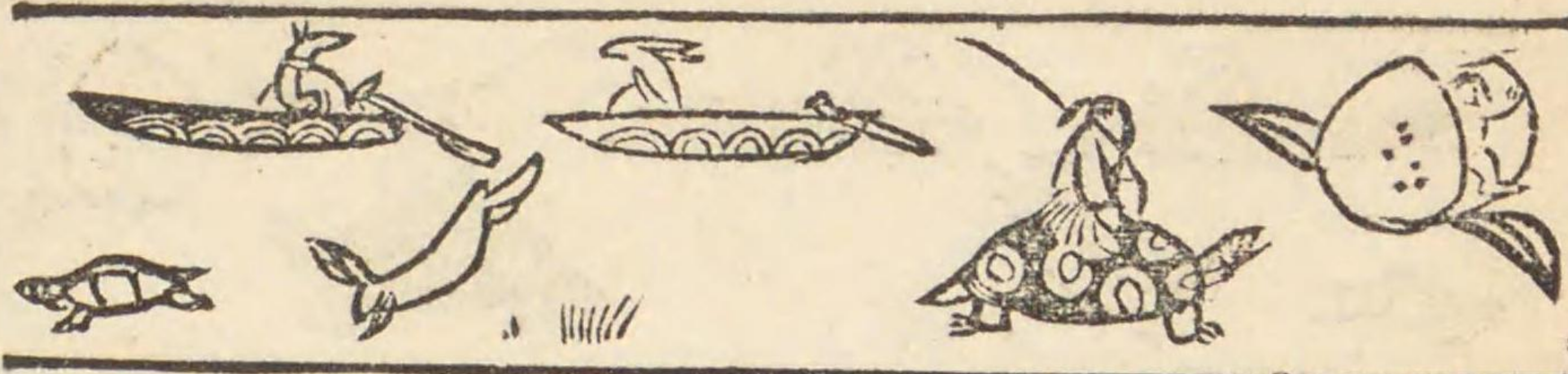
『皆な只の草ぢや。不老不死どころか、風邪の薬になる』



草もありやしない。』
『困りましたね。不老不死の薬草は交つては居ませんか。』
『居るものか。はこべだのぺんく草だのばかりぢや。斯んな草を幾何摘んで歸つたつて、牛か馬かしか食はないよ。其れよりか私の庵室に來なさい。不老不死の妙薬になるものを教へて上げよう。』
『難有う。其れぢや参りませう。』
『其んな詰らん草は其處に捨て、仕舞なさい。』
云はるゝ儘に、徳太郎は鞆の中の草を一つも残らず捨てて仕舞つて、お翁さんの後から跟いて行きました。



『私の庵室は此處ぢや。さあお上り。』
とお翁さんは、徳太郎を小さい庵室に連れて行つて、六疊ばかりのお座敷に案内しました。
『其晴しの可いところですね。あゝ涼しい。』
『涼しいぢやらう。まあお座り。ところでお前は不老不死の薬草を摘んで歸つて何うする積りだつたかね。』
『長生をする考へでした。』
『武内宿禰のやうに長生をする考へを起したんだね。』
『折角生れて來て、五十年や六十年位生きてるのは馬鹿らしいでせう。』



「其れは馬鹿らしい。併し長生をするのには、不老不死の薬を飲まなくつたつて結構だよ。」

「左様ですか、併し……」

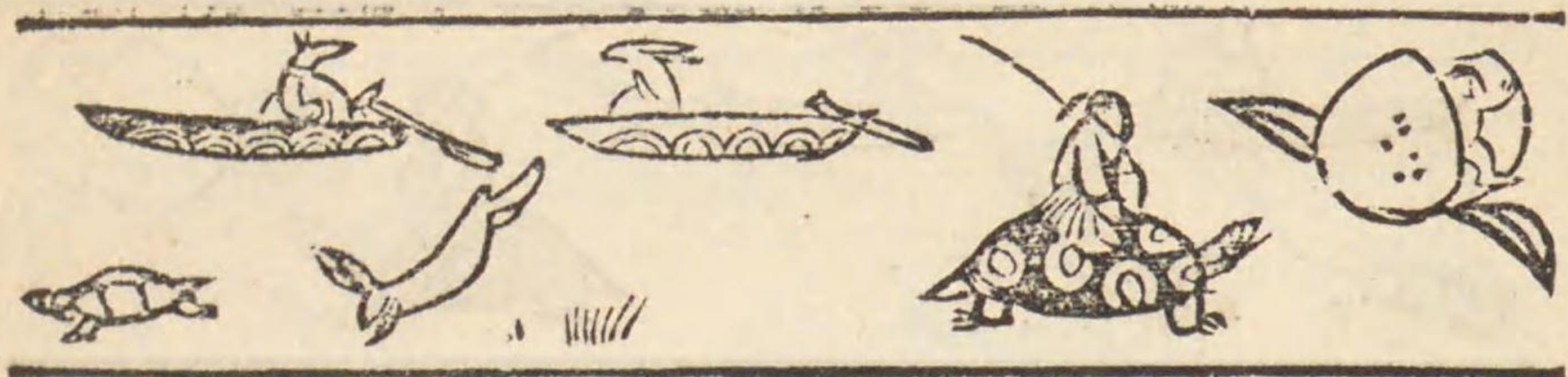
徳太郎が併しこ云ふのをお翁さんは仰へて、

「併したあ、私の方で云はうと思つてるんぢや。併し長生をするには、長生をする方法があるよ。」

「其れを聞かして下さい。」

と徳太郎が膝を進めますと、

「其前に尋ねて置きたい事があるが、お前は食物の中で何が一等好きかね。」



「僕は蒸菓子が一等好きです。」

「幾何ばかり食べるかね。」

「十五でも廿でも食べます。あるなら御馳走して下さい。」

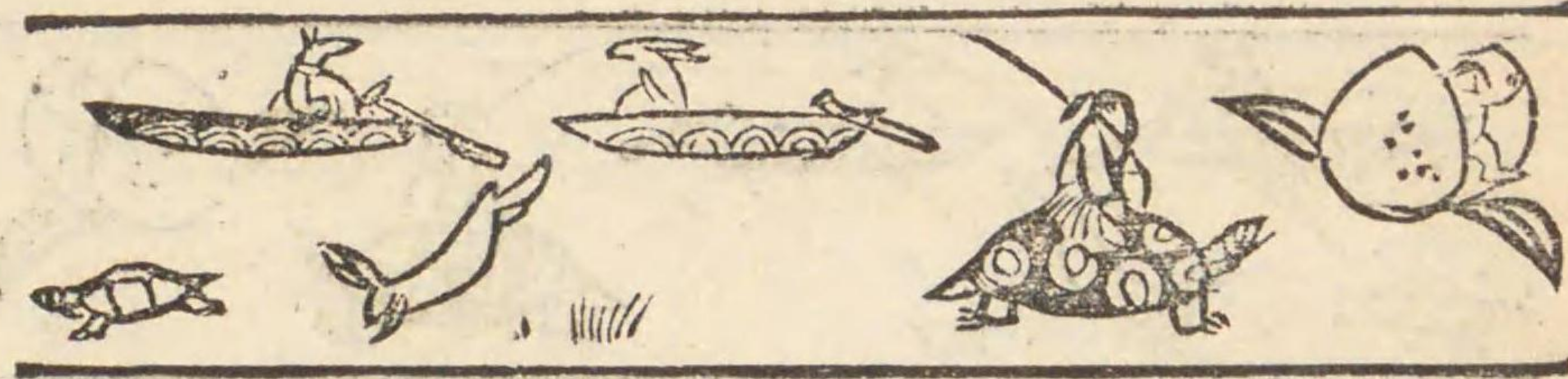
「お前はまだ小供だから、酒を飲んだり、煙草を吸つたりはしまいが、朝は何時に起きて晩は何時に寝るかね。」

「朝は八時に起き、晩も八時に寝ます。酒や煙草は飲みません。」

「大きくなつたら。」

「大きくなつたら飲むかも知れませぬね。」

「不可ないよ、蒸菓子をペロリと甘も食べて、晩は早く



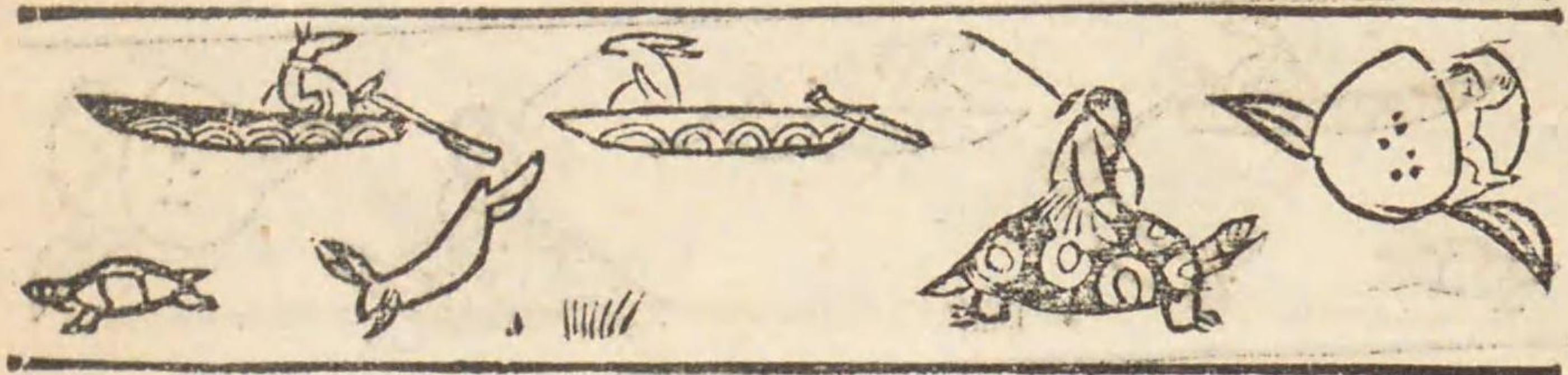
不老不死の妙薬

一〇〇

寝、朝は遅く起き、大きくなつたら煙草も吸ひ、酒も飲むと云ふやうな考へを持つて居るなら、お前は長生はしない。三十になる前に死んで仕舞ふ。私が受合つて置きます。

「其んな事を受合つては困りますね」

「困つても仕方はない。長生をしようと思へば衛生を重じなければならぬ。お前のやうな小供の内から軀を大切に置いて置かないと、大きくなつてからは追付かないよ。其んな不攝生をして居ながら、不老不死の薬草を探しに来て、何百年も何千年も長生をしようと思ふな



んてお前は横着な小供ぢや。私は取つて百二十五歳になつたが、今まで煙草も吸はず、酒も飲まず、朝寝もせず、蒸菓子も二つ以上食べた事はない。斯うして軀を大切に居るから、此先何百年長生するか今分では鳥渡分り悪いね。不老不死の薬なんか其んな物は入らぬこつぢや。」

「お翁さんは今が百二十五歳ですか。僕より百十歳も多

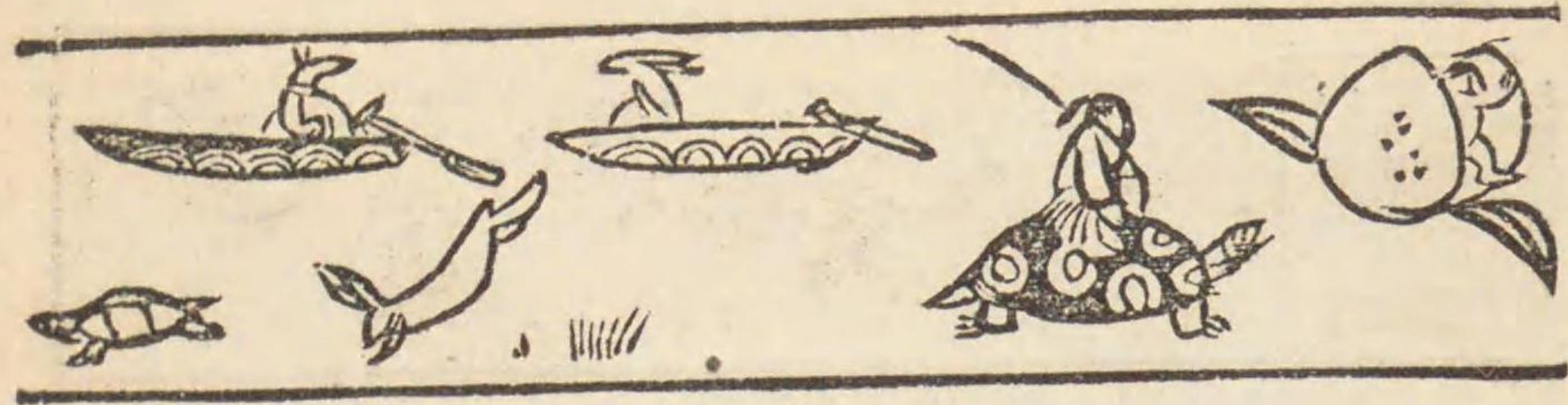
いんですね。驚いて仕舞ひましたね。」
「驚いたらう。お前だつて軀の攝生法を守ると、私のやうに長生が出来るんぢや。床に掛けてある彼の掛物を

不老不死の妙薬

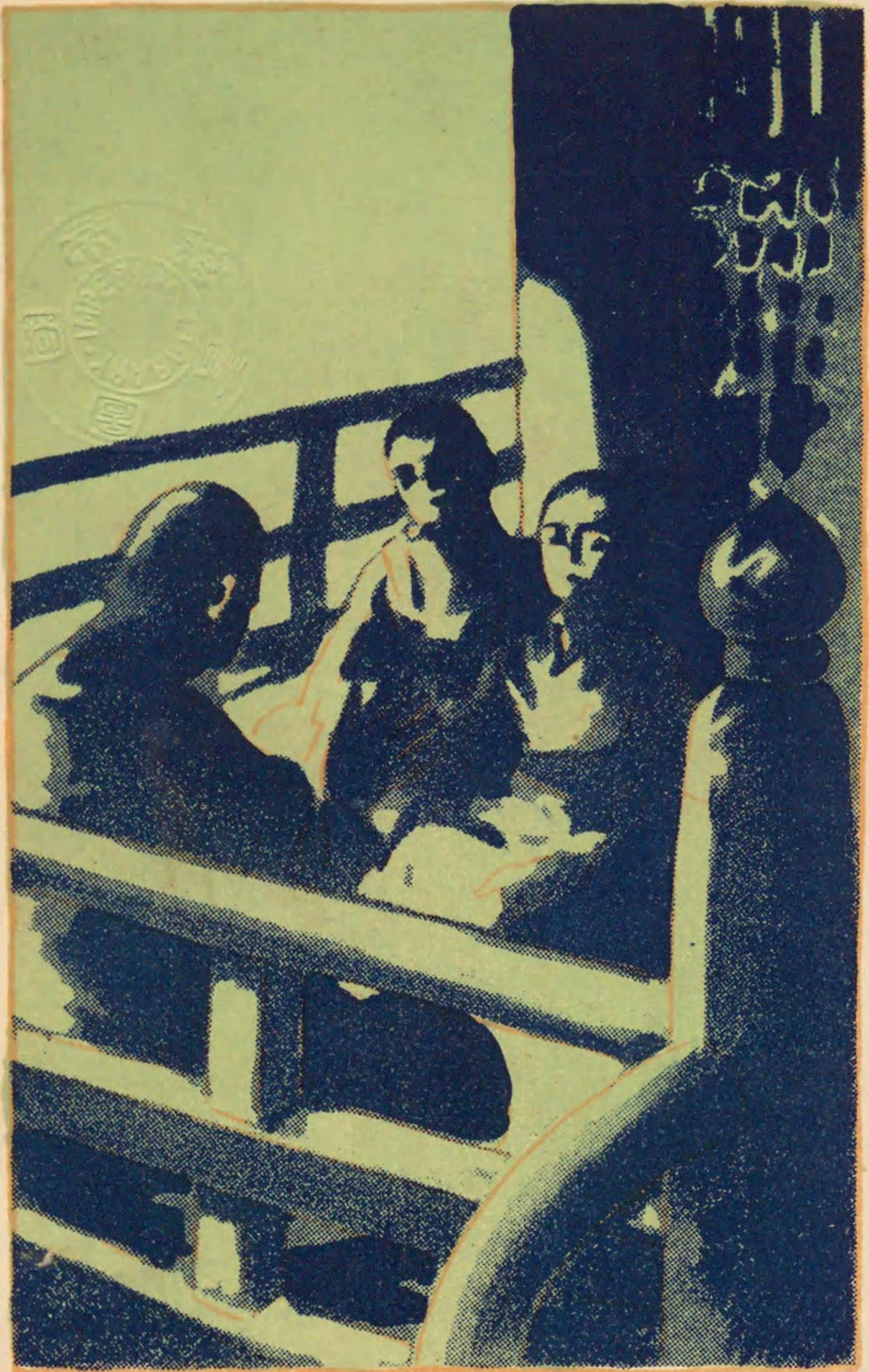
一〇一



御覽。(つねに身のやしなひ草をつみてこそ、ひこのよ
 はひはのふべかりけれ)。天皇陛下の御製ぢやから、
 謹しんでお聞きなさい。やしなひ草は、山に生へて
 居るか居ないか分りもせぬやうな不老不死の樂草では
 ない。身を養ふ衛生の道と云ふ事ぢや。衛生を重んじ
 さへすれば、人間の壽命は延ぶものぢやと云ふ事を仰
 せられた御製ぢや。此の掛物はお前に上げるから、持
 つて歸つて床に掛けて朝晩拜みなさい。そして不老不
 死の藥草を探すのは止して、衛生を重じて私のやうに
 長生をなさい。分つたかね。』



『分りました。難有う御座いました。』
 と徳太郎はお翁さんから掛物を貰つて、木曾の山奥から
 飛んで歸り、早速其の掛物を床の間に掛けて置いて、蒸
 菓子や澤山食べる事も止し、朝は早く起き、晝寢夜遊び
 を慎しみ、大きくなつてからも、酒煙草は一切用ゐず、
 軀の攝生を重んずるやうになりましたから、百年生きる
 か、千年生きるか、木曾の奥山のお翁さんのやうに、此の
 先の事は一向分らないと樂しんで居るさうです。



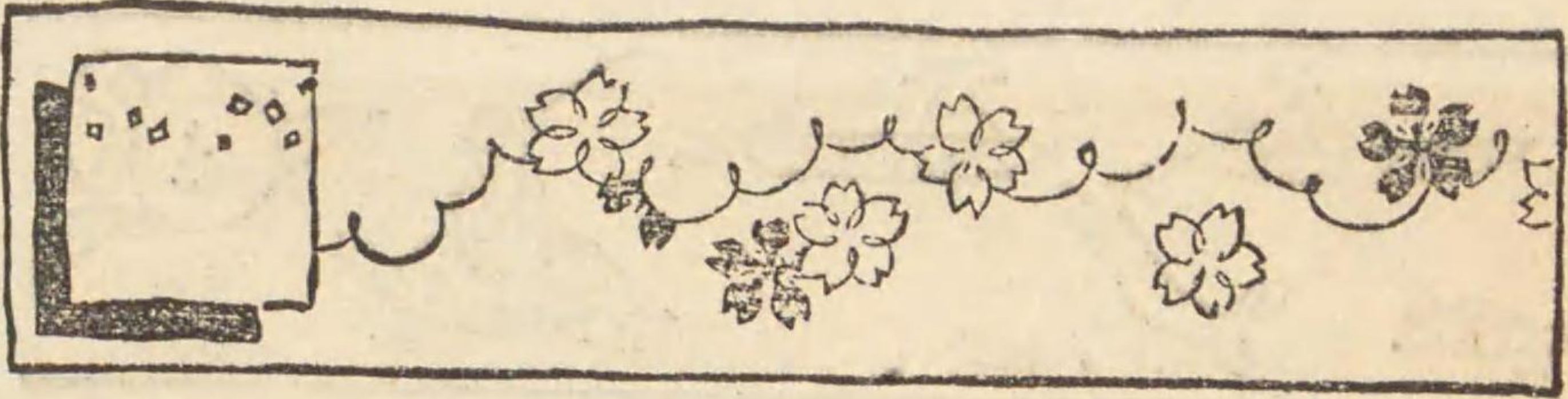
第九 不思議な乞食

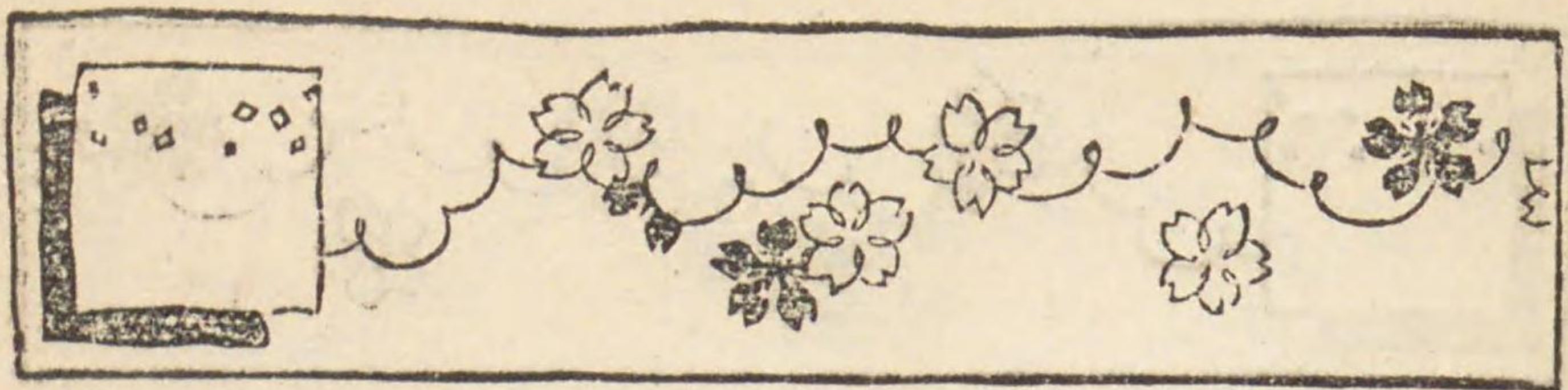
たらちねの親の心はたれもみな

こしふるまゝにおもひ知るらむ

【譯】親の心と云ふものは、子供の時は誰れしも左程までもとは知らないで、年を取るに従つて段々思ひ知るものであらう。と、子の心を詠ませられた御製であります。たらちねとは、親の枕詞であります。

松之助と梅彦の二人は、親達の眼を忍んで家を飛出し、東京に上る考へて、田舎道を急いで居りましたが、段々日が暮れて、宿屋はなし、知つた人の家はなし、幸ひ眼





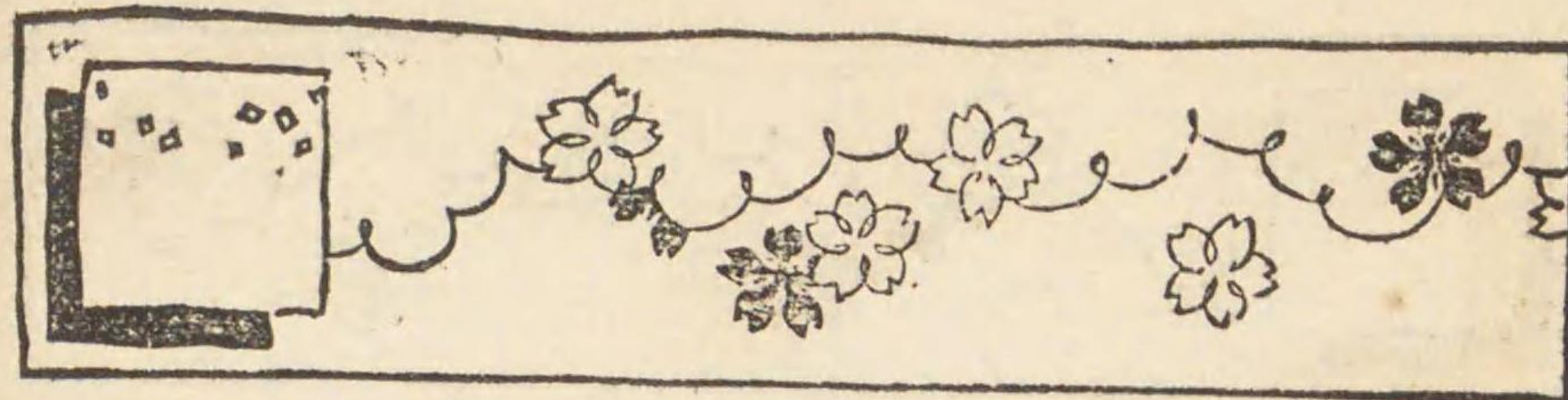
に付いた八幡宮の拜殿で一夜を明さうと、

「芋でも堀つて来て焼いて食つて、今夜は此處で寝て行かう。」

「冬でないから寒くはなし丁度可いや。」

二人は拜殿に風呂敷包などを置いて、後の畑に芋堀りに出掛けましたが、やがて手ん手に大きな芋を堀つて来て焼いては食ひ、焼いては食ひ、お腹も大分大きくなり、

「家では何處へ行つたかさ屹度心配してるぜ。東京から今着いたと云つて紙面を出したら、喫驚する事だらう



不思議な乞食

ね。」

松之助は梅彦に斯う申しますと、

「喫驚するとも、村中の大騒ぎになるだらう、面白いね。」

「面白いね。そして五年もしてから、髭でも生やして官員様になつて歸つたら、又喫驚するぜ。」

「其時、五年前に黙つて家出をしたのは悪う御坐りませしたと斷るんだね。」

「君は官員様の中で何が好きかね。」

「僕は郡長様か大林區の所長様かにな

りたい。一等好きは郡長様だ。」

松之助は郡長の豪い事を頻に梅彦に説いて聞かせまして

「君は何が好きだい？」

「僕は郡長様も可いけれど、郡長様よりも憲兵になりた

いね。」

「憲兵は兵隊だよ。官員様ぢやないよ。」

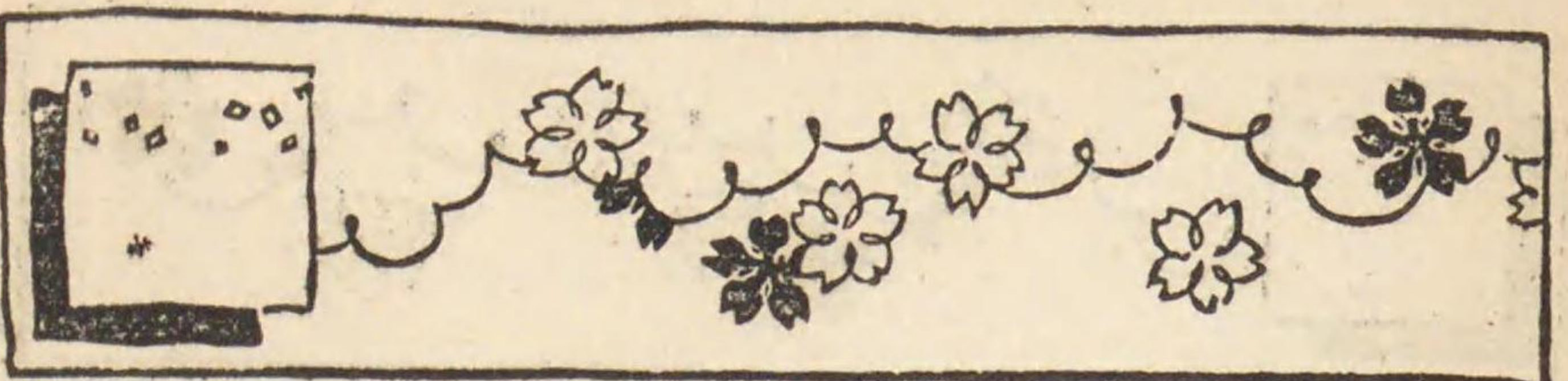
「兵隊は兵隊でも、只の兵隊より豪い兵隊だから、官員

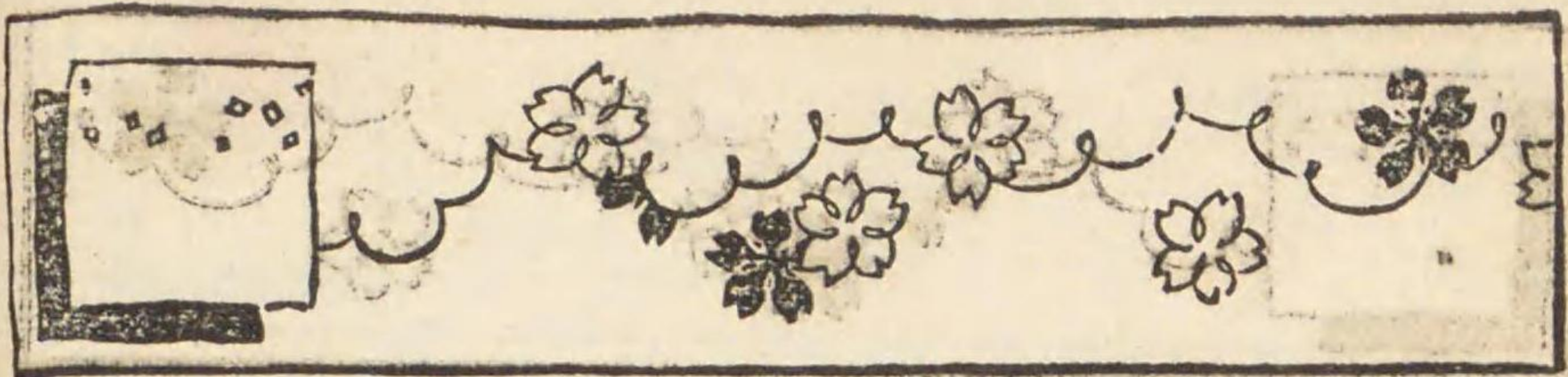
様になつたも同然だよ。」

梅彦は憲兵の威勢の可い事を熱心に説明しました。

「ぢや君は憲兵になり給へ。僕は郡長様になるからね。」

不思議な乞食





「五年もしたらなられるだらう。」

「なられるとも、大丈夫だ。」

二人が斯う云つて喜こんで居る時、拜殿前に足音がして一人の乞食が遣つて参りました。

「可い月夜だ、今夜も此處で寝る事にしようか。」

こ云ひながら拜殿に上らうとして、二人の姿を見認め、

「おやお客様があるやうだが、誰れだい。誰れだい。」

と聲を掛けました。松之助と梅彦は月の光りに透して見ますと、乞食でしたから、

「僕等は△△村の者だよ。東京に行く途中で日が暮れた

から、此處に寝て居るんだ。」

こ梅彦が答へますと、乞食は丁寧に、

「東京にお出掛けなさるんですか。其れは御奮發ですな。」

私も東京には一二年居た事がありますから、其れでは

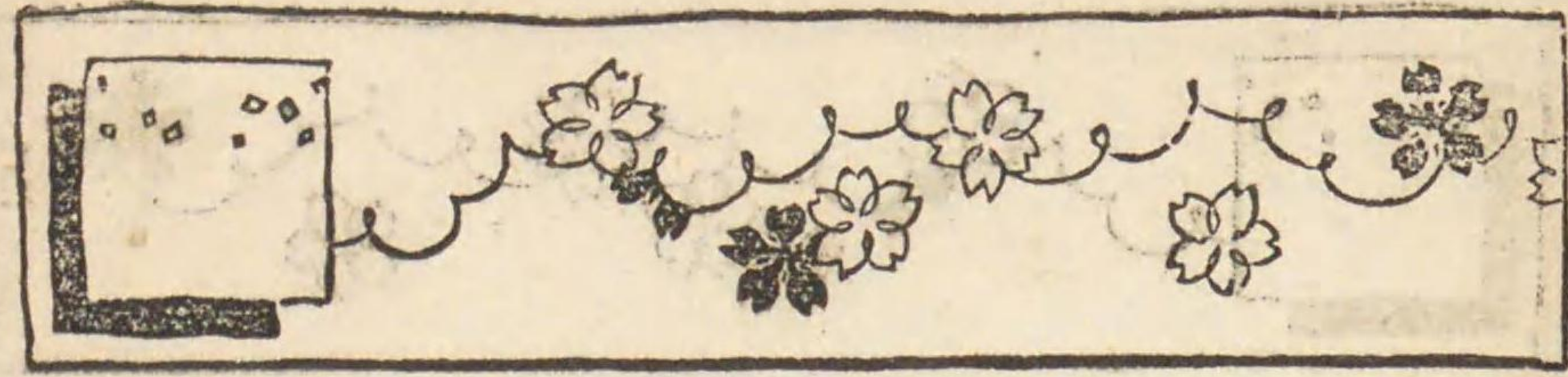
東京のお話でも致しませう。御免なさい。」

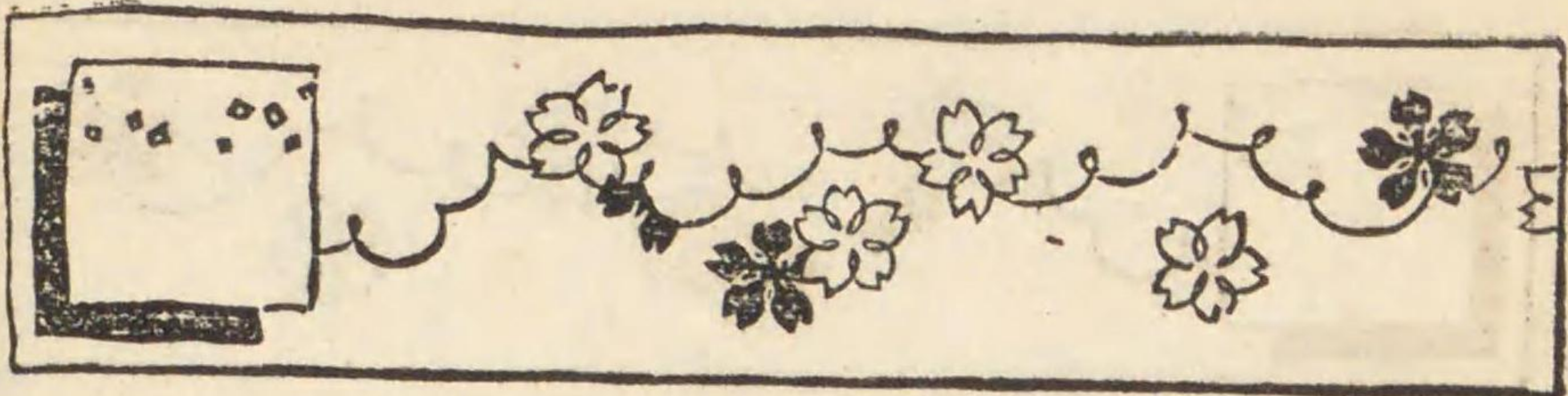
こ云つて拜殿に上りました。

「お前は東京に居た事があるんだつて？」

こ松之助は呆れたやうな顔して尋ねました。

「ありますとも、今でこそ乞食に成り下つて、人様の袖乞ひをして居ますが、これでも若い時は二等汽車で方





不思議な乞食

々を旅行して廻つたもんです。」

「ぢや元からの乞食ではないと見えるね。」

「御戯談でせう。元は呉服屋の若旦那様ですよ。」

「其れが何うして乞食になつたんだらう。」

松之助も梅彦も不思議に思ひました。

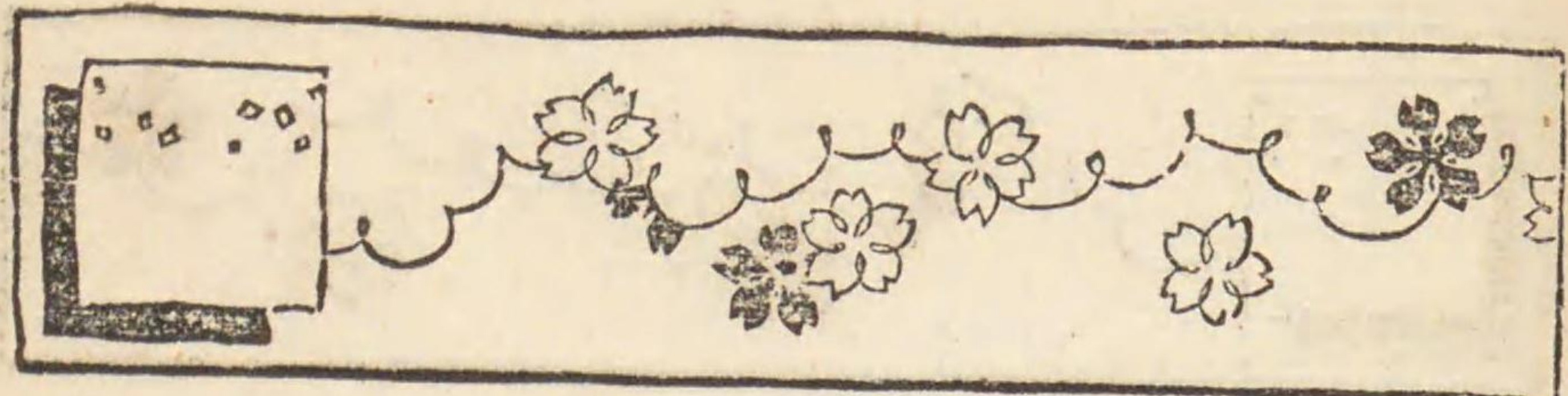
「親不孝を働いた罰で乞食になつて仕舞つたんです。」

「えゝ？ 親不孝をした罰で乞食になつたのかね。」

「其通りです。親の云ふ事を守つて居りましたら、決して

乞食なんぞにならなくつても可かつたんですが、親の

云ふ事に背いて、我儘勝手ばかり致しましたから、商



賣には失敗する。親類縁者からは見捨てられる。世間

の人は一人も相手にしては呉れず、詮方がなくなつて

今の有様です。」

乞食は悲しくなつたか、涙を流して、

「年を取らぬ間は親の煩惱と云ふものは分らないもので

す。私も子供の間は親の云ふ事を聞くのが厭で、叱ら

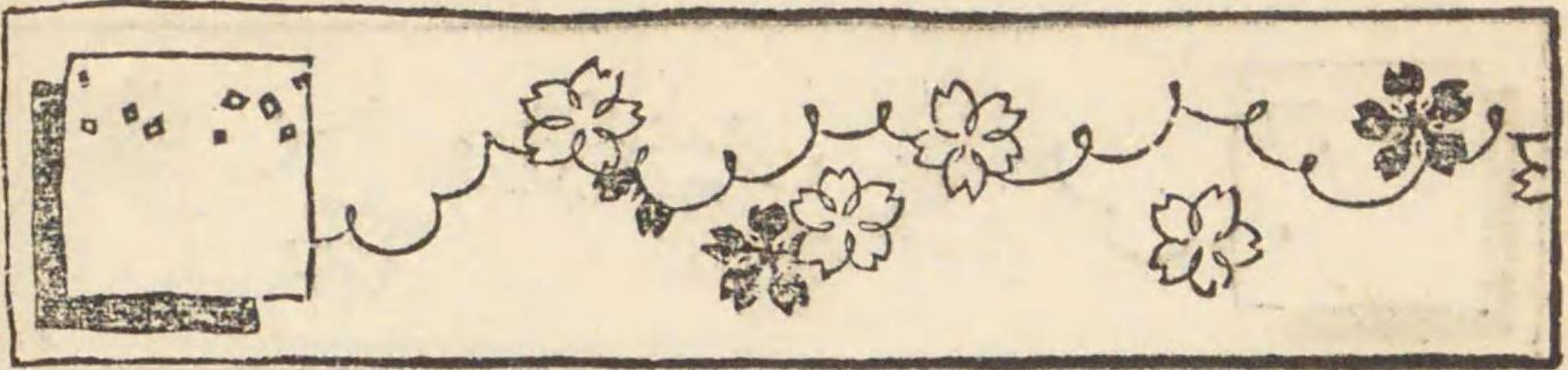
れたり打たれたりするに癪に障つて、無断で家を飛出

して他所へ逃げて行つた事もあり、三日も四日も御飯

も食はずに、親に心配を掛けた事もあり、其んな事が

度重なつて、兩親共其れを氣に病んで、廿年前に到頭

不思議な乞食



不思議な乞食

一一二

死んで仕舞ひました。私が失敗に失敗を重ね、人の信用もなくなつて自棄を起したのはいれからです。』

『お前も無断で家を逃出した事があるかね。』

松之助は梅彦と顔を見合せました。

『ありますよ。馬鹿な事をしたと今になつて後悔します

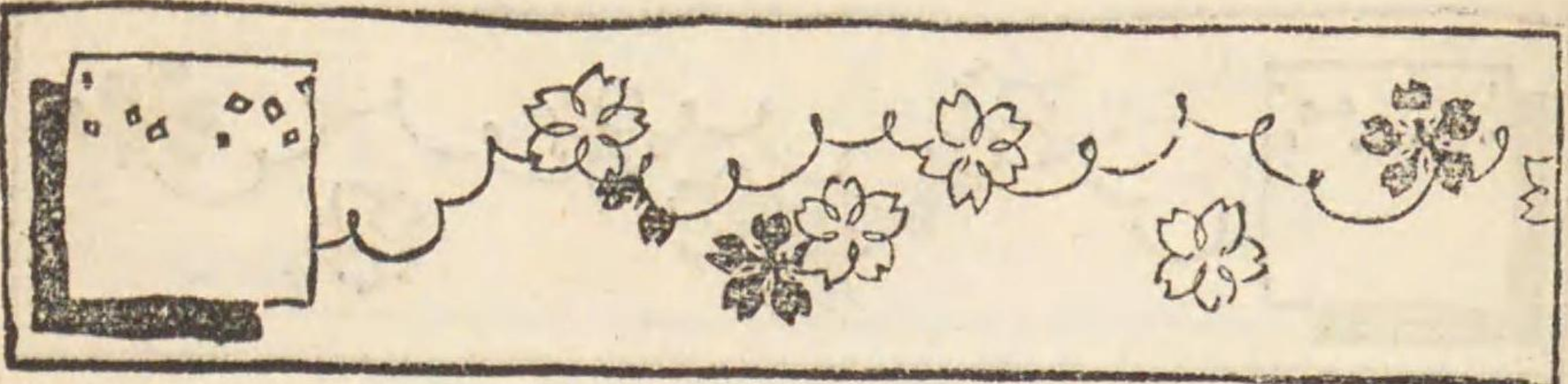
ね。』

『君何うだ。僕等も考へて見ねばならないよ。』

と窃つと松之助が梅彦に申しますと、

『本當だね。親に黙つて来たのは不孝に當るからね。』

と梅彦も窃つと斯う答へました、其れを聞いた乞食は、



『何だかお話の様子では、貴下方も御兩親に無断で家を飛出して居らつしやつたやうですが、其れは不可ません。親に心配を掛けた子が出世をする氣遣ひはないと云ひますよ。今の内に分別を替へて早くお歸りなさい。斯うして眼の前に生きて證據があるのを人事と思つてはなりません。』

と忠告しましたから、二人とも東京に行く事を思止つて、夜が明たら引返す事になりました。乞食は大層喜んで、『其れで申上げた甲斐がありました。これから決して其んな間違つた考へを起すものではありませんよ。』

不思議な乞食

一一三



と云つたかと思ふと、たつた今まで眼の前に居た筈の乞食の姿は消えて無くなつて、乞食の座つて居た跡には、八幡宮のお守札が一枚落ちて居りました。

『ちや今の乞食は八幡様であつたのだね。』

二人は大層驚いて起上り、

『難有う御座いました。』

『難有う御座いました。』

と神殿を伏拜み、夜明を待付け大急ぎで△△村に歸り、一部始終の話を致しますと、兩親を始め村の者も非常に喜び、一同打揃ひ八幡宮に參詣してお禮を申し上げます。

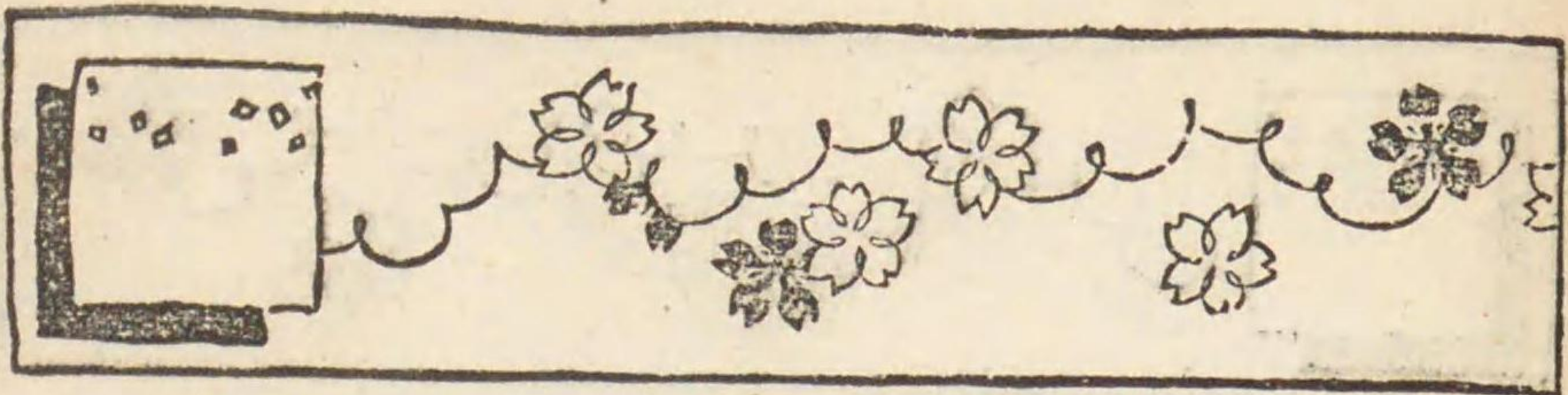
第十 忠義な金時計

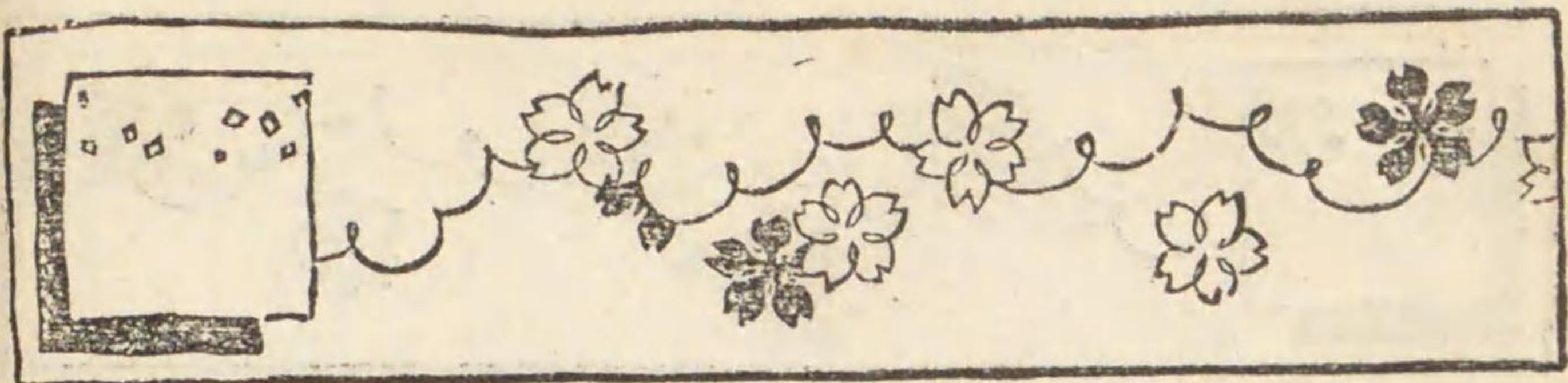
時はかるうつけは前まへにありながら

たゆみぢぢなり人のこゝろは

【**謹** 時間の移れば移るだけを、キチンと告げ知らせる時計は眼の前まへにありながら、何うして人の心こゝろはなまけがちであるか。と、時計の御題ごだいで濫りに時間を費やすことを、お訓いましめになつた御製ごよせいであります。

弓彦ゆみひこは東京とうきやうで有名な豪家かねもちの息子むすこだけあつて、お父様とうさまから小供持こどももちの小さい金時計きんどけいを買つて戴き、學校がくかうに行く時は洋服やうふくのポケットぽけっとに入れ、家うちに歸つてからは机つくえの上に飾つて





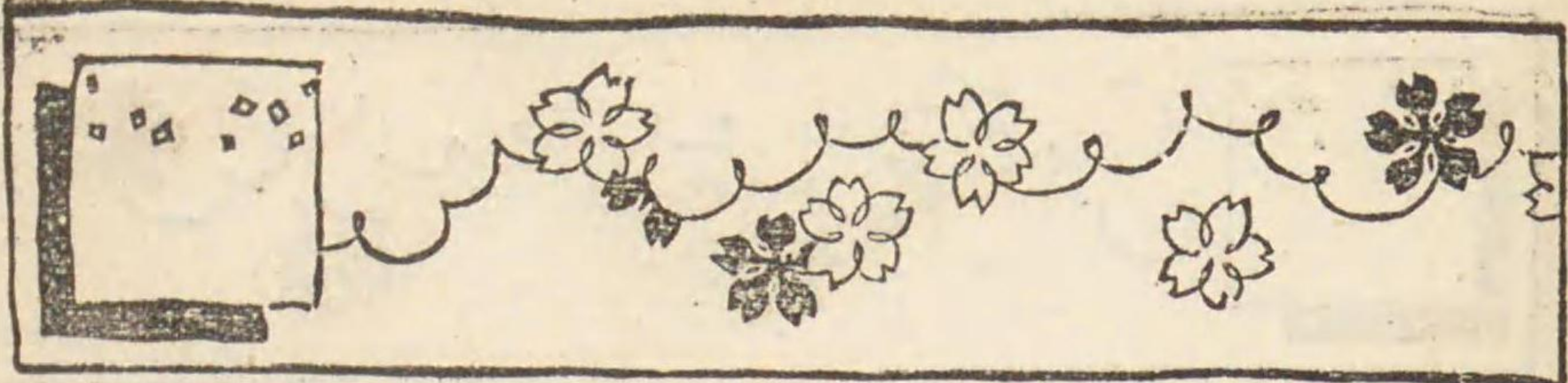
大事に大事にして居りました。そして、

「学校にも澤山生徒は居るが、斯んな立派な金時計を持つて居る者は僕ばかりだ。豪いね。」

と大威張で、適にお友達がニツケルの時計でも持つて居ると、

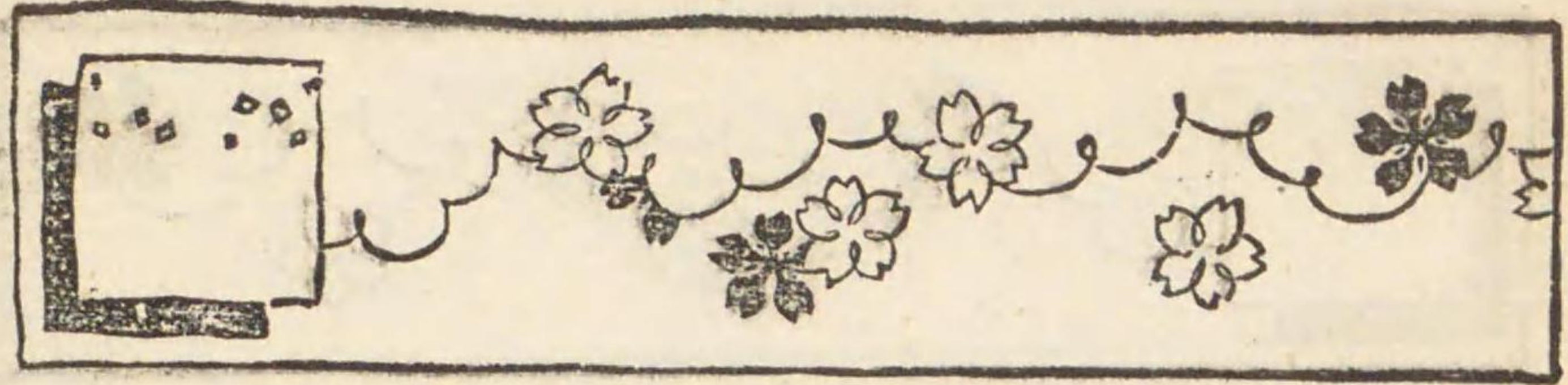
「何だ。君の時計はニツケルだね。其んな鉛のやうな粗末な時計は泥溝の中に捨てつ仕舞ひ給へ。まるで肺病人の顔のやうな色をしてるぢやないか。」
と云つて自分の金時計を出して見せ、

「時計は金時計でなくちや持つては歩けんね。何うだピ



カ〜光つて眼暈がするやうだらう。君のニツケル時計を二百買ふ金があつても、斯んな立派な金時計は買はれないよ。重さだつて大變な違ひだ。落ちぬやうに窃つと持つて見給へ。」

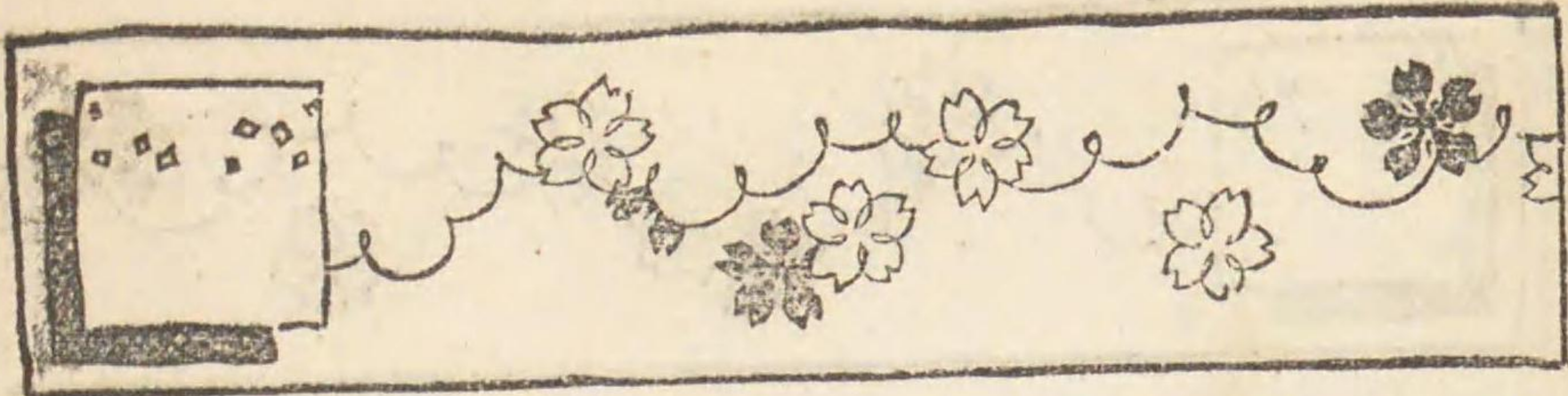
と持たせて見たり、蓋を明けて複雑な機械を覗かせて見たり、其れは〜大變なお得意でありました。併しニツケル時計を二百買ふ金があつても、買はれぬやうな價段の高い金時計を持つて居ても、弓彦は大の大的の懈怠者で、学校から歸つて來ても復習をやるではなし、例のピカピカの金時計を下げて、活動寫眞を觀に行つたり、筑前



琵琶を聞きに行つたり、其日々々を遊び暮して居ましたから、学校の成績も可い筈がなく、三度の試験に一度は屹度落第して、十四歳で漸つと尋常科の四年生になつたばかりでした。併し弓彦は金時計さへ持つて居れば、落第しても結構だご云ふやうな顔をして、相變らずのんべんだらりと遊んでばかり居りました。すると或る晩の事弓彦の寢て居る枕下で、

「坊様々々。」

と呼ぶ聲が致しましたから、弓彦は喫驚して眼を覺して枕下を見ますと、大事な金時計が両手を付いて畏まつて



居りました。金時計に手のある筈はないが不思議な事だと思ひながら、

「お前かね僕を起したのは？」

と弓彦が尋ねますと、

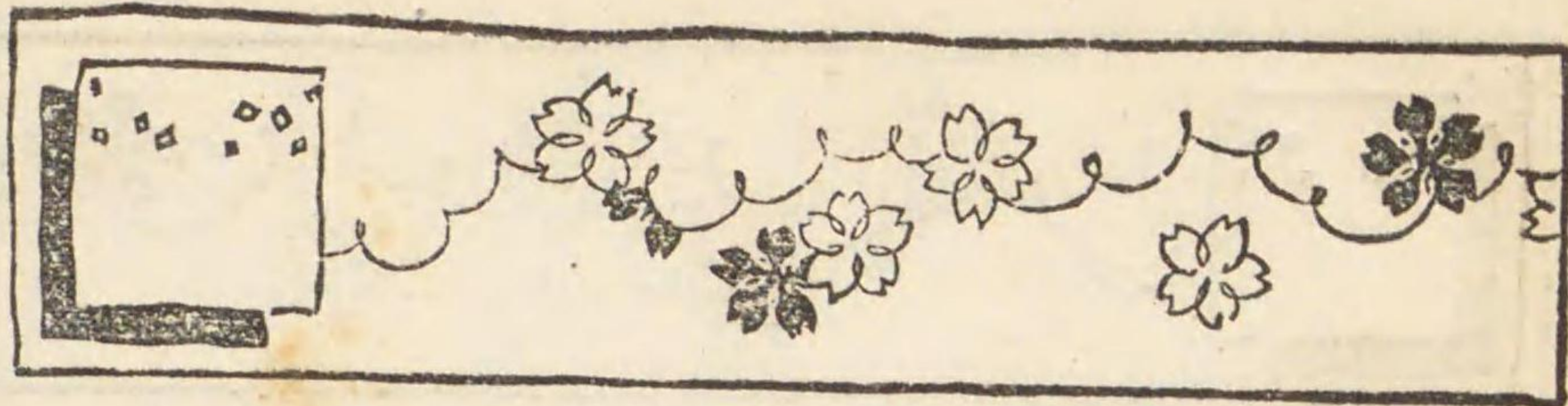
「はい私です。少し坊様にお願ひがありましてお起し申したのです。」

と金時計が答へました。

「お前は手があつたり、口があつたり奇妙な時計だね。

一體お願ひつて何のお願ひなんだ。」

「何うぞ坊様。私にお暇を下さい。私は此間からお願ひ



申上げようと思つて居りました。』

『何だ。お暇を呉れと云ふのか。不思議な事を云ふ時計だね。』

『いゝえ決して不思議な事を云ふのではありません。私は三年も坊様に御奉公を致して居りますけれども、ただ一度だつて時計の役目を勤めた事はありません。折角チツクタツク生きて居る甲斐はないと思ひます。其れで坊様からお暇を戴いて……』

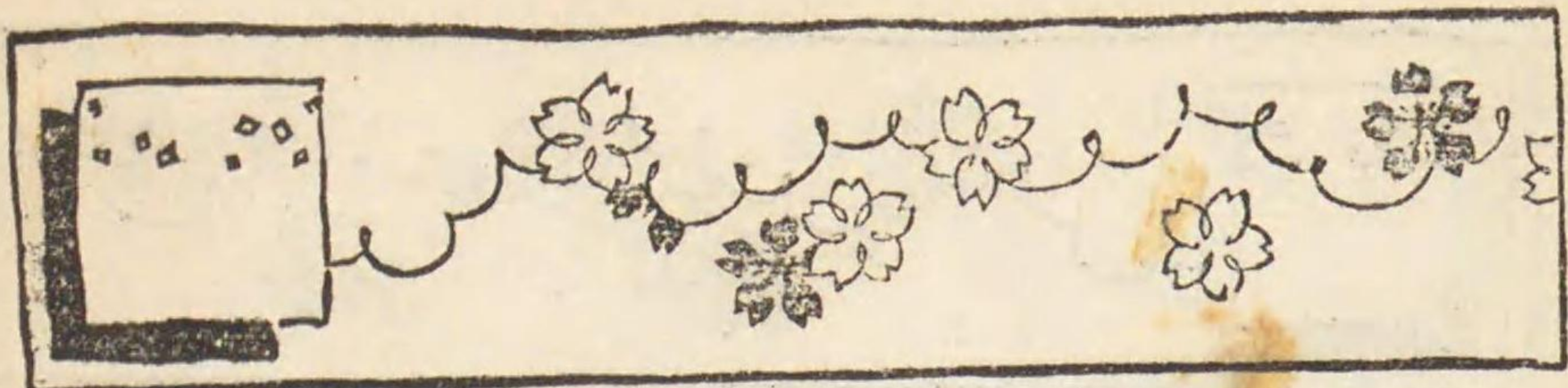
『何處に行く氣なんだね。お前は？』

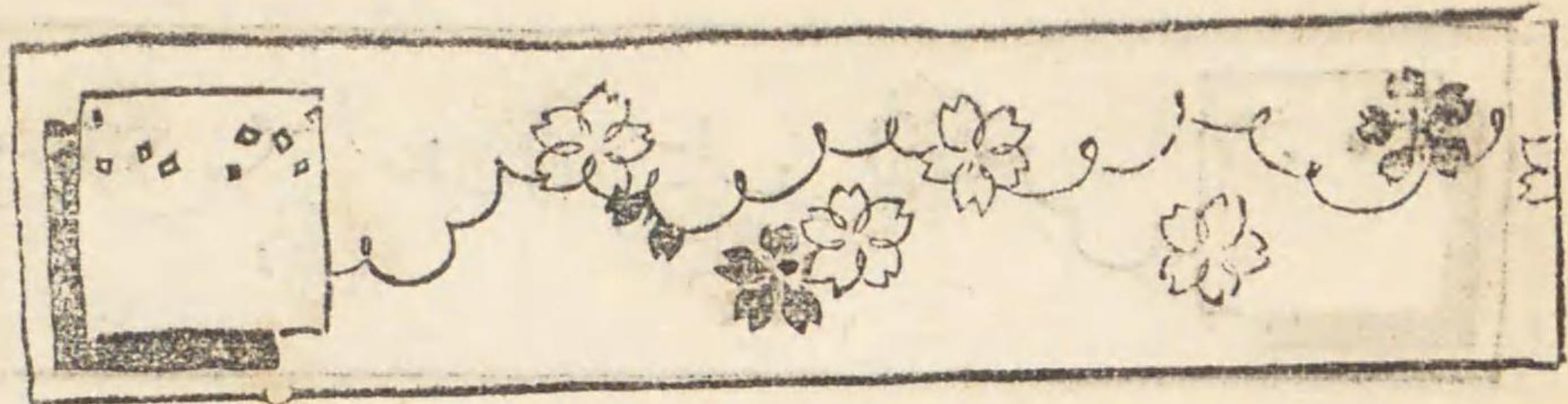
『時計を止めて地金になつて仕舞ひます。』

と金時計はめそくと泣き出しました。

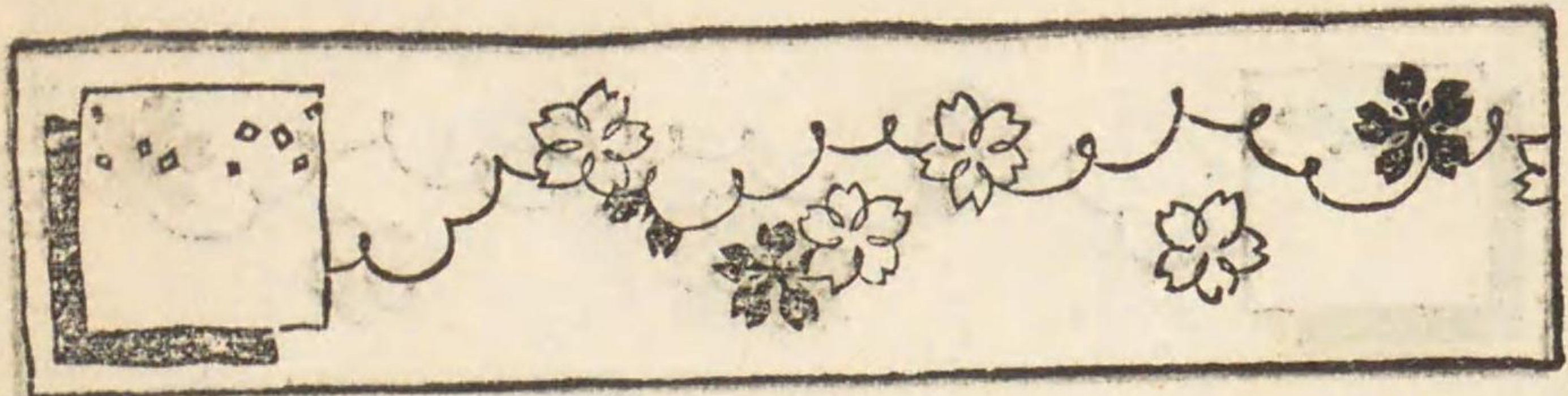
『けれどもお前はお父様から買つて戴いてから、一度も狂つた事もないんだから、立派に時計の役目を勤めて居るんじゃないかね。生きてる甲斐がないなんて其んな馬鹿な事を云ふもんじゃないよ。』

『其れは一度だつて狂つた事なんかありません。併し狂はないばかりが時計の役目ではないんです。殊に私が坊様に御奉公申上げましたのは、チツクタツクと時間の過去る事をお教へ申して、坊様が一分間でも濫りに時間をお費やしなさらず、一生懸命に御勉強をなさる



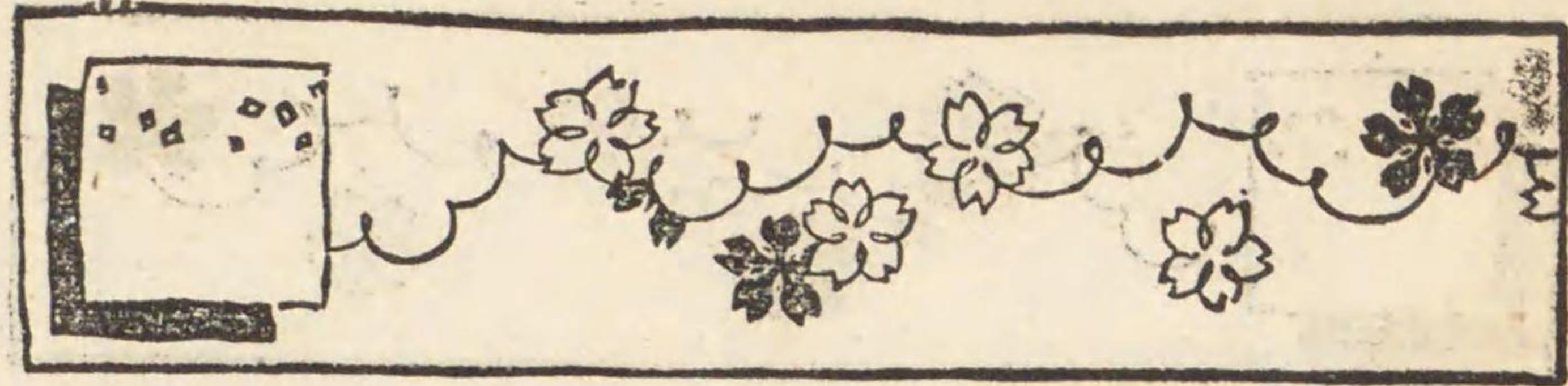


爲であつたんでしたけれども、坊様は私の綺麗な事
 や、私の色艶の美しい事はかりお友達に自慢してしん
 みり一度だつて御勉強をなさつた事はないぢやありませんか。
 私は筑前琵琶や活動寫眞のお供をして、あんな
 けらんかと懈怠けて居るやうな時計ではないんです。
 何うぞお暇を遣つて下さい。』
 頻りに金時計は坊様に向つてお願いを申しました。弓彦
 は金時計の云ふ事が一々尤もですから、叱り飛ばす譯に
 は行かず、さうかと云つて暇を遣つて仕舞ふと、明日か
 ら金時計は無くなるし、



『ぢや何うすれば僕の處に居られると云ふんだい。』
 と申しますと、

『坊様が勉強さへして下さると、私はお暇を願つて地金
 になるには及ばないんです。坊様だつて勉強なさるの
 は身の爲でせう。ちよいと落第をして耻しいとはお
 思ひなさらないんですか。此間先生は何と仰しやいま
 した。(時はかるうつはは前にありながら、たゆみがち
 なり人のこゝろは)。と天皇陛下の御製のお話を先生が
 なすつたのを坊様は聞いては居なかつたのですか。時
 はかるうつはと云ふのは時計の事ぢやありませんか。』

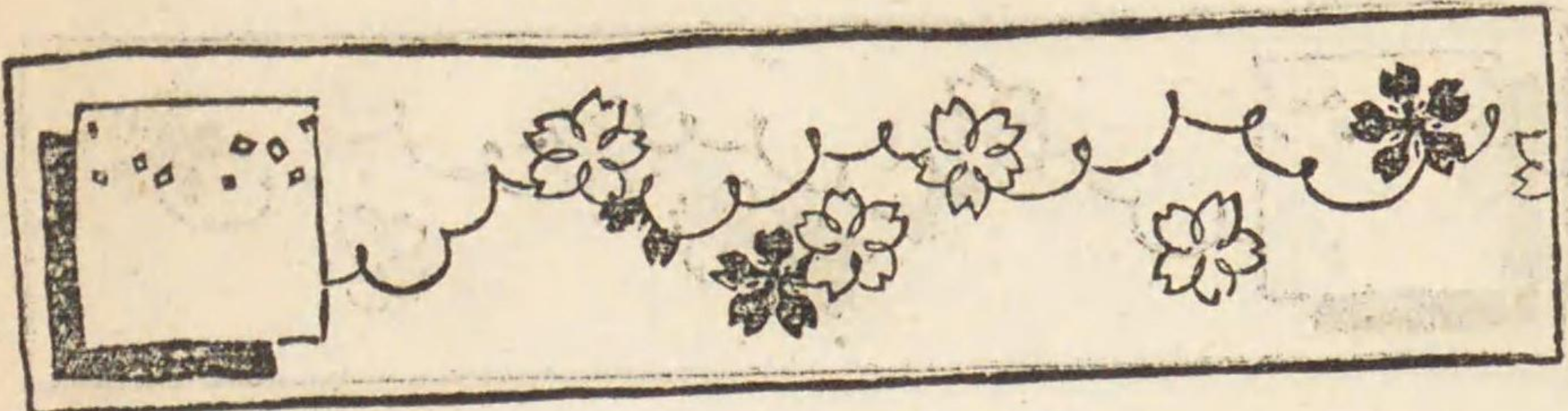


時計も時計立派な金時計まで持つてる癖に、年から年中遊んでばかり居て、其れで大家の坊様と云はれますか。

「ぢや明日から勉強さへすれば、地金にならなくつても可いんだね。」

「其れは可いんです。私も折角時計に生れて来たんですから、好き好んで地金になりたかありません。」

「其れぢや屹度明日から勉強をするよ。遊んで居ては天皇陛下に不忠にもなり、又お前にも濟まないから。」
「其通りです。其れでは地金になる事は止ませう。併



し又坊様がお懈怠けなさると、今度は黙つて地金になつて仕舞ひますよ。」

「大丈夫だ。決して最う懈怠けぬから安心をなさい。」
と弓彦は固く金時計に約束して、其れから決して懈怠けず一生懸命に勉強しましたから、落第は愚か何時も優等で及第するやうになりました。

第十一 鬼神の後悔

おにがみも泣かするものは世の中の人のこゝろのまことなりけり

【謹解】荒々しい鬼神のやうなものをも、泣かするものは人の心の誠である。と、人の真心の尊い事をお示しになつた御製であります。

昔、天智天皇の御代に、藤原千方と云ふ者が謀反を致しました。朝廷では捨て置き難しと、多くの兵隊をお遣はしになつてお攻めになりますと、千方と云ふ者は何うして知つて居たものか、鬼神を仕ふ事を知つて居て、



『其れ官軍が押寄せて來た。早く行つて非道い眼に逢はせて來い。』

と手下の鬼神に命令を下しますと、鬼神の大將は子分の鬼神を引連れ、官軍の陣を構へて居る上に行つて、一時に千も萬もの雷を落したものですから、官軍の兵隊は一人も残らず、雷に打たれて死んで仕舞ひました。朝廷では大層お驚きになつて、又一隊の征討軍をお向けになりましたが、

『又來たやうだ。急いで行つて鑿殺しにして來い。』と千方が申付けますと、鬼神は勇立つて飛んで行き、官



軍が今川を渡らうとするのを見計ひ、洪水を起しましたから、官軍は一人も残らず溺死を遂げました。朝廷では二度が二度までも大敗北をした事は、朝廷の威信にも關する大事件だから、何うあつても賊軍を打滅ぼさねばならないと、此度は今までの征討軍より何倍も何十倍もの大軍をお遣はしになつて、千方の軍勢を遠巻きにしてお攻めになりましたが、流石の賊軍も静まり返つて音も立てないものですから、打手の大將は、

『最う千方も切腹をしたに違ひない。早く千方の首を取つて來い。』

と命令しますと、一隊の若武者が馬に鞭打つて、敵の陣所に行つて見ますと、今が今まで遠巻きにして居たと思つた千方の軍勢は、一人も居ないで方々に藁人形が立て、あるばかりでした。其れを見た一隊の若武者は大層驚いて駈戻り、

『敵は一人も居りません。残つて居るものは藁人形ばかりです。』

と報告しますと、打手の大將は眼を圓くして、

『何だ一人も居ない。何うも不思議な事だ。たつた今まで遠巻きにして居たのは、彼れは藁人形であつたのか。』



と倒れんばかりに驚いて、

「其れでは進め。敵を発見するまでは何處までも進め。」

と勇ましく一同駆足で進みますと、一方では賊軍の大將

たる千方が鬼神を呼んで、

「一杯食はして遣つたから、一生懸命になつて駆けて來

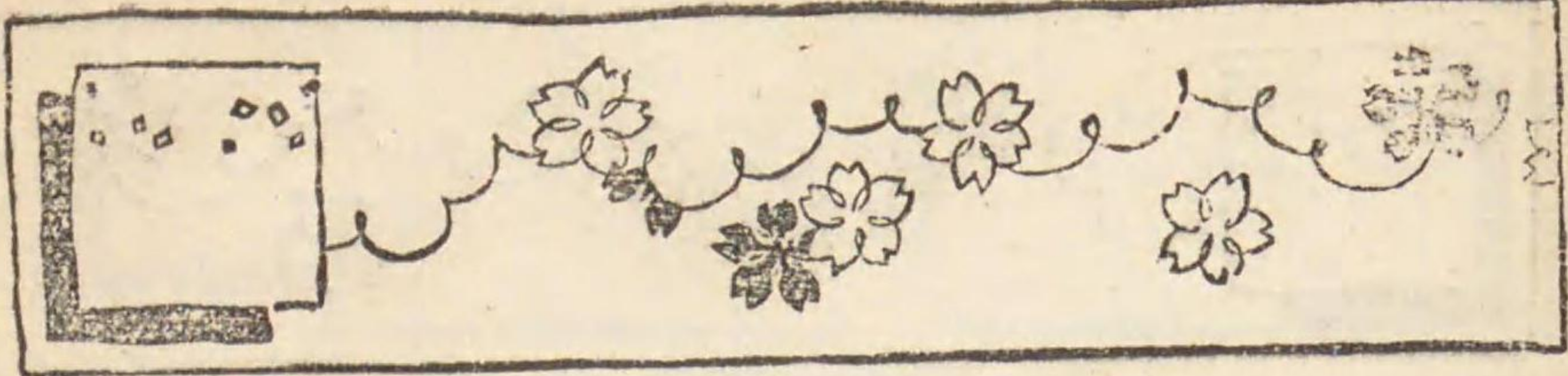
る様子だ。一人も残らず穴の中に埋めて仕舞へ。」

と申しますと、

「畏まりました。」

と鬼神は官軍の進んで行く方に大きな穴を掘つて、進ん

で來る官軍を其の穴の中に入れて埋めて仕舞ひました。



朝廷では又々大失敗を招いたので、非常に御心配をなさ

れ、

「鬼神を仕つて官軍を鑿殺にすると云ふのは、實に不都

合千萬だ。誰れか賊軍を一打に打滅ぼす大將は居ない

か。斯う度々軍に負けては全く朝廷の名折れた。」

と打手の大將を彼れか是れかとお撰びになり、到頭紀友

雄と云ふ大將を征討大將軍に任せられますと、友雄は委

細畏まつて、征討軍を率ゐ、都を發して賊軍の本陣近く

進みましたが、敵は數多の鬼神を仕つて居る事を知つて

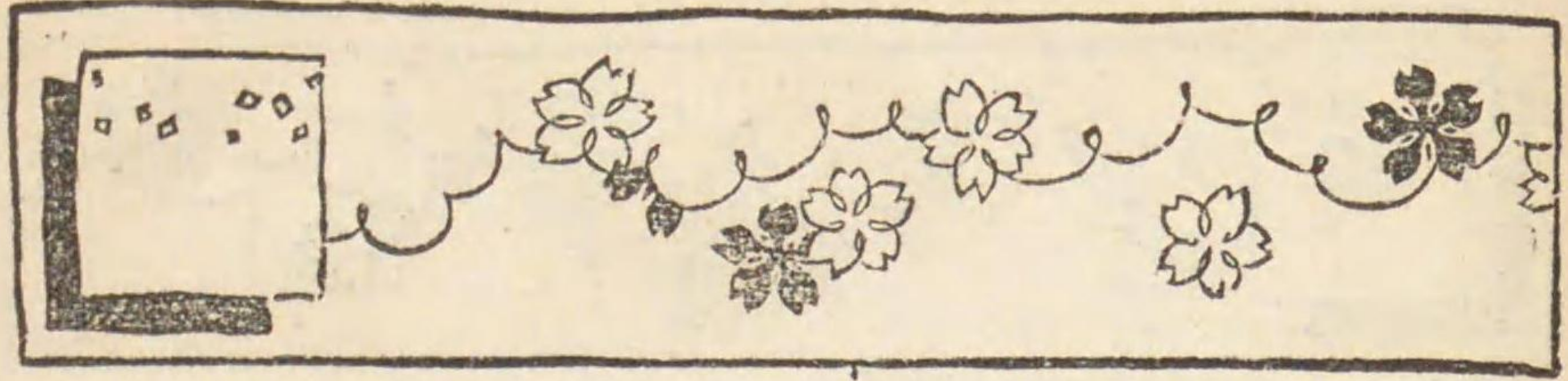
居りますから、無暗に進んで又穴の中に埋められたり、

洪水に流されたりするやうでは取返しが付かぬと考へ、一首の和歌を詠んで、矢文にして、敵の陣所に射込みました。賊將千方は手下の鬼神を呼んで、

「又来たぞ。今までの大將とは違つて、紀友雄と云ふ豪傑が来たぞ。早く行つて火の雨を降らして遣れ。」

と申付けましたから、鬼神の大將は火の雨の用意をして官軍に向はうと思ひ、子分の鬼神を集めて居る處に、友雄が射込んだ矢文が落ちましたから、

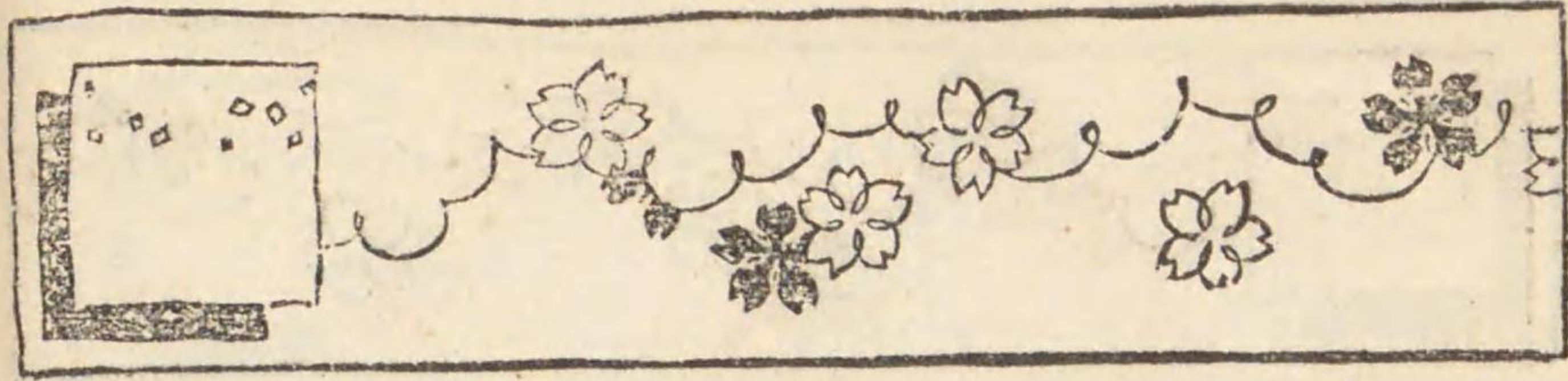
「何だ矢文を射やがつた。何んな矢文だらう。一つ讀んで見よう。」



と矢文を開いて讀んで見ますと、矢文には、(草も木も我が大君の國なれば、いづくか鬼の栖みかなるべき)。と云ふ和歌が書いてありました。鬼神の大將は熟くくと矢文を眺め、書いてある和歌を口の中で繰返へして居りましたが、

「これは悪かつた。日本の國は神國と云つて、外の國とは國柄が違ふのだ。其れに賊軍に加勢をして、今まで天子様の御軍勢を鑿殺にしたのは、何うも相濟まぬ事をした。早く逃げねば大變な事になるぞ。」

と鬼の眼にも涙を流して後悔して、火の雨を降らせる事



鬼神の後悔

一三四

なご其方退けに、子分の鬼神を引連れ雲を霞と逃去りま
したから、流石の千方も鬼神に逃げられては手の出しや
うもなく、官軍に降参しましたので、即座に首を打落し
て芽出度く凱旋を致しました。(鬼神も泣かするものは世
の中の、人の心のまことなりけり)。と天皇陛下のお詠み
になつた御製は、紀友雄が眞心を籠めた一首の和歌で、
鬼神を走らせたやうな事を思召めして、お詠になつたも
のと思ひます。

第十二 家畜の懺悔話

天をうらみ人をとがむることもあらじ

わがあやまらをおもひかへさば

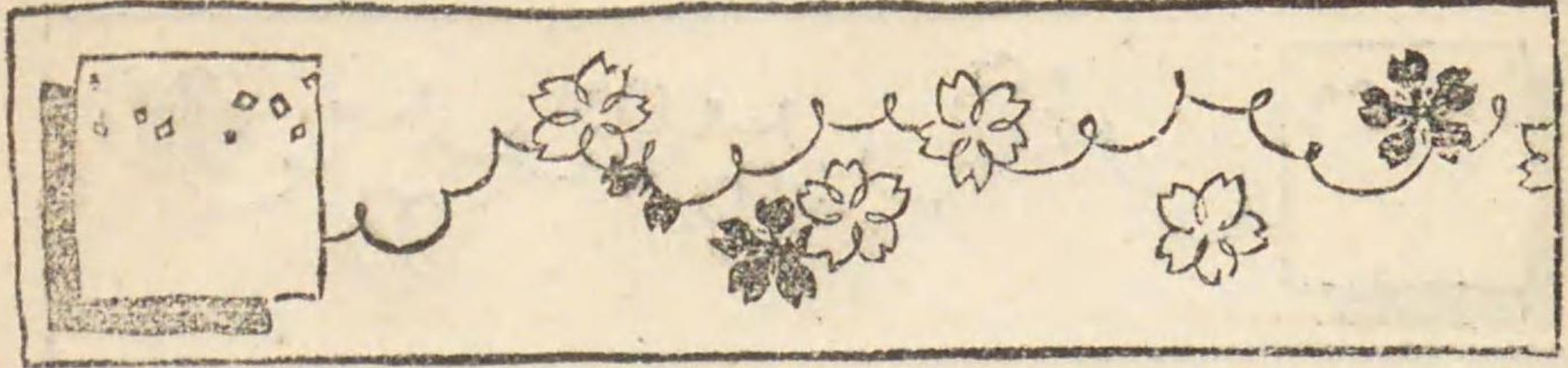
【謹解】たとへ今不幸な境遇に陥つて居やうとも、自分の身を省みて、
自分が犯した過を思ひ近したなら、決して天を恨み人を尤むる事
はあるまい。と、自省の徳を詠ませられた御製であります。

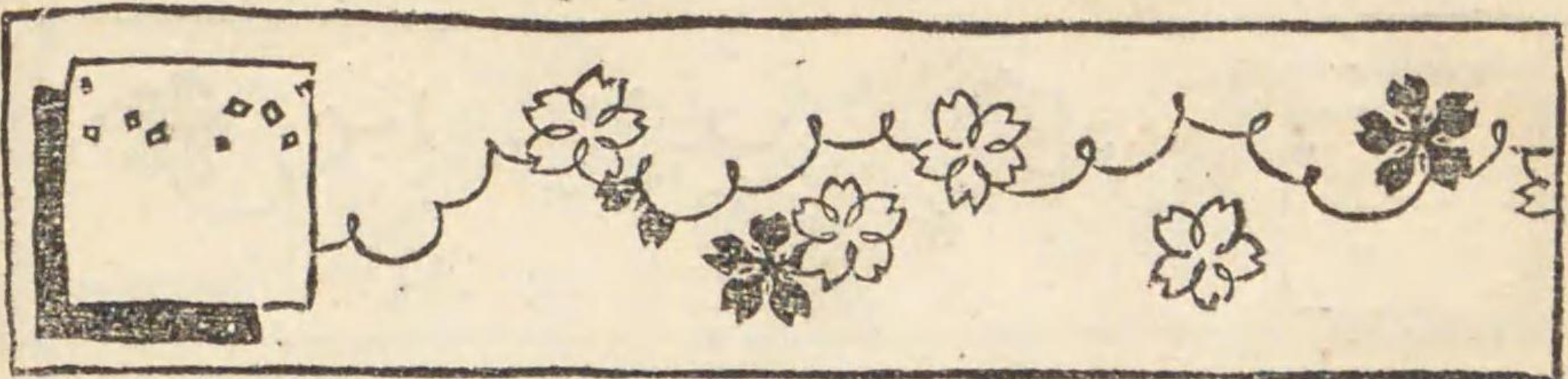
或る處で馬、牛、豚、犬が一疋宛集まつて、互
ひに身の上話を致しました。馬が申しますには、

『君達も皆な元は人間だつたのかね。』

家畜の懺悔話

一三五





「元は人間だつたのだ。君も矢張元は人間だつたご云ふぢやないか。」

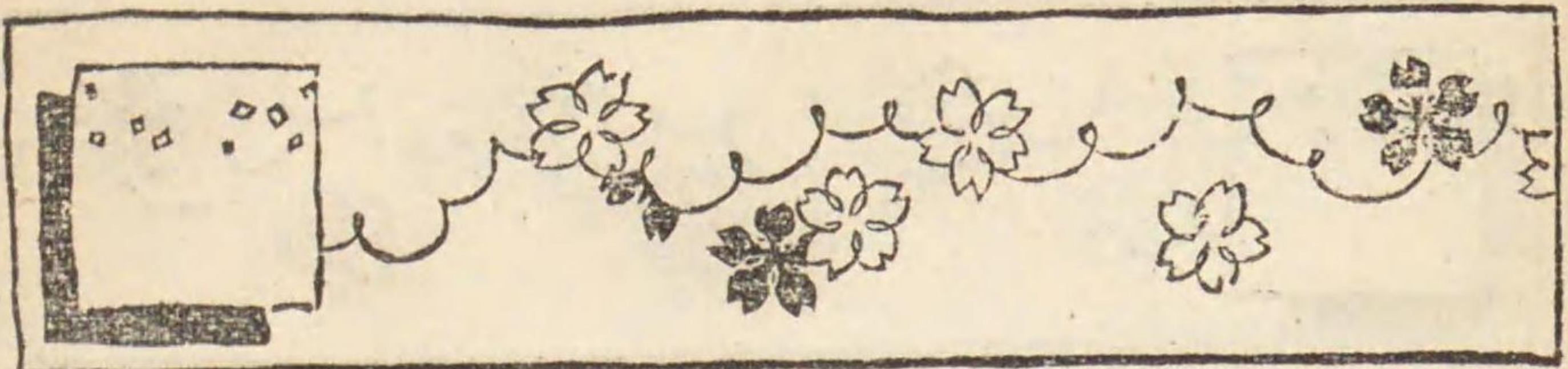
「牛が答へました。」

「お互様だ。そして人間から四足になつたものが、能くも斯うして揃つたものだね。」

「全く馬さんが仰しやる通りです。矢張縁があればこそでせうね。」

「犬が申しますよ、」

「まあ今では臭いものばかり食へて居りますけれど、元を正せば堂々たる人間だつたのですから元は人間同



士仲善くして暮しませう。」

「豚は鼻の先をピコ／＼動かしながら申しました。」

「其れは其通りだ。だが元は堂々たる人間でありながら何うした事で馬や、牛や、豚や、犬になつたのか。一つの懺悔話をして見ようぢやないか。」

「馬が寝轉びながら發起をしますよ、牛も、豚も、犬も寝轉び、」

「其れは面白い。先づ馬さんのお話から聞きたいものですね。」

「宜敷い。私から始めよう。」

ご馬は寝轉んだまゝ、

『私は人間の時には角力取だつた。常陸山以上に強い角力取だつた。けれども一度だつて角力に勝つた事はなかつた。強かつたけれども、稽古をした事がなかつたから、何時も負けてばかり居たのさ。だから見物人からは揶揄される。親方からは叱言を云はれる。朋輩からは馬鹿にされる。癩に障つて角力取を止した。そして私は土方になつちやつた。金山に金堀りに行つた事もある。石山に石を擔ぎに行つた事もある。角力にや負けても並の人よりは力が強かつたから金も大分儲かつたよ。するご土方同士で或時大喧嘩を始めたのだ。私は力の強いのに任せて、大分相手を殴付けた。中には死んだ奴も五六人はあつた。巡査に捕つちや大變だから喧嘩の場から逃出したは逃出したが、角力の外には藝はなし、泥棒でもせねば第一食ふにも困るものだから、三尺ばかりの刀を閃かして、或る豪家の所に強盗に押入つたところが、其處の主人中々強い奴だ。うつかりするご捕りさうだつたから、例の刀で首をちよつ斬つて逃げた。けれども到底巡査に捕つて強盗殺人罪で死刑の宣告を受けた時はさめぐと泣いたね。其れ

から閻魔様から、お前は娑婆で力業をして居たから馬になれ。前世の罪亡ぼしに馬になつて稼げと云はれて御覽の通りの馬になつたのさ。角力の稽古に身を入れて居れば今頃は天下の横綱だ。馬鹿な事をした物だね。』

ご恨めしさうにヒ、ンと泣きました。

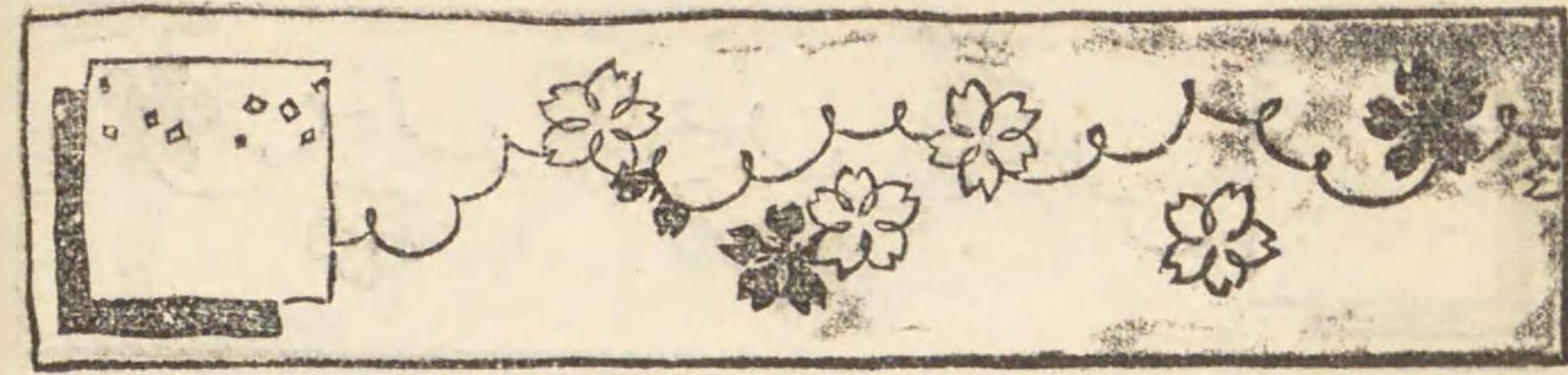
『其れはお氣毒様だね。けれども私だつて馬鹿な事をしたばかりに斯う云ふ牛になつたのだ。何れ一つ牛になつた話をしよう。』

ご牛は尻尾で蠅を追ひながら、

『私は元牛乳配達だつた。牛乳配達をしながら勉強をし



て末は大臣にでもならうと思つて居たところが、勉強どころか毎日酒を飲んだり、煙草を吸ふたりして遊び暮し、到頭牧場の乳牛を盗出して賣飛ばしたんだ。そして毎日其金で好き放題な真似をして居た。するご間もなく其の金もなくなつたものだから、友達ご手を組んで拘摸を始めたんだ。素人の拘摸だから苦もなく捕まつたが監獄に入れられるのは真平だから巡査の油断を見計らつて逃げた。逃げた拍子に電車の線路に轉込こんで、頭を滅茶々に轢かれたもんだからお陀佛だ。人間の時牛乳配達をして居たからお前は牛になつたが



宜からう。ご閻魔様の命令で牛になつたやうな譯だ。馬鹿々々しい昨日も須田町の角を曳かれて行く時、昔の友達が髭を生やして護謨輪の人力車に乗つて行くのに出逢つた。羨ましくつて涙が出たよ。』

ご溜息を吐きました。するご豚が口を開いて、

『馬さんも牛さんも泥棒の成れの果です。併し私は其んな人間ではなかつた。全く堂々たる人間なりました。ご申しますご、

『何んな商賣をして居たんだ。』

ご血が尋ねました。



『私は銀行の預金部員でした。』

『成程其れは一人前だ。何れ預金でも誤麻化して豚になつたのだらう。』

『怪しからん。決して私は馬さんや牛さんのやな盗心は無かつたから、其んな不埒な事は致しません。其代り嘘を云ふ事が大變好きで、日に三度宛嘘を云はなくては直ぐ病氣になつて仕舞ふのです。日に三度が積れば月に九十度、年に千八十度、嘘の千度も付くご適には大變な嘘を付き當てるものですよ。』

『威張つちや困るね。』

「ご牛が笑つて申しました。」

「何も威張る譯ぢやありませんが、或る時一生一代の大嘘を付いたんです。」

「何んな大嘘を付いたかね。」

「私が勤めて居る銀行は近々破産する筈だと吹聴して廻つたんです。」

「馬鹿な事を吹聴して廻つたものだね。」

「だから預金して居るものが一日に一萬人宛も寄掛けました。其れは大變な賑ひで。」

「お前も忙しかつたらう。」

「ちやんご忙しい事を見抜いて居りますから、病氣届を出して休みました。」

「横着な男だね。」

「ご牛も馬も驚きました。」

「するご私が吹聴して廻つた事が分つて免職されましたよ。人を馬鹿にしてるぢやありませんか。」

「お前の方が餘程馬鹿にしてるぢやないか。其れから何うした。」

「其れから區役所に奉職しましたが、法螺書記だと言はれて追出されました。去年ペストに罹つて死んだ時な

「ご、世間では大層喜んださうです。」

「其れは喜んだらう。だがお前はベストに罹つて死んだのか。やれ〜。」

「ベストに罹つて死んだのだから、鼠になさうご云ふ説もあつたさうですが、閻魔様が其れは危険だから豚になれご仰しやつて、止むを得ず豚になりました。」

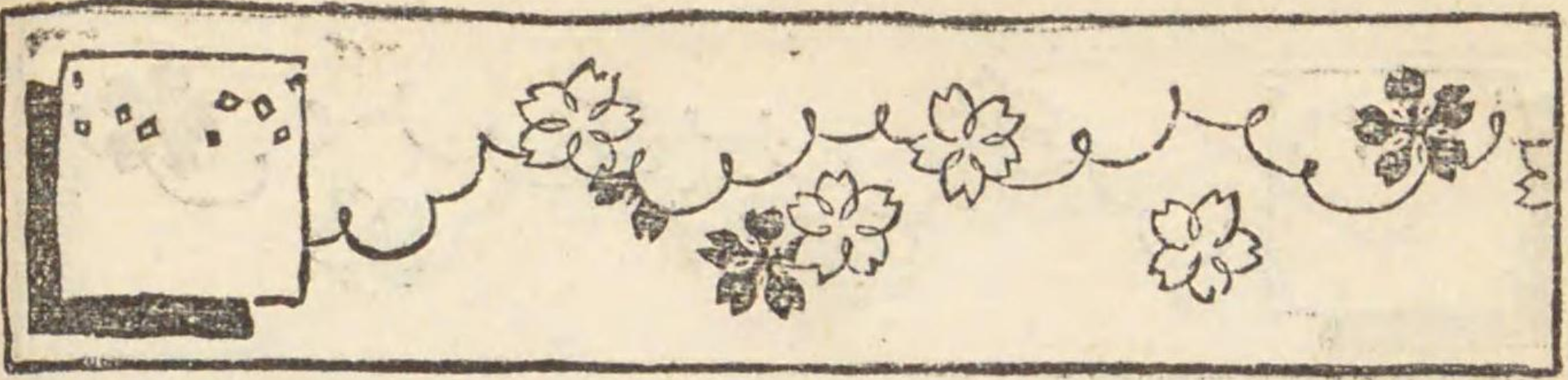
「豚は耻かしさうに首を垂れました。するご犬が申しますには、

「私は人間の時は湯屋の三助でした。人間の軀を綺麗に洗つて遣る役目を勤めて居たんですから、例へ病氣に

罹つて死んでも、犬になさうなくとも可いでせうと閻魔様に申しましたら、お前は何時も可い加減に洗つて居た。お前の居た湯屋は皆な評判が悪くて、中には破産した湯屋もあつた。一生の間に百五十軒の湯屋に三助をして居て、一軒もお前の爲に評判の良くなつた湯屋はない。詰り職務に不忠實であつたからだ。だから犬になるのは難有く心得ろ。ご大きな眼玉で瞰まれました。」

と頭を掻きました。併し馬も、牛も、豚も、犬も皆な人間の時其れ〜大きな過を致して居るものですから、死

んで閻魔様からお叱りを受けて、犬や、豚などにされても天を恨む譯にも行かず、人を尤むる譯にも行かず、人間の時の不心得を後悔しながら、止むを得ず自分々々の職務を怠らず勤めました。



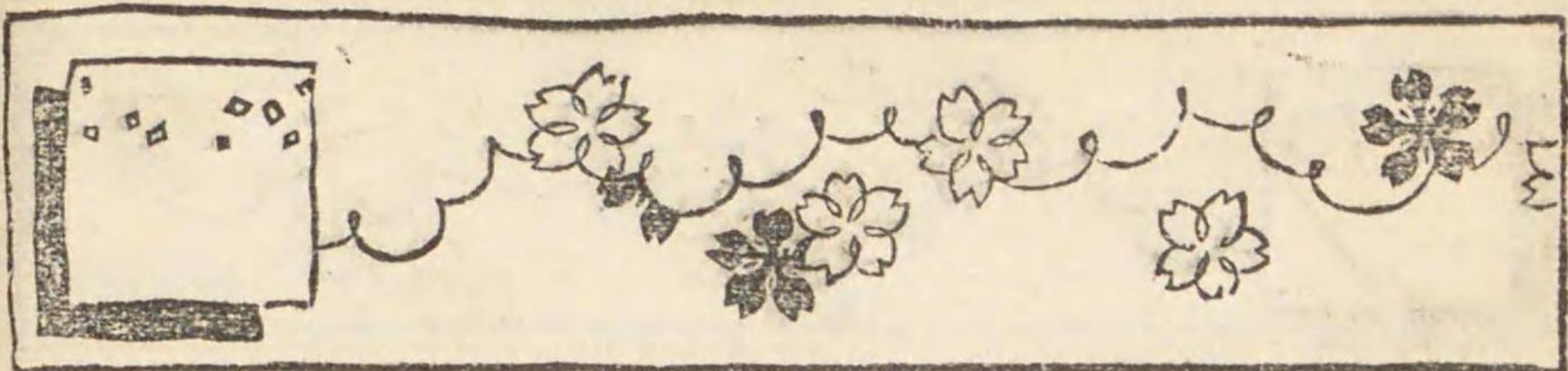
第十三 水と鐵の口論

くろがれの舟もたやすく動かして
つよきは水のちからなりけり

【謹註】重くて大きい鋼鐵艦でも難なく動かして居る、水と云ふものは力の強いものである。と、水の御題で詠ませられた御製であります。

水と鐵とが出逢つて、自慢話に花が咲きました。
「君が何と云つても、君よりか僕の方が豪い。第一世の中に水が無かつたら人間は何を飲んで生きてると思ふ





かね。牛乳を飲んだら生きて居られるつて？馬鹿を云ふもんぢやない。牛乳だつて水から出來てるんだ。牛が水を飲まなかつたら、牛乳は出來ないよ。ぢやサイダーを飲め？サイダーだつて水がなくては出來ないんだ。まあ假りに牛乳かサイダーを飲んで人間が生きて居るにしてもだ。さあ火事と云ふ時ポンプの口から出て火事を消すものは何だ。其れは水だらう。水がなくて火事は燃え放題だ。何うだ降參したかね。』

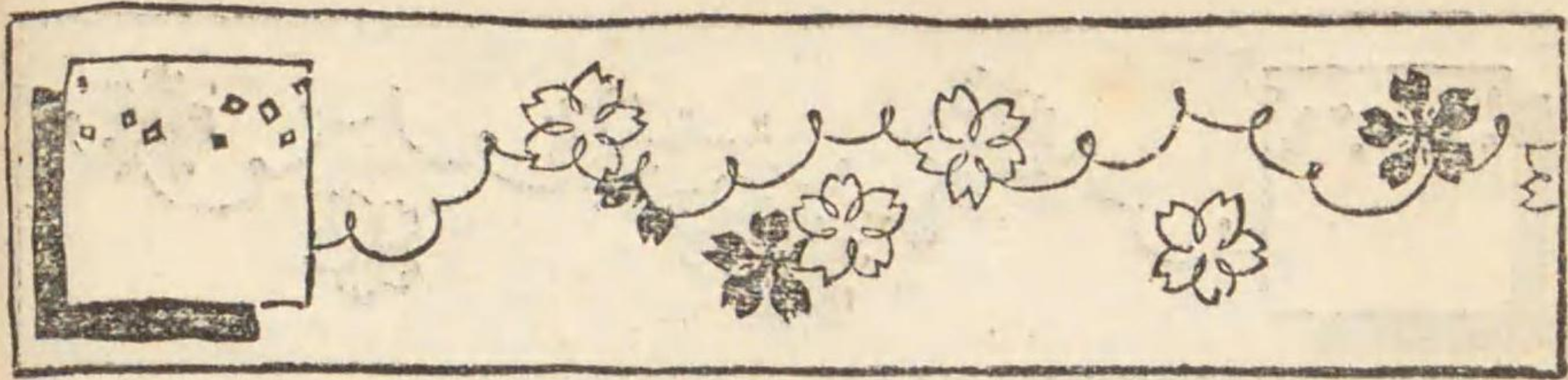
「成程君は豪い。豪い事には僕だつて不服は云はないけれども僕よりも豪いご云ふ事に就いては少し申分があるよ。』

鐵は膝を進めて、

「君は僕の豪い事をまだ十分知つて居ないご見えるね。第一銃砲は何で拵へる。鍋釜は何で拵へる。鐵道のレールは何で拵へる。小刀は何で拵へる。鋏は何で拵へる。銃瓶は何で拵へる。皆な僕即ち鐵で拵へるんだよ。君は知つて居たかね？」

ご威張り始めました。『其れは僕だつて知つてる。其れが何うしたかね。』



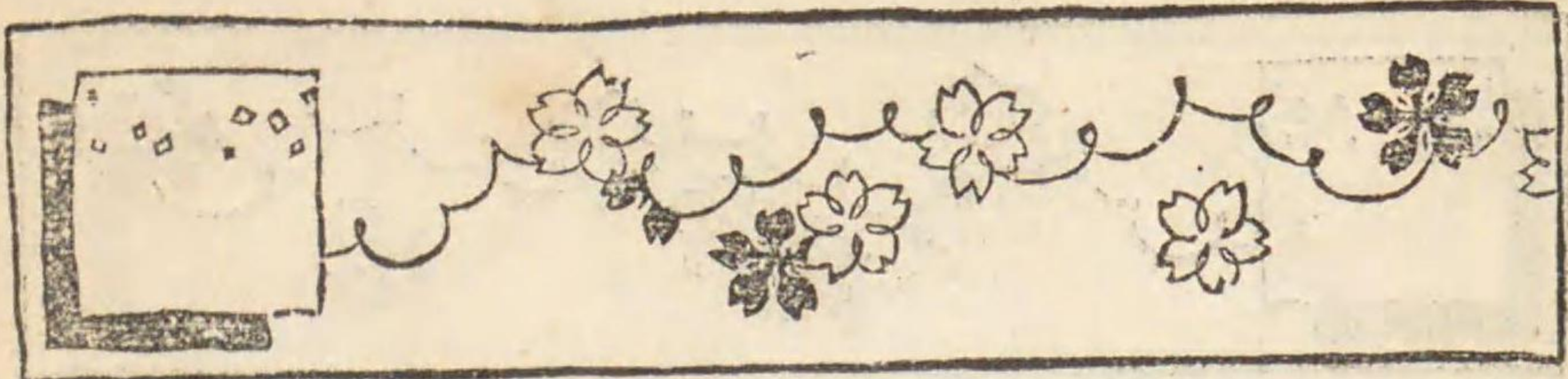


水は格別驚いた様子でもありません。

「だから豪いんだ。君よりも僕の方が豪いんだ。第一鐵砲がなくて戦争が出来るかね。鍋釜がなくて飯汁が炊けるかね。鐵道のレールがなくて汽車が走れるかね。小刀がなくて鉛筆が磨けるかね。鋏がなくて物を鋏切る事が出来るかね。鐵瓶がなくて湯が沸かせるかね。何うだ。水がくく大變お威張り召されるが、僕に比べるご意氣地があるまい。降參するのは君の方だよ。

恐入つたかね。』

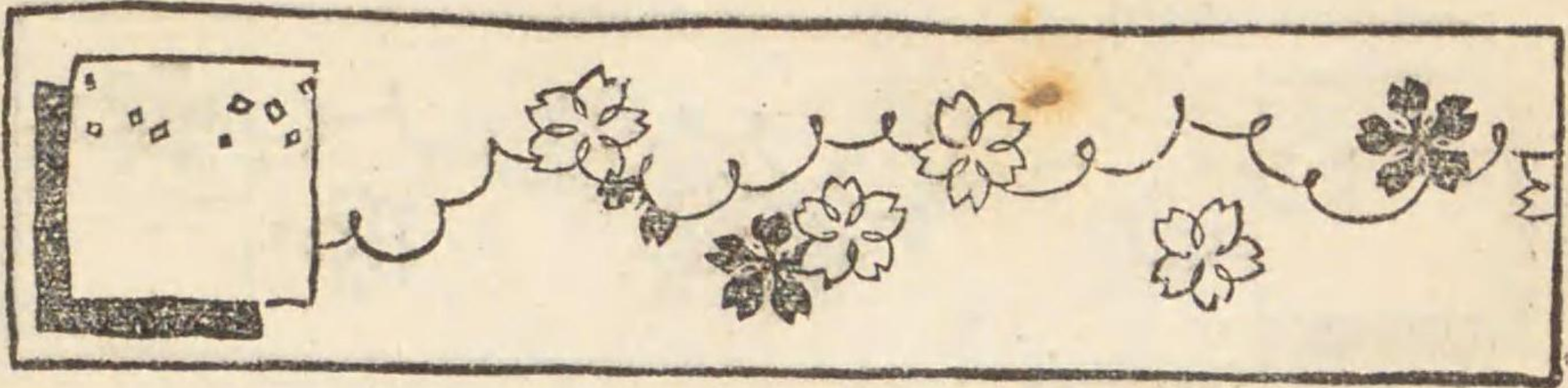
鐵は色の黒い顔を突出して斯う申しました。



「あは、恐入つたかもないもんだ。君は一體物騒だ。君のやうな鐵砲や刀なんかになるものがあるから、世界に戦争が絶えないんだ。世界の平和を亂すのは君のお蔭だよ。鐵を廢業して金か銀にでもなり給へ。顔の色からして眞黒なのは見つごもないぜ。まるで炭團のやうな奴だ。』

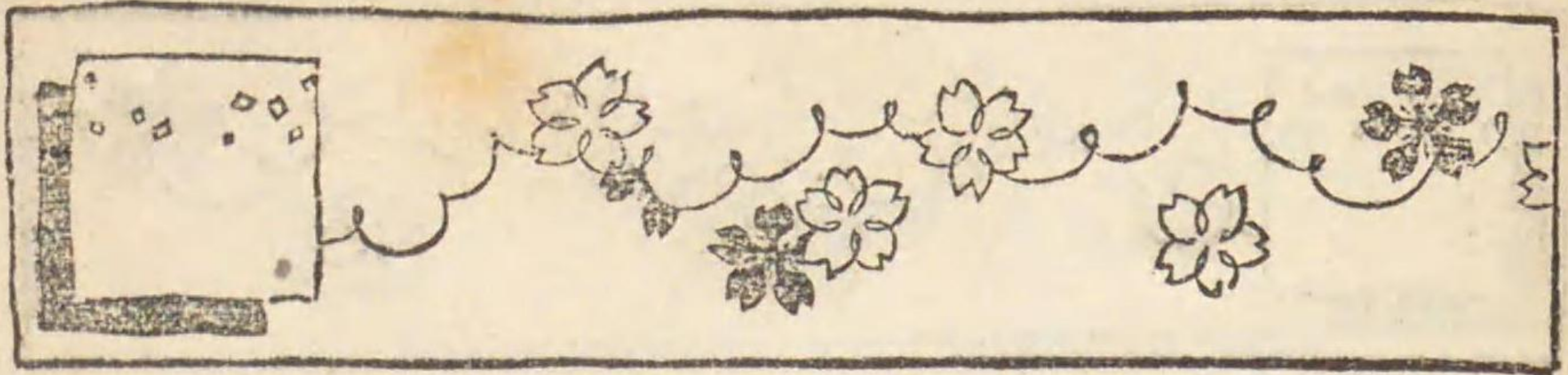
水が顔に小波の皺を寄せて嘲けりますご。

「おやく。天下の大豪傑たる水先生にも似合はぬ事を仰しやるね。僕が鐵砲や刀になるから世界に戦争が絶えないたあ。堅い鐵のお臍だつて茶を沸かさずには居

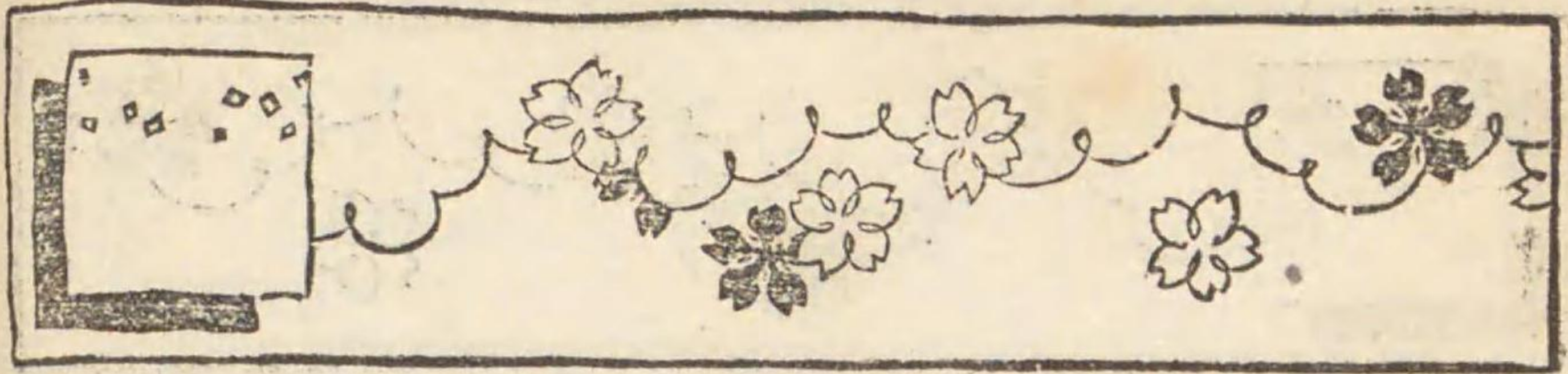


られんね。僕が鐵砲や刀になるから、世界に戦争が絶えぬのではない。世界に戦争が絶えぬから、止むを得ず僕が鐵砲や刀になるんだ。君の云ふ事はまるで反對だ。物騒なのは僕よりも君だらう。君が無暗に洪水なんかを起すから、何れだけ世界の人は迷惑するか知れたもんぢやない。世界の平和を害する發頭人は君だ。鳥渡日が照れば直ぐ水蒸氣になつて仕舞ふやうな弱虫の癖に、餘り威張るもんぢやないよ。生意氣な。」

鐵は少々腹を立てまして、
『君は近頃世界の各國が、争ふて軍艦を作ると云ふ話を



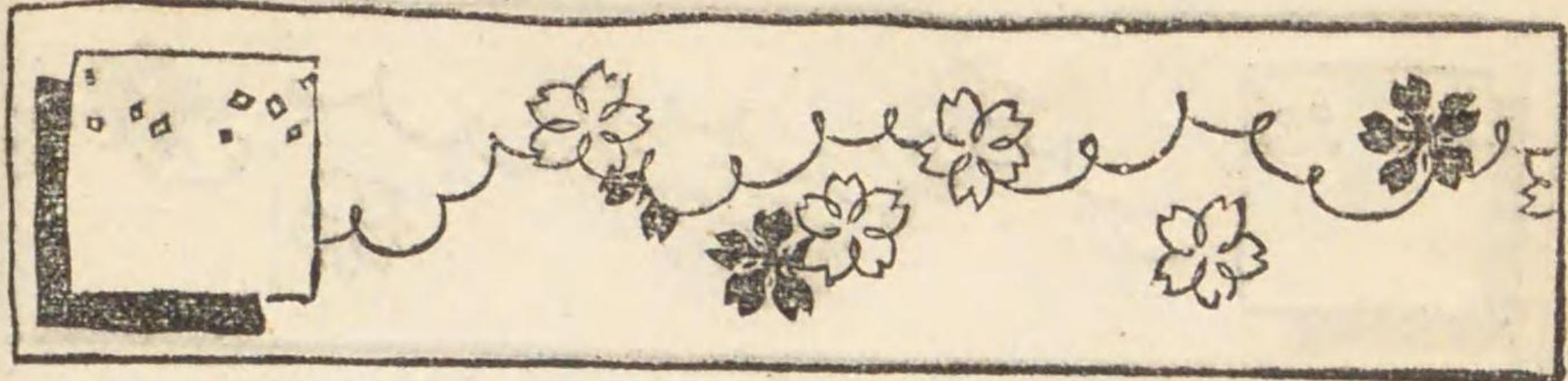
聞いた事があるかね。世界には何時何んな大戦争が始まるか知れたもんぢやないんだ。其時の用意に何の國でも何の國でも、大きな軍艦を作つて置いて、さあ云ふ時海戦を始めるんだ。そして軍艦の中でも一等大切な軍艦は鋼鐵艦だ。お前は其の鋼鐵艦は何で出来ると思ふ。木や竹では出来やあしないよ。カチ／＼山の狸の舟なら土で出来るが、鋼鐵艦は土で出来もしないんだ。其れでは何で出来る。即ち鐵で出来るんだ。一隻何千萬圓と云ふ鋼鐵艦でさへ僕の力がなくては出来なところを考へて見給へ。又水は井戸さへ堀れば何處



にだつて湧出るから、一文なしで百石でも千石でも只だ汲めるが、鐵にはちやんと價段がある。其處も序に考へて見給へ。何方が豪いか直ぐ分る話ぢやないかね。『鋼鐵艦々々と大層八釜敷く吹聴したつて駄目だよ。たごへ一隻何億萬圓の鋼鐵艦を拵へても、水がなくては何うする事も出来まい。山の上や砂原に鋼鐵艦を載せて置いたつて何の役にも立つまい。何うだ水があればこそ鋼鐵艦だつて浮いて居る事が出来るんだ。其れから僕に向つて鳥渡日が照るよ水蒸氣になつて仕舞ふよ云つたやうだが、僕が水蒸氣にならなかつたら、鋼鐵



艦の機關は何で運轉するんだ。銅鐵艦の尻にくつ付いて居る推進器は何の力でグルグル廻るんだ。さあ鐵公鐵先生鐵閣下。グウの音も出まい。(くろがねの舟もたやすく動かして、つよきは水の力なりけり)。ご云ふ天皇陛下の御製をお前は知るまい。水の力の強い事は九重の雲の上まで聞えて居るんだ。水は金で買ふ必要はないの、鐵には價段があるのよ、價段さへあれば豪いものゝやうに心得て居る。只だ水の忘れてならぬ事は團結力だ。何程力が強くつても一滴の水では鋼鐵艦を動かす事は出来ない。何萬滴も何百萬滴もの水が寄つ



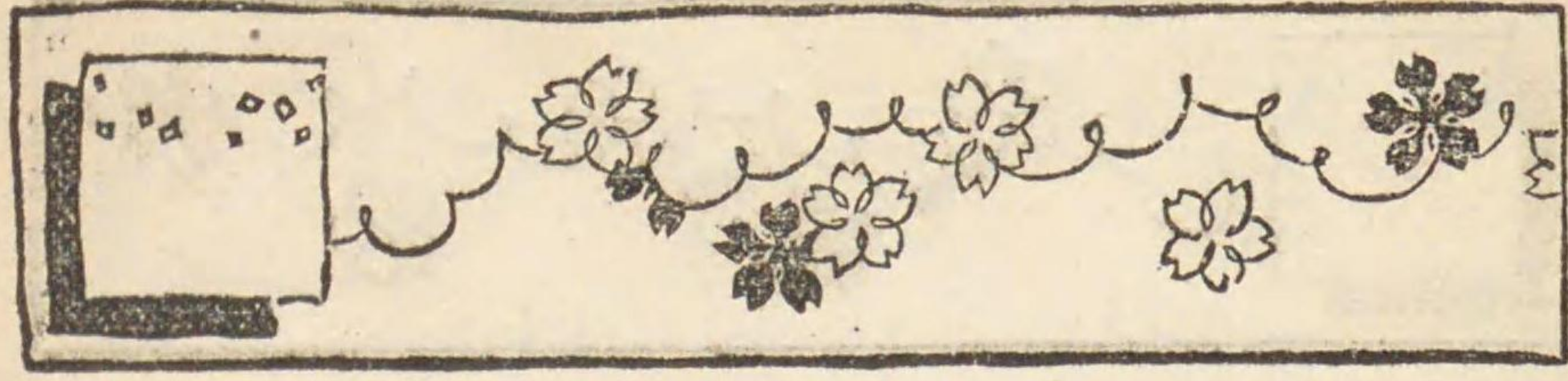
て團結してこそ、鋼鐵艦も動かす事が出来るんだ。こ
 ころで天下に水程團結力に富んだものはなからう。兩
 方から寄りさへすれば直ぐ一つになつて仕舞ふ。何う
 だ恐入つたらう。恐入りましたと云ふのか。其れで僕
 も安心した。最う喧嘩は止さう。決して君を無用の長
 物と云つた譯ではないから、君も安心し給へ。さあ仲
 直りに握手をしよう。』
 と水と鐵とは握手をして別れました。

第十四 若様と雑誌賣

いふせしと思ふ中にもえらびなば
 くすりとならむ草もこそあれ

【譯】うるさい程繁り合ふた草の中にも、能く探し求めたなら、薬
 となるやうな草も交つて居るであらう。と、草の御題で詠ませら
 れた御製であります。

伯爵家に文麿と云ふ若様がありました。學習院中等科の
 二年生で、成績も良く氣質も優しく、末頼母敷き少華族
 だご中々評判の可い若様でありましたが、何うした譯か



華族ご云ふものが大嫌ひで、華族のお友達ごは餘り親しく交際もせず、平民が可い平民が可いご、平民の中からお友達を撰んで交際をしようと思つて居りましたが、平民の中にも文麿の氣に入るやうなお友達は一向ありません。

『平民の子に録な奴が居るものか。君が平民の子ご交際をしようと思ふのは間違つて居るから止し給へ。馬は馬連れ、牛は牛連れご云つて、平民の子には平民の子でなくては交際は出来やあしない。君は華族でも歴々の華族だから、矢張お友達は華族の子でなくては不可

ないよ。』

なごご云つて、文麿に忠告をする華族のお友達もありません。けれど文麿は、

『僕は君達が平民の子、平民の子と云つて直ぐ馬や牛に譬へて云ふから厭なんだ。だから僕は無理にでも平民の子ごお友達になりたい。華族ご云へば名は立派なやうだが、名ばかりは立派な華族でも心が華族でなくては本當の華族とは云へないよ。平民の子の中にも立派な心を持つて居る者があるに違ひない。僕は其んな子供ごお友達になりたいね。』

ご云つて居りました。するこ或る日學校戻りに赤阪見附を通つて居りますと、一人の子供が古雑誌や新しい雑誌やを三十冊ばかり持つて、電車の客に賣つて居るのを見ました。文麈は何の氣もなく通り過ぎようこしましたが不圖その小供は何の爲に雑誌を賣つて居るのだらうご云ふ考が浮びましたから、其の小供の傍に近寄つて、「君は何故雑誌を賣つて居るんですか。學校には行かなくつても可いんですか。」と尋ねて見ました。すると其の小供は丁寧な、「僕は雑誌を賣つて儲けたお金で、お友達に本を買つて

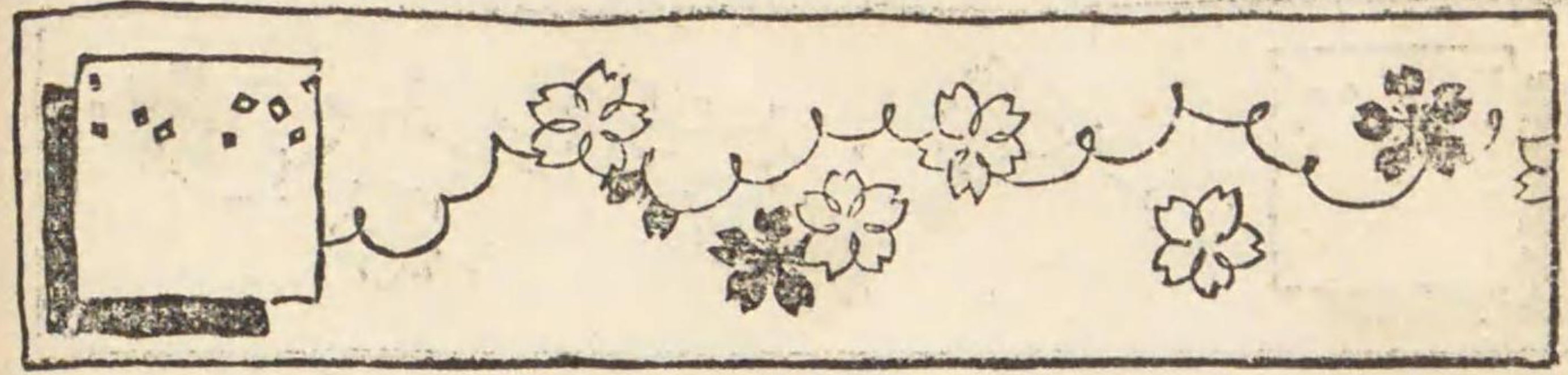
興るんです。」

と答へました。

「お友達に本を買つて興るんですか。お友達には本が買へないんですか。」

「お友達のお父さんが病氣で働けないものですから、お友達は大層貧乏なんです。毎朝納豆を賣つて、其のお金でお父さんに薬を買つて上げて居る程なんです。何うして本など買へるものですか。」

「其れは氣毒ですね。僕も君の雑誌を買ひます。皆で何圓あるご買へますか。」



「皆な買つて下さるんですか。二十八冊ありますから五十銭で買つて下さい。」

「五十銭で賣つて呉れますか。一緒に僕の家に来て下さい。そしてお金を上げますから。」

「文磨が申しますよ、雑誌賣の小供は、」

「ちや行きませう。」

「云つて文磨に跟いて、文磨のお邸に参りました。するも門構の大きなお邸で、伯爵何々云ふ標札が掛つて居るものですから、」

「貴君は伯爵の坊様ですか。」

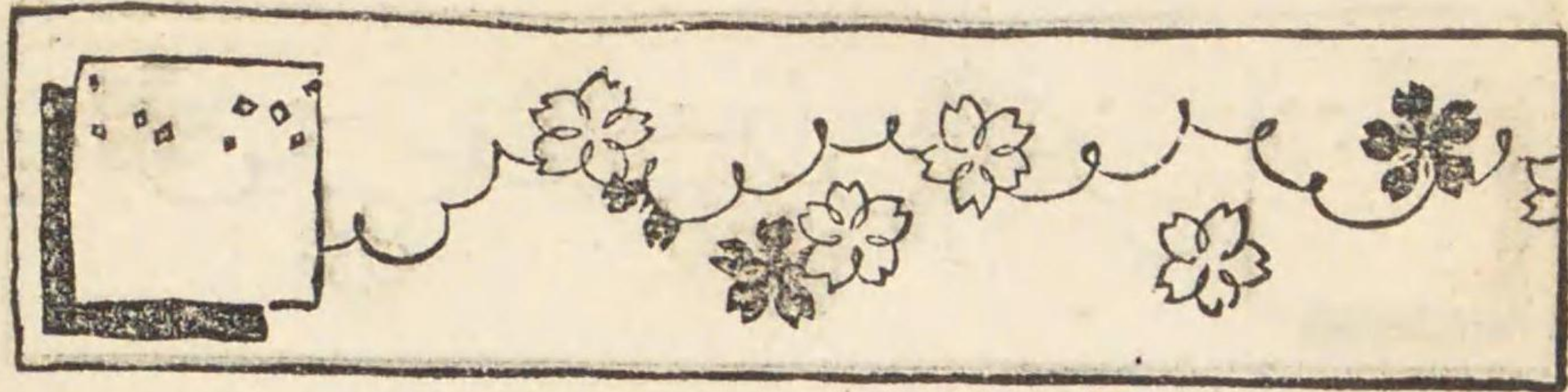


「尋ねますよ、」

「僕の家は伯爵です。けれども僕は華族を餘り好きません。僕の部屋に行つて好きでない澤を話しますからお出でなさい。」

「文磨は雑誌賣の小供を自分の部屋に連れて行つて、華族の子にも餘りお友達にしたい子供は居ない事や、華族と威張つて居るのが大の嫌いである事などを話してから、五圓紙幣を一枚お父様から戴いて来て、」

「五十銭では安いから、五圓で君の雑誌を皆な買ひませう。」



「云つて渡さうごしますよ、雑誌賣の小供は、」

「五圓なんて入りません。五十錢で可いんです。」

「五圓紙幣を文磨に押戻して何うしても受取りません。」

「五十錢でなくては何うしても不可ないんですか。其れ」

は困りますね。ちや雑誌は五十錢で買つて、残りの四」

圓五十錢は君の貧乏で親孝行のお友達に上げませう。」

四圓五十錢で本や鉛筆やノートを買つて上げて下さ」

い。」

「文磨は無理に五圓紙幣を渡さうごしました。雑誌賣の」

小供は暫く考へて居りましたが、」



「其れでは戴きます。戴いて早速お友達に本や鉛筆を買」

つて與りませう。難有う御座いました。」

「ごお禮を云つた時、其の小供の眼から涙が一雫落ちした。」

其れを見た文磨は、」

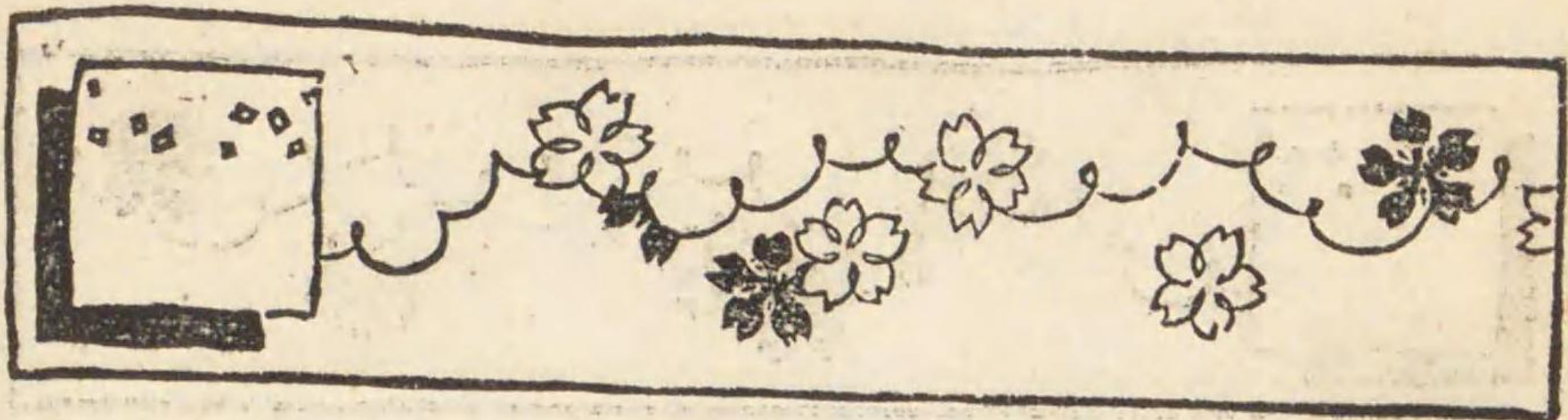
「君は泣いてるんですか。」

「ご申ますよ、」

「はい。餘り嬉しかつたから涙が出たんです。」

「ご袖で涙を拭いて、」

「お友達の親孝行を、神様が感心なさつて助けて下さる」



たんです。」

「答へました。文磨は雑誌賣の小供の心に大層感心して平民の子にも斯う云ふ立派な心を持つた子供がある。斯う云ふ子供なら、お友達にしても決して恥かしい事は無いと思ひまして、

「君は感心ですね。僕のお友達になつて呉れる事は出来ませんか。」

「云はれて雑誌賣の子供は喫驚しながら、

「貴君のお友達にですか。」

「呆顔を致しました。」



「僕は君のやうな立派な心を持つたお友達が欲しかつたんです。天皇陛下の御製にも、(いぶせしと思ふ中にもえらびなば、くすりこならん草もこそあれ)。云ふのがあるでせう。くすりになる草は君のやうな人の事を仰しやつたものださうです。僕は大變君が好きになつて仕舞つたんです。」

「雑誌賣の小供を説付けて、到頭お友達にして仕舞ひました。其れを次の間で聞いて居らつしやつたお父様の伯爵は、文磨の部屋に居らつしやつて、

「何方も感心な小供ぢや。これから仲善くして世の中の



くすり草になるやうにならねばなりません。』

と仰しやいました。文磨は飛上つて喜んで、

『屹度なります。』

と申しますご、雑誌賣の小供も、

『私も屹度なります。』

と云つて喜んで歸りました。

第十五 舊友懇親會

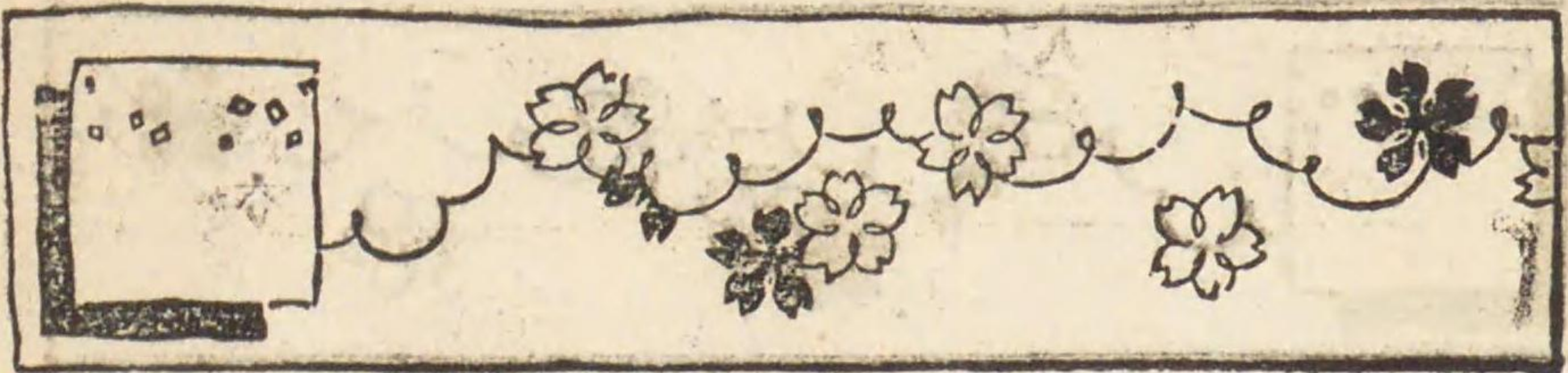
笛となり弓矢となりてくれ竹の

よはさまさまにかはりゆくかな

謹辭 竹が變化して、笛に造られて樂器となつたり、弓矢に造られて武器となつたりするやうに、世の中と云ふものは様々に變つて行くものである。と、竹の御題で詠ませられた御製であります。

廿年前、小學校に通つて居たお友達が三四人、廿年後の或る日、或る處で出逢つて懇親會を開きました。

『やあ久振りて出逢つた。廿年の間に皆を見違へる程變つて居るね。お互ひ廿年間の經歷談でも始めようぢや



ないか。』

「小學校時代有名な腕白者であつた森三郎云ふ青年が申しますよ、一同賛成を致しまして、森三郎から先に経歴談を始めました。」

「僕は其後大學を卒業して、只今は日本銀行に勤めて居る。中學時代に端艇から伊勢灣を横断しようとして、大變な暴風を食つて、今少しの事に溺死する筈であつた。其外には珍らしい話もないよ。」
「笑つて云つて、商人風の孫市を顧見て、君なんか定めて面白い経歴談があらう。一つ聞きたい」



ものだね。』

「いや僕にも餘り面白い事はなかつた。廿年の月日は長いやうで、案外短いものだね。朝から晩まで歩いて歩いて、相變らず鯉節の間屋を遣つて居る、子供が二人出来て、ピーク泣くのを見て、毎年一つ宛年を取つて行くだけだ。」

「日本橋通りの藤澤商會云ふのが君の家ぢやないか」
「森三郎が尋ねますよ、」

「さうだ。僕の店だ。」
「ぢや大成功だ。何うも盛んなものだと云ふ評判だ。」



と皆な孫市の成功を祝しました。孫市は頭を掻きながら。
「何うして中々成功と云ふ譯には行かない。まあ食つて
行けるやうになつたまでだ。」

謙遜を致しました。するご徳松と云ふ青年が口を開い
て、

「同窓生中僕のやうな變化の多い廿年を送つたものはあ
るまい。中學校を二年で止して、叔父に連れられて亞
米利加に渡り、亞米利加で百姓になつて歩いて居る内、
病氣に罷つて死んで仕舞つた。」

「妙な事を云つて居るやないか。死んだ者が何うして

生きて居るんだ。」

「死んで仕舞つて、火葬されようとした時蘇生つたから、
斯うして生きて居るんだ。其れから悪い奴に欺されて
密漁船に乗込んで、北極近くまで漁に行つた。」

「其れは面白い。」

と森三郎が喝采しますと、

「面白いどころではない命懸だつた。鬼のやうな奴等に
交つて、三年も能く殺されずに居たものだ。今思ひ出
すと身慄ひが出るね。」

「さうして今は何をして居るんだ。」